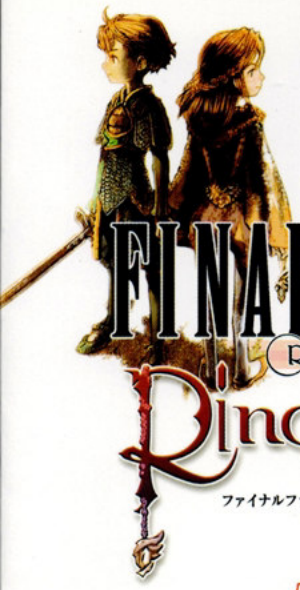

FINAL FANTASY®

CRYSTAL CHRONICLES.

Ring of Fates

ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル リング・オブ・フェイト

僕らの世界 下

工藤 治
KUDO OSAMU

SPECIAL STORY
ファミ通文庫

FINAL FANTASY

CRYSTAL CHRONICLES

Ring of Fates

ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル リング・オブ・フェイト

僕らの世界 下

工藤 治
KUDO OSAMU

Teteo

Gnash

Galdes & Chaspel

ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル
リング・オブ・フェイト

僕らの世界 下

工藤 治

ファミ通文庫

本文・口絵イラスト　イノコ

目次

中　章……5
第五章　神獣に育てられた少年……21
第六章　ミースの救出……95
第七章　癒されるコルカ王……165
第八章　最終決戦……225
終　章……301
あとがき……313

中章

「うっ……ううっ……」

石造りのうす暗い部屋に、苦しそうな男の声が響く。

天蓋とカーテンのついたベッドで眠るその男は、かなり身分の高い男のようだ。

「苦しいのですか……苦しんでいらっしゃるのでしょうね……当然です、あなたは苦しむべきなのですよ、コルカ王――」

苦しむその人は――レベナ・テ・ラのコルカ王であった。

そのコルカ王の耳元でささやく女は、奇妙な印のついた仮面をかぶり、謎めいた雰囲気がある。

「苦しみなさい――死ぬまで苦しみつづけなさい。あなたは、それに見合うだけの罪をおかしたのですから」

その女は、コルカ王の意志を奪うかのように横からささやきつづけた。

「あっ……うっ……テ……テテオ……」

王の口から、娘の名がもれる。それは、レラ・シエルが災害に見舞われたときに命を落とした、王女テテオのことだ。

「そう、テテオ様も憎んでいますよ。あなたが判断を誤ったおかげで、命を落としてしまったのですから――あなたが過ちをおかさなければ、死なずにすんだのに……と、あなたのことをずっと呪っていらっしゃいますよ」

「う……あ……テテオ……す、すまぬ……」

「謝っても無駄です。あなたは苦しみぬくべきなのです。病に倒れたまま、永遠に謝りつづけるのですよ――そうしないと娘の魂は天に召されずに、さまよいつづけることでしょう」

「テ……テテオ……」

王が詫びるようにつぶやいたときだった。

(お父さま……)

その部屋の片隅で見守っていた実体のないテテオの魂が、悲しげにつぶやく。

彼女にとっては、とても見ていられない光景だった。

城主のベッドでやつれた姿のまま横たわっているコルカ王の瞳に以前のような力強い輝きはない。頬はこけ、白髪も多くなっていた。声も嗄れきっている。

「う……あ……わ、わたしは……」

ベッドの天蓋を見つめて懸命に何かを語ろうとするコルカ王の視界に、テテオの魂は移動する。

(お父さま……)

もう一度、父の顔をじっと見つめて呼びかけた。

しかしテテオの声は届かない。

いままで何度か父に話しかけてみたけど、反応はなかった。今日も同じだ。父の痛ましい姿をただ見るだけで、助けることはかなわない。

「さあ、過去など忘れてお眠りください。眠りにつけば、すべて忘れてしまいますよ」

仮面の女がうながす。

それでコルカ王は眠りに誘われたのか、しずかになってしまった。

まるで、仮面の女にあやつられる人形のように見える。

王の寝室に入った時に、はっきりした。コルカ王は、公に発表されたように、病の床にあるのではない。この仮面の女にあやつられるままに病弱な姿をさらしているのだ。

しかし、いまのこの状態から父を救うにはテテオひとりではどうにもならない。

(……待っていてください、お父さま――)

ユーリィたちが、きっと――。

テテオはそれを信じた。いまは信頼できる仲間がいる。彼らに託せば、いつか父を助けだしてくれる――そう信じていた。

仮面の女が天蓋付きのベッドを離れ、王の寝室から出ていった。

テテオはその正体を探ろうと、彼女のあとを追っていく。

豪奢な絨毯の敷かれた通路を歩み、しばらくして彼女は秘密の通路へと入った。

そこから階段をおり、ランタンに火を灯して細い地下道を進んでいく。どうやら王城

からべつの建物へとつながっているらしい。テテオは慎重にそのあとを追いつづける。

仮面の女が向かった先は、王都レベナ・テ・ラにそびえるクリスタル神殿の尖塔（せんとう）――その最上階であった。

王都の民が誰ひとりとして足を踏み入れることのできない聖域である。そこには神殿の最高権力者であるガルデス教皇（きょうこう）と、その腹心のチャスペルがいた。

「コルカ王の状態はどうだ？」

紅い月を望む露台（バルコニー）に立ったガルデスが振りかえる。

その前にひざまずいた仮面の女は、うやうやしく答えた。

「すべては猊下（げいか）の思いのままにございます。コルカ王は病の身であると深く思いこみ、いまだ娘を失った悲しみから立ち直れぬ状態となっています」

「よかろう……いい傾向だ」

ガルデスのその言葉を受けて、

「猊下。このまま病床に臥（ふ）した王であれば、我々の計画も進めやすいというものです」

隣に立っていたチャスペルがよろこびをあらわにする。

「うむ……」

ガルデスはうなずいた。
「太陽祭での月の神の降臨は、誰にも邪魔されてはならぬ。コルカ王が洗脳されたままであれば、我らの野望は誰にも気付かれぬ。よいか――」
「はい」
仮面の女が畏まる。
「ひきつづき、コルカ王の意志を眠らせた状態にしておくのだ。王のそばには、何人たりとも近づけてはならぬ。おまえが王の代わりに執政を務めれば、誰も逆らえぬようになる。王の権力を利用し、すべて我らの思いどおりに進めるのだ」
「かしこまりました、猊下――」
仮面の女が、ガルデスに深く頭をさげる。
(――やはり、そういうことなのですね……)
その場にいるテテオの魂は、彼らのたくらみを聞いていた。
父を利用しようとしていた黒幕は、予想したとおり――ガルデス教皇であったのだ。
彼は神殿の頂点に登りつめたと同時に、王宮を呑みこむ勢いで籠絡した。いまや王宮は存在しているだけで、事実上形骸化している。
お父さま……。
テテオの死が、コルカ王に与えた衝撃は大きい。失意の中でガルデスから送りこまれ

た仮面の女のささやきによって、コルカ王の心はさらに闇に覆われ、永く迷夢をさまよう状態がつづいているのだ。

わたしは何もできない……。

それが悲しくてならなかった。父を助けられないこと、ガルデスの陰謀を阻止できないこと——。

だが、望みは皆無ではない。

テテオはガルデスらのもとを離れ、ユーリィたちの姿を求めて壁を通りぬける。

——彼らの力になることをしよう。

そう思ったのだ。

そのユーリィたちは、王都レベナ・テ・ラに入り、テテオと入れちがいに王城を訪ねたところだった。

「なんだ、おまえたちは？」

王城の門前に並ぶ衛兵が、彼らの歩みを止める。

立ち止まったユーリィたちの中で、年長者のアルハナーレムが前に出てきた。

「王への謁見を希望するのである。この国に関する重要な話なのである」

「国に関する……いったいどんな内容だ？」
「ここで話すわけにはいかないのである。王に直接会って話すのである」
自信にみちたアルハナーレムの返答に、衛兵たちはとまどいを見せ、すこし離れて小声で相談し合う。
やがてひとりの衛兵が、アルハナーレムの前に戻ってくる。
「親書はあるか？　おまえたちの身分を保証する爵位以上の者からの推薦でもかまわん」
「むぅ、ないのである」
アルハナーレムがあっさり答えると、衛兵はすこしびっくりした顔を浮かべたあと、急に態度を変えた。
「ならば、おまえたちのような輩を王に会わせるわけにはいかん。こちらも森での騒動の一件で立て込んでる状況なのだ。さぁ、帰った帰った」
追い払われようとしたとき――アルハナーレムは覚悟を決めたように、
「……わかったのである。身分があればいいのであるな……我が名はアルハナーレム。かつては宮廷魔道師としてコルカ王に仕えていた者である」
「え？」
アルハナーレムが自分の身分を明かしたことに驚いたのはユーリィたちのほうだった。

（アルが……宮廷魔道師？）

チェリンカも驚いたようで、念話で訊ねかえす。

その念話に、アルハナーレムは振りかえって説明する。

「昔の話である。とうに捨てた身分である――」

そして、ふたたび衛兵たちに向き直った。

「さぁ、これなら文句はないはずである。この名をもって王に取り次ぎ願いたい」

「……なにを言い出すかと思えばバカなことを……」

突然、衛兵のひとりが笑いだす。

「な、なんであるか。まだ問題があるのであるか？」

予想外の反応をされたアルハナーレムがあわてると、衛兵は疑いのまなざしに変わって言い放つ。

「アルハナーレム様なら、城の中で討伐隊編制の指揮をとっておられるぞ」

「……へ？」

「ははぁ、さては同じユーク族だからと名を騙ったな。我々がその名を知らぬはずがなかろう。まったく、浅はかなやつだ。さぁ、帰った帰った。おまえたちと遊んでいる暇はないのだ」

衛兵たちは強引にアルハナーレムを王城の敷地外へ追い出そうとした。しかし、衛兵

の話を聞き逃さなかったアルハナーレムは、
「同じユーク族？　ま、まま、待つのである。それはニセモノなのである！」
「偽者はおまえだ――」
「話を聞くのである。それはニセモノなのである。騙されているのである――」
「いや、誰がどう見たって――偽者はおまえだろう。何年も前からアルハナーレム様を知っているが――側近よりその腕を買われ、いまではコルカ王の右腕としてその手腕を振るっておいでだ」
　追い払おうとする衛兵に、アルハナーレムはなおも食い下がる。
「まま、待つのである。ユーク族に同じ名前は存在しないのである。そいつが我が名を騙っているのである！」
「だから、それはおまえだろう。おまえのような輩がアルハナーレム様などと片腹痛い。さぁ、我々は忙しいんだ。帰った帰った！」
「……くっ」
　アルハナーレムは悔しそうに立ち尽くす。
　そのうしろから、ユーリィがやさしく声をかける。
「行こう、アル。出直そうよ」
「ユーリィ、信じて欲しいのである。我は本当に……」

「そんなことはどうでもいいんだ。ぼくたちが生まれたときからアルは一緒にいてくれた、アルだよ――」

ユーリィがそう言うと、隣でチェリンカもうなずいた。

(そんな偉い人より、わたしたちのアルのほうがいい……)

「……我も、いまのほうがいいのである」

アルハナーレムがそうつぶやいたときだ。

王城から、べつの兵が数人ほど駆け足で出てくると、ユーリィたちの脇を通りすぎて街に向かった。

その兵たちは、旗徽や喇叭を手にしているようだ。

「なんだろう……」

「むぅ。王から民への通達のようであるな……我らも行くのである」

アルハナーレムの言葉に、ユーリィたちもうなずいた。

王から民への通達は、街の広場で行われた。

旗徽を持って立つ兵の横では喇叭が高らかに吹奏され、人々を呼び集める。その前で、ひとりの兵が通達文を読みあげた。

「静まれ！　王よりの通達である――知ってのとおり、深淵の森をはじめとする異常は、いまや森林地帯に広がっている。森では凶暴化した生物が徘徊し、植物までが人を襲う非常に危険な状態だ。そこで原因の解明と安全確保のため、討伐隊が編制されることになった。これに際してレベナ・テ・ラでは森に関する情報を広く募集する。何か知っている者は城へ来てくれ。王みずからが謁見し、耳を傾けてくださるそうだ。貴重な情報には報奨金が与えられる。また、安全が確認されるまで森林地帯は危険地区とし、一般人の立ち入りを禁止する――以上だ！」

通達を聞いて、街の人々がざわめきだす。皆、おそれを抱いた声だ。

そんな中で、アルハナーレムがつぶやく。

「ふむ、知らない間に森がそんなことになっていたとは……ここも物騒になったものであるな。ふたりも気をつけ――」

「森だってさ。じゃあ、行こうか」

（うん、がんばろうね――）

チェリンカがユーリィにうなずきかえす。

アルハナーレムが注意を促したのに、ふたりはべつのことを考えていたらしい。

「ま、ままま、待つのである。話を聞いてなかったのであるか？　ここの兵ですらたどり着けなかったほど危険な場所なのである」

アルハナーレムがあわてて言うと、人ごみの中を歩きだしたユーリィが振りかえった。
「いや、だって情報とか知らないし、それがないと王様に会えないんでしょ？」
「う、うむ……そうである」
「森を調べる、王様に会える、会ったら神殿のことを言う。ほら、簡単――」
「であるが、ダメである。危険である。却下である」
アルハナーレムは、なんども首を振りつづける。
だが、ユーリィは動じずに言った。
「アル、ぼくたちがやろうとしていることはもっと危険なことだよ。ぼくは逃げないし、生き残るためならどんなことでもする。あきらめないよ、絶対」
言いきったその目を見たとたん、アルハナーレムはぞっとするほどの凄みを感じ取る。死に直面するような過酷な状況を乗り越えた者だけが持ち得る気魄を、ユーリィが漂わせたからだ。
すでにユーリィは、アルハナーレムも知らなかったところで相当な覚悟を心に刻みつけてきたのだろう。
その一端を帯びた眼光を射こまれたことで、アルハナーレムは全てを察したうえで言いかえす。
「ぐ、むむ、むむむ――わかったのである。行くのである。でも、マズイと思ったら

すぐに引き返すのである。突き進むだけが勇気ではないのである」
「……うん、そうだね」
ユーリィは納得してうなずいた。

テテオの魂は、騒がしい街の広場の上空からユーリィたちのことを見守っていた。
彼らは、たくましく成長している。
はじめてユーリィたちを見たのは——テテオが命を落としたとき、闇の中で赤ん坊の泣き声を聞いたときだった。
それは生まれたばかりの双子の声。
男の子と女の子だ。
ひとりはテテオと同じクリスタル使いで、その名はチェリンカ。そして男の子のほうは、ユーリィと名づけられた。彼は、クリスタルの力を使う『意志』となるのだ。
クリスタルから力を授かるための役目を分けあったユーリィとチェリンカは、その後に訪れた数々の試練を乗り越えてきた。
母親のアーチェスとの別離、父親のラトフの死……。
さらにクリスタルの力を過(あやま)って使ったふたりは、その代償をチェリンカが受ける形で、数年間別れ別れの状態に陥ってしまう。

そんな語りきれないほど多くの過酷な状況が、ふたりの前に立ちはだかった……。

でも、ふたりは屈しなかった。

双子としての結びつきの強さと、亡き父からの教えのおかげで、彼らはあきらめずに苦難と向き合ってきたのである。

ようやく双子としてともに暮らせる状況に戻ったユーリィとチェリンカは、囚われの身だったアルハナーレムを救いだし、いまは新たな一歩を踏みだしている。

そんな彼らを——これからも変わらず、テテオは見守りたいと思った。

第五章　神獣に育てられた少年

深淵の森で出会った少年……。
少年の過去を知るわたしは、彼とユーリィたちとの出会いを願っていました。
ユーリィたちが深淵の森をめざすいま、その機会がめぐってきたのかもしれません。

1

深淵の森をめざす途中で、ユーリィたちは野宿することにした。好都合にも荒野の一角に岩場があったのだ。

ここなら隠れやすくて、敵にも見つかりにくい。敵というのは神殿のやつら――とくにユーリィたちの父を殺したチャスペルと、その配下の神官たちのことである。

満天の星空の下、篝火を焚き、交代で眠りにつくことにした。いちばん先に休むことになったのはチェリンカである。

本人は寝ずの番をやるつもりだったが、疲れていたらしい。横になっているうちにいつのまにか深い眠りについていた。

その夢の中で、チェリンカは久しぶりの再会を果たす。

あのクリスタルレコードに連れていかれたとき以来だろうか――いつもユーリィたちを見守ってくれている、高貴な法衣をまとった女の子である。

（……いままで、どこに行ってたの？）

闇の中に浮かんだ光り輝く彼女に、チェリンカは思わず話しかけた。――そういえば、このところ彼女の姿を見かけていなかったように思える。

チェリンカのその問いに、少女は笑顔を見せた。

（じつは……友だちができたのです）

（えっ、友だち？）

（はい）

光り輝く彼女は、チェリンカにうなずく。

（その友だちは、皆さんがこれから向かわれる深淵の森に住んでいます）

（深淵の森に？）

（はい。もし会うことができたら、きっと力になってくださると思います）

（力に……）

チェリンカは夢の中でつぶやく。

――どんな人なんだろう。

興味を抱いたチェリンカはくわしく訊ねようとしたのだが――闇の中に浮かぶ彼女は、すぅーっと消えてしまった。

（あっ、待って……）

呼び止めようとしたが――彼女の姿は、もう闇に溶けこんでしまっている。
結局、それ以上は訊けずに夢は終わってしまった。

翌朝――チェリンカが目覚めると、もうユーリィとアルハナーレムは出発の準備をはじめていた。
（ごめんなさい――）
寝ずの番もせず、ひとりだけ寝すごしてしまったか。チェリンカは飛び起きて謝ったが、ユーリィもアルハナーレムもとくに問題なさそうに笑ってかえしてくれる。
王都で仕入れた保存食で朝食を終え、さっそく深淵の森へと旅立つ。
やがて地平線の彼方に、森林地帯が見えてきた。

2

その名のとおり、深い森だった。
苔や雑草があたり一面に生い繁り、蔦のからまる樹木は呆れるほどにどこまでもつづく。奥深いところでは樹冠の層も厚くて、陽光も届かない。繁みも深く、それは身の丈

以上の高さにおよぶところもあった。

まさに鬱然たる様相をきわめる密林地帯だ。

「はー、なんだここ……」

しばらく歩んだユーリィが、たまらず口を開いた。

(これ、森とかじゃなくて……)

隣を歩むチェリンカは、念話で答える。

「まるでジャングルであるな。おかしいのである。以前はこんな場所ではなかったのである……」

アルハナーレムの言うとおり、この森は様子が変だ。

ユーリィは立ち止まって、あたりの様子に目を配る。

まず、動物の姿を一回も見かけない。鬱然としているのに音がほとんどせず、どこか死んだ森のような雰囲気を漂わせている。

もっとも不気味なのは——見ているだけで目がちかちかしてくるような発色のきつい花が、あちこちに咲いていることだった。その花のせいなのか、あたりの空気もよどんでいるように思える。

(なんか変な匂い……)

チェリンカが警戒しながら言う。

「うん、甘ったるくって……何だか気持ち悪い匂いだね」
ユーリィがうなずくと、アルハナーレムがふいに訊ねてきた。
「――なぜ、うれしそうなのであるか？」
「えっ、べつに嬉しくなんか……探検とか、そんなこと考えてないよ？　もう子供じゃないんだし」
ユーリィが答えると、
（ふふ……）
チェリンカが笑っている。
どういう意味で笑っているのだろう――ユーリィが、そのことをチェリンカに訊こうとしたときだ。
「がるるるるっ！　ぎゃん!!　がう？　フーッ、フーッ……」
突然、少年の声が繁みの向こう側から響いてきた。
「――っ！」
はっとしてユーリィたちは、その声がした繁みの中に飛びこんだ。繁みの向こう側へと急ぐ。
繁みをぬけると、半裸の少年が花の怪物と闘っているところだった。
「あれは――」

ユーリィは目を見開く。
自分よりも年がすこし上の、セルキー族の少年だった。
花の怪物は少年より丈が高く、真っ赤な花びらを大きく開いている。そこから黄色の粉が、空中に吐きだされている。すでに少年は、その粉を全身に受けてしまったらしい。
「む、まずいのである。あのセルキー、毒を受けたようである。動きが鈍いのである」
「助けよう!!」
ユーリィはアルハナーレムにそう言ったあと、剣をぬいて花の怪物に突進した。
花粉の飛んでこない風上に移動し、剣で太い茎をブッた斬る。それをアルハナーレムが魔法の杖からくり出す炎で焼き尽くす。
あっという間にセルキー族の少年を、ユーリィたちは助け出すことができた。
しかし、
「フーッ、フーッ!」
毒におかされた少年は動揺して、もがきつづける。
「おとなしくするのである。毒が回るのである」
「がぅ!」
押さえつけようとしたアルハナーレムに、半裸の少年は咬みつこうとした。かなり警戒している様子だ。

「むぅ――」

仕方なくアルハナーレムは少年から離れた。

入れ替わるようにチェリンカが、その少年に近づく。

(大丈夫だから、じっとしててね……)

やさしく声をかけ、片手を彼に向かってかざす。その手のひらから光が発して、少年を温かく包んだ。

すると、暴れていた少年が徐々におとなしくなっていく。

「うが？　……がう」

(はい、もう大丈夫だよ)

チェリンカは笑顔になって、手をおろす。少年の体内に入りこんだ毒は、すべて消滅してしまったらしい。

「――？　か、からだ……かるい……何した？」

落ちつきを取り戻した少年が訊くと、声を出せないチェリンカに代わってアルハナーレムが説明した。

「魔法で毒を中和したのである。もう心配ないのである」

(よかったね、セルキーさ――ええと、あなた名前は？)

チェリンカは心の声で、少年に話しつづける。

それは聞こえないはずなのに、
「――？　な――まえ？」
少年が反応を示した。
毒花の怪物を倒して見守っていたユーリィが、はっとして彼に訊く。
「チェリンカの声が聞こえるの？」
「なに、言ってる、わかる当たり前、言葉だけ、人間くらい――なまえ――ある。待て、思い出す」
「思い出すって……」
ユーリィは唖然とした。ずいぶん変わった男の子だなと思っていると、アルハナーレムが横から話しかけてくる。
「なんというか――いくらセルキー種とはいえ、これでは野性的をとおり越して、ただのケモノであるな」
「……」
だとしても、何か事情があるのではないだろうか。
ユーリィがそんなことを考えていると、
「な……なっしゅ……そう、ナッシュだ。おれ、ナッシュ！」
ようやく男の子が、自分の名前を思い出した。

人と話すのが苦手なのか、それとも久しく誰とも言葉を交わしていなかったのか――。
いずれにしろその半裸の少年は、やっと話の本題に入った。
「おまえたち何しに来た？　ここ、きけん、はやく帰れ――」
「ぼくたちは森の異変を調べにきたんだ。危険なのはわかってる」
「よし、なら帰れ」
ナッシュとやらは結論を急ぐ。
ユーリィは呆気にとられたが、すぐに言いかえした。
「けど――このまま帰るつもりはないよ。そうしないといけない理由もある」
「わかった、おまえたち助けてくれた――こんどは、おれ助ける。森の民、恩は忘れない――」
突然、ナッシュはあっさり前言をひるがえす。そこから彼は、よくしゃべるようになった。
「森、ヘンになったの、この奥、ヘンな花、はえたから――。そのヘンな花、ヘンな煙はく。ヘンな煙をすう、みんなヘンになる」
「じゃあ――そのヘンな花が、原因？」
ユーリィが訊ねると、ナッシュはうなずきかえす。
「そう、だからそれ退治する。森、もと戻る。この奥、おまえたちだけじゃ無理。おれ

にまかせる！」

と言って、ユーリィたちを案内するように森の奥に向かって歩みだした。

ユーリィたちは互いに目を合わせ、彼について行こう——と決めて、ナッシュのあとにつづく。

ふたたび、森の奥をめざして歩みだす。

そんな一行を見送っていたのは、宙に浮かんだテテオの魂だった。

テテオは、ユーリィたちの先頭を歩むナッシュの姿をまぶしそうに見つめていた。

立派に成長されて……。

彼の過去を知っているだけに、そう思うと感慨深い。テテオがそのような感情を持つのは、彼がこの森で生きてきた約六年間をともに過ごしてきたからでもある。

偶然にも過去にさかのぼり、まだ九歳ぐらいの幼いナッシュと出会ったテテオは、彼の境遇を知って驚かされた。

そのときのナッシュは故郷の村を失い、たったひとり生き残ったのである。なのに、その辛さをひとつも顔に出さず、懸命に生きようとしていた。

テテオはナッシュのことを励まそうとしていたのだが、逆に彼の生きようとする姿に

自分のほうが励まされてきたように思える。
そんな彼がユーリィたちと知り合い、協力を申し出てくれている。
なんと心強いことだろう……。
テテオはうれしく思うと同時に、そのナッシュと出会ったときのことを思いかえす。
あれは、ちょうど——あの場所で、チェリンカと別れたあとのことである。

3

それは、果てしない天体が広がる世界でのこと。
「ありがとう……わたし、ユーリィのもとに帰ります——」
クリスタルレコードの中で、チェリンカはテテオに言った。
広大な空間に、格子状に連結された小さな星々が見える。ふたりはそれに囲まれた中で、向かいあうようにして立っていたのだ。
テテオは、彼女の復活をよろこんだ。
負の意志による、力の発動……それはクリスタル使いとしての過ちだった。
父を目の前で殺されたことで、チャスペルという敵に対して芽生えた殺意——それが負の意志としてクリスタルに伝わったとたん、チェリンカはその代償を身に受けること

で、数年に及ぶユーリィとの別離の状況に陥ったのだ。

そこからようやく、もとに戻れる時がきた。

チェリンカはみずからの意志で、ユーリィが待つ世界に帰ろうとする。片手をあげ、意識を集中させたらしい。周囲に張り巡らされた数珠つなぎの小さな星のひとつが分離し、チェリンカのもとに旋回しながら舞ってくる。

そしてその小さな星が、チェリンカの胸に輝くクリスタルのペンダントと合わさった瞬間——彼女の姿が、すっと消えた。ユーリィのいる世界へ旅立ったのだ。

(チェリンカさん……よかった……)

見送ったテテオが安堵の表情でつぶやく。

これで、おふたりも元どおりになる。またいっしょに歩んでいくことができる……。

それがテテオにとって、何よりもうれしいこと。

(では、そろそろわたしも戻ります……)

早く戻って、ユーリィたちが再会する場面に立ち会おう。

テテオは数珠つなぎになった星たちに注目する。その中に、小さなまたたきがあった。

またたく星に近づいて、光の中に入れば、チェリンカが戻っていった場所——ユーリィたちの家の中にたどり着くことができるのだ。

テテオが小さくまたたく星に近づくと、光は一気に拡大し、テテオ自身を覆い尽くし

ていく。

しかし突然――鬱蒼とした密林の上空に、テテオは舞いおりた。

（えっ？）

光の中をぬけたとたん、とまどいをおぼえる。

眼下に広がる光景は、ユーリィたちの暮らす集落ではなかった。どこまでもつづく原生林だったのだ。

（ここは、どこなのでしょう……）

何をまちがえてしまったのだろう。あの集落がある山間部とは、場所がまるでちがう。荒涼たる地とは、おそらくべつの場所だ。

テテオは不安になりながら幾層にもなった樹冠をぬけ、森の大地へ舞いおりた。

森には行く手を阻むように巨木が立ち並ぶ。その隙間を埋め尽くす繁みも深く、あたりの大地はほとんど覆い隠されていた。

テテオは原生林の真っただ中で、呆然とする。この密林にみたされた空気から、なんとなく、めざしていた時代より過去に引き戻されているように感じられた。

どうして過去の世界に……。何か理由があるのだろうか。

その答えを探ろうとすると、すぐ近くにいる何かの気配を察した。

（えっ……あれは……）

遠くの繁みが、ざわざわとうごめいている。動物だろうか——いや、人のようだ。魂だけの存在ゆえに、はっきり感じとれる。

誰だろう。もっと近くによって確かめてみよう。そう思ったときだ。

（——っ！）

テテオは自分の足元に、大蛇が巻きついているのに気づく。ぬめぬめと動くその大蛇は、まるでテテオの足に絡まっているかのようにとぐろを巻いていた。

偶然にもそう見える場所で、とぐろを巻いていたらしい。もちろんテテオが足を動かせば、巻きついた大蛇から簡単に足はすりぬけてしまう。

（……ふぅ……）

ほっとしてテテオは苔の生えた地面からわずかに宙に浮かびあがり、前に進もうとした。すると、こんどは顔の前を蜂がブウゥンと横切る。

（な、なぜ？）

その蜂はテテオの前を通りすぎたかに思えたが、旋回してまた顔の前に戻ってくる。まるで、テテオがそこに存在していることをわかっているかのようだ。突如あらわれた侵入者を威嚇でもしているのだろうか。

（まさか……でも……）

蜂は目障りなほどテテオの顔の前を、なんども旋回する。こんなことは生前に王宮で暮らしていたテテオには、まったく経験のないことだ。

（や、やめて……）

振り払おうにも、実体のないテテオの腕は蜂に当たらず、すりぬけるだけ。逆にいえば、自分も蜂からの被害を受けないですむのだから、気に留めるほどのことでもないのだが——ふしぎなことに生きていたときの感情が戻って、誰かに助けを求めて悲鳴をあげたくなるような衝動にかられる。

と、そんなときだ。

近くによっていた繁みの中から、いきなり少年の顔が飛び出してきた。

（きゃっ！）

テテオは、ほんとうに生きていたころと同じように悲鳴をあげてしまう。

繁みから少年が飛び出したおかげで、テテオのまわりを旋回していた蜂は驚いたのか、どこかへ飛び去ったようだ。

その飛び出してきた少年は、いきなり弓をテテオに対して構えた。それを見たテテオは凍りつく。

——わたしのことが見えるのですか？

少年のその態度を見ていると、そうとしか思えない。弓を構えたまま、まっすぐにテテオのことを見据えているのだ。

（おい――）

突然、その少年が念話で声をかけてきた。

（は、はい）

テテオはすぐさま返事する。念話まで通じる相手だったとは思わず、驚いてしまう。

（じゃまだ――）

弓を構えた少年が言う。

意味がわからず、テテオはきょとんとした。

（そこにいる、おれの矢――当たる。いいのか？）

（えっ……）

テテオは少年に言われて、うしろを見る。

繁みが、がさごそと動いていた。その中に動物がいるらしい。わかった――少年は、弓矢でそれをねらっていたのだ。

（ご、ごめんなさい――）

あわててテテオは場所を移動した。

その直後、少年は矢を放つ。

シュン！

木の枝を粗く削っただけの、簡単な造りの矢が繁みの中に飛びこんでいく。

繁みがそのあとに激しく揺れ動き、驚いた動物が走り去っていく気配が伝わってきた。

どうやら少年が放った矢は外れたらしい。

（くそっ……）

少年が舌打ちする。

その男の子は年が九歳くらいで、野生児のようだった。のび放題のざんばら髪をうしろで結い、裸の上半身には小さな木のお守りを細い綱でつくったズボン吊りに括りつけている。この森で生まれ、ずっと暮らしているような雰囲気があった。

（獲物、逃がした……）

その少年は悔しそうに見送っている。

（……ほんとうに、ごめんなさい……）

テテオは素直に詫びた。

すると彼は、またテテオのほうに目を向ける。

（何、してんだ？）

少年にそう問われて、テテオは思い出したように訊きかえす。

（あの……ここは、どこなのでしょう？）

（……ん？）

少年はテテオの質問に目を丸くした。予想もしなかったことを聞かれたというような顔で、テテオのことをしげしげと眺めている。

（わ、わたしの姿が見えるのですか？）

（……ちょっとだけ、な）

（ちょっとだけ……）

（カオ、よく見えない……）

彼はそう言いながらテテオに近づいて、顔をじっとのぞきこもうとする。

テテオは少年の顔が近づいて、何だか恥ずかしい気がした。こんなにまじまじと見つめられたことは、いままでになかったからだ。

さらに彼の顔が近づいて——とまどっていると、

（あんた、森のセーレェさま？）

（えっ……精霊？）

どうやらテテオのことを——この森に棲む精霊だと思いこんだらしい。

（セーレェさまでも、困る。わかった……おれ助ける。ついてこい！）

少年はひとり納得し、森の中を堂々と歩きだした。

（あ？　待ってください——）

テテオは宙を舞って、少年のあとを追う。

連れていかれたのは、森の奥にある小さな滝の前だった。

その滝の流れ落ちるところには泉ができていて、下流へとつながっている。そして泉のまわりには色とりどりの花が咲いて、あざやかな光景をつくりだしていた。

少年は、泉の岸辺から滝の岩壁に近づくにつれて増える岩場を、ぴょんぴょんと跳びはねていく。やがて滝の脇にある岩壁にしがみつくと、うしろを振りかえるなりテテオに言った。

（コシンなら、森のこと何でも知ってる――コシンに聞けばいい）

そう言って岩壁をのぼりだす。のぼりながら、流れ落ちる滝の裏側へと入っていく。どうやら滝に隠された岩壁に、洞穴があるらしい。

テテオは滝をすりぬけて、その洞穴の中に入っていく。そこにはすでに少年が立っていて、さらに奥へと進んでいくところだった。

少年の向かう先には、洞穴が大きく広がった空間がある。中央には一段高くなった台座のような平べったい岩が存在した。

そこに丸まって寝ている動物がいる。巨大な犬のような感じだ。黄金色に近い毛に覆

われ、尻尾はなぜか四本もある。長くて途中が太くなった独特の形をした尻尾だ。
そんな動物は、テテオも見た記憶がない。ふしぎな外観だった。
（コシン！　セーレェさま、連れてきたぞ――）
少年は心の中で、その動物に話しかける。
コシンと呼ばれた動物は、貌をゆっくりあげてテテオのほうに視線を向けた。
そのあたたかみのある、やさしい貌つきに――テテオは驚く。
――これは、もしかして神獣？
テテオの予感は当たった。
そのコシンも、念話でテテオに語りかけてきたのだ。
（これは珍しいお客だ。こんな辺鄙なところにわざわざくるとは、何か理由があってのことだろう――遠慮せず、ゆっくりしていくがいい）
（は、はい。ありがとうございます）
テテオは、はじめて見た神獣に緊張をおぼえながら答える。
（わたしの名はコシン。察しのとおり、神獣だ。この森を守ってきた――そしてこちらの少年は、ナッシュ――）
コシンが少年のほうに目を向けて言う。
（ナッシュは疫病に見舞われた村の、唯一の生き残りだ）

（えっ……）

テテオは、そのナッシュという少年をあらためて見る。彼は、まるで他人ごとのように平然とした顔で聞いていた。

それをよそにコシンの話はつづく。

（伝染病に倒れていった村人たちの中で、このナッシュだけが病に負けなかった。親も仲間も失ったのに、ひとりだけ平然としていた……わたしは、その生命力に惹かれ、彼を預かることにした）

（そうでしたか……）

テテオはナッシュの境遇を知って、悲しげにつぶやく。

だが、当事者のナッシュには不幸を背負っているような雰囲気は微塵もなかった。

（あれ？　セーレェさま、泣いてるのか？）

と、あっけらかんと聞いてくるほどだ。

テテオがそれに対してどう答えたらいいか迷っていると、

（おれ、弓の手入れ――）

いまのこの話題をわずらわしく感じたのか、それとも飽きたのか。ナッシュはコシンの前から、脇のほうに移動する。そして地面に座りこむなり、手にしていた弓を点検しはじめた。

（……）

テテオは、彼の様子をじっと見守る。

ふしぎな少年だと思う。仲間や親を失ったというのに悲しそうな顔をいっさいしない。どこか悠然としているというか、それとも鈍感といったほうがいいのだろうか――。

彼の様子からうかがえるのは、起きてしまったことを感傷的に振りかえろうとしない心の強さだ。

いままでに見たことのない種類の少年だ。

テテオは彼のことがとても気になって、しばらくこの世界にとどまろうと決心するのだった。

4

その日の昼すぎになって、コシンは寝ていた岩の台座からようやく起きあがった。身を起こすと、より大きく見える。その巨軀は、洞穴の中が狭く感じられるほどだ。

コシンが出口へと向かうのを見て、

（狩りか？　待ってたぞ！）

弓の手入れをつづけていたナッシュが、よろこんで立ちあがる。弓を片手に、地面を

蹴ってコシンの背中に飛びのった。驚くほどに身が軽い。
ナッシュはコシンの背で、ふさふさの毛をつかんだ。
（よし、いいぞ！）
ナッシュのその念語を合図に、コシンは洞穴の出口に向かって跳躍する。
水の幕となった滝を突き破って、ナッシュを背に乗せたコシンが外に飛び出す。
テテオもそのあとを追った。
外に飛び出したコシンは泉の上を越えて、その岸辺に着地する。それからものすごい勢いで森の中を駆けていく。
テテオは、あわてて宙を走って追う。まるで疾風（はやて）のようだ。乱雑に立ち並ぶ樹間を目にも止まらない速さですりぬけて、進んでいく。空中で自由のきくテテオですら見失うのではないかと思ったほどだ。
やがて森の広場のような空間にぬけでた。
青々とした草原が広がり、真ん中を横切るように断層がある。しかしそれはゆるやかなもので、ここだけが動物たちの平和にすごせる場所のように思えた。
平和といっても、それはコシンとナッシュが到着するまでのあいだだけの話だ。
コシンはナッシュをおろすと、自分だけ先に狩りをはじめた。その巨軀が鹿の群れを追跡する。

あわてて森の中に逃げ込んでいく鹿の群れにナッシュは弓を構え、次々に矢を放つ。しかし、どれも当たらない。鹿の動きが速すぎるせいもあるが、やはり九歳の子供が弓を引くには力の限界もあった。

放った矢は鹿に届かず、どれも途中で繁みの中に落ちてしまっている。

(くそっ、なんでだ!)

ナッシュは怒りをあらわにして、コシンのあとを追うように森の中へ駆けこんだ。そこでも矢を放つのだが、結果は同じである。

結局、狩りが終わって——収穫を得たのは、逃げ遅れた鹿を追いつめてしとめたコシンだけであった。

(なんで——これっぽっちだ?)

洞穴に戻って、ナッシュは不満を口にした。

コシンが捕らえた獲物の肉を、ほんのわずかしか分けてくれなかったからである。

(ナッシュ、おまえは狩りに失敗した)

(くっ——)

獲物の肉を食べ終えてしまったナッシュは、恨めしそうにコシンをにらみかえす。

（明日も失敗すれば――分け与えるのは今日の半分だ）
「う……うがぁーっ！」
（失敗がつづけば、どんどん少なくなる）
「ぐがあっ！」
ナッシュは怒りのあまり、うなり声になっている。
（そうなりたくないのであれば、早くひとりで狩りに成功することだ。自分の食べる分は、自分で捕らえてくる――この森で生きぬくための掟だ）
（……）
その話には同意しているのか、ナッシュは黙りこむ。
しかしすぐに、
（ふんっ！）
と言って、コシンに背を向ける。そうとう悔しいらしい。
テテオはそんな彼に、何も話しかけられずにいた。
というより、絶句していた状態に近い。
狩りで獲物を捕らえ、それを喰らう――。
生前、王宮育ちだったテテオには縁遠い暮らしだ。それを目のあたりにし、圧倒されていたのだ。

彼らにとっては当たり前の生存競争であっても、王女として恵まれた環境にいたテオには、刺激の強い場面ばかり続いていたのである。

(どうした——ナッシュ？　今日は、わたしに飛びかかってこないのか？)

コシンが、背中を向けて座りこんでいるナッシュに問いかけた。

(いつもなら怒って、わたしを食ってやると襲いかかってきたはずではないか)

(おれ——ハラ減ってる。動きたくない！)

(それは、わたしに負けるからか？)

(ンなこと、ない！)

ナッシュは立ちあがる。しかし、コシンに飛びかかろうとはしない。中途半端な怒りになりかかっていた。

(わたしに挑む勇気さえ、失ったのか？)

(ちがう！　おれ、勇気ある!!)

ナッシュが怒りを爆発させるように答える。

(……ならば、その勇気を見せてもらおうか。ついてくるがいい——)

岩の台座で横になっていたコシンは身を起こし、洞穴の出口へと向かった。

ナッシュは怒った顔で、そのあとにつづく。

——これから何がはじまるというのだろう？

テテオも気になって、彼らについていった。

コシンがナッシュを導いていったのは、棲家の上――滝が流れる岩壁の上だ。岩がむきだしになったそこは、山から流れてくる川が滝へと流れを変える場所でもある。その岩の上に立ったコシンが、ナッシュに振りかえった。

（――ここから飛んでみろ）

ぞんざいにそう告げて、場所をナッシュに明け渡す。

――いくら身の軽いセルキー族とはいえ、子供には無理です。

さすがにテテオは止めようかと思った。

しかしナッシュは、コシンのいた場所へと歩みだす。その隣を激しい勢いの滝が、眼下の泉へと流れ落ちていく。

そこへ飛びこめと言うのだからおそろしい話だ、とテテオは思った。

ナッシュは無言で、滝の下を見おろしつづける。

（どうした、飛ばないのか？）

（……）

ナッシュは何も答えない。そこは、五階建ての建物と同じくらいの高さはゆうにある。

（その程度の高さも飛べないのなら、おまえには勇気がない）

コシンがそう言い放った直後だ。

（うおおおおおーっ！）

ナッシュは雄叫びをあげ、岩場を蹴って飛んだ。

（――っ！）

テテオはどきりとした。あまりにあっさり、ナッシュは飛んでしまったのだ。

（ナッシュさん！）

突然のことに動揺した、彼の身を案じて、テテオはあとを追う。

滝の下に舞いおりると――すでに泉に落ちて沈んだナッシュの姿は見えない。テテオはあわてて水面に近づき、彼の姿を探しまわる。

（ナッシュさん？　ナッシュさん？）

しだいにあせってきた。

まさか――という、いやな予感がよぎる。

だが、

（ぷはぁ～～～～っ……）

泉の水面をいきなり突き破って、大口を開けたナッシュが顔を出す。

（ああっ……ナッシュさん……）

テテオは安堵の声をもらした。――彼は生きていた。ほっとしていると、ナッシュはぎこちなく泳いで、岸にたどり着く。

大丈夫なのだろうか。テテオは心配して見守る。

ナッシュは岸辺に這いあがったあと、ごろりとあおむけになった。

(イテッ……イテテテ……)

全身に痛みを感じているらしい。

たぶん、泉の水面に体をたたきつけるように落ちたのだろう。しばらく動けずにいた。

(ナッシュさん……)

彼の無茶な行為に心を痛めるテテオだが、

(ハ、ハラへった……)

当のナッシュは痛みの次に、空腹をうったえていた。

泉の水面で全身を強く打ったナッシュが洞穴に戻れるようになったのは、陽が落ちてからだった。

痛みはまだ完全に消えてはいないようだったが、コシンの前では泣き言をいっさい口にしない。その意志の強さは子供ながらたいしたものである。

ナッシュは弓を置いた場所にあぐらをかいて座ると、いつものように弓と矢の手入れを黙ってはじめた。

すると、岩の台座に横たわっていたコシンが肉の塊をくわえて、ナッシュの前に放り投げる。

(——おまえの勇気に対して、わたしからの敬意だ)

コシンはそれだけ言って、すぐに眠りについた。

ナッシュは褒美のように与えられた肉に飛びつき、無我夢中でかじりつく。

すごい勢いで平らげてしまった。

びっくりするほどの食欲だ。かなりお腹をすかせていたのだろう。

そして食後のナッシュは弓の手入れをやめ、コシンのそばに寄っていった。丸まって眠るコシンの腹部に潜りこんでいく。

おそらくそこが、もっともあたたかい場所なのだろう。ナッシュは母に甘えるかのように、コシンのお腹に抱きついたまま自分も眠りに落ちた。

(……)

それを眺めるテテオも、言葉にならないあたたかいものを感じた。

神獣は、いまやナッシュにとってなくてはならない存在に思える。

親がわり——いや、それ以上のものなのだろう。

5

森の朝は早い――。
至るところで鳥のさえずりがやさしく響き、心地よい朝を迎えられる。
テテオはその中にいて、生きていたころよりも自然の息吹をしっかりと魂の中に感じとれるようになっていた。
やがてコシンとナッシュも目覚めて、その日の活動を開始する。
向かったのは、昨日と同じ場所だった。
どうやら、そこがコシンのいつもの狩場（テリトリー）らしい。
樹海の切れ目となったその断層のまわりは、視界が一気に開け、森の中でも珍しい広場になっている。だが、そこにはすでに先客がいた。
（あれは――）
（……狼の群れですね）
テテオは、ナッシュに答えた。
その狼の群れは、いまはべつの獲物に大勢で喰らいついている。
（やつらは、わたしの狩場をいつも汚す――ゲリフの群れだ）

コシンが、ふたりにそう説明した。
（ゲリフ……）
テテオが、その名前の響きにおそろしさを感じた直後だ。
コシンが四本の巨大な尾を逆立て、連中に向かって吼えた。
〝フオオォォーンッ……〟
鳥のさえずりが止まり、森に緊張が走る。
気高きその獣の声に、獲物に群がる狼たちもいっせいに貌をあげた。
〝ウルルル……〟
狼たちが警戒のうなりをあげる。
しかしそれは、おびえをともなっていた。その証拠に、コシンがいるのに気づくと、彼らはおそれをなしたように後ずさりしはじめる。
――やはり神獣からの威嚇は大きい。テテオがそう思ったときだ。
大きな足音が森の中から響いてきた。
（な、なんだ――!?）
ナッシュが警戒する。
群れになった狼の倍以上の巨軀を持つ銀色の毛の狼が、巨木のあいだからぬっと姿をあらわしたのだ。その筋骨隆々とした身体に、悪辣さにみちた貌は――この森の支配者

のごとき威風をまとっている。
（あれは！）
（ゲリフだ――）
コシンはみじかく答えると、テテオたちのもとから歩みだす。
（おまえたちは、ここで待っているがいい）
と言い残すと、銀狼のゲリフのもとに向かっていった。
ナッシュとテテオは、緊張した面持ちで見送る。
やがて森の広場で、その二頭がにらみ合う。どちらも巨体である。いや若干、銀狼のゲリフのほうが大きめだ。
（セーレェさま――あいつ、なんだ？）
ナッシュが念話で、テテオに話しかけてきた。
（コシンさまと同じ、神獣……？　いえ、ちがうようです……あれはいったい……）
巨体を誇る狼の首魁から感じる気配を頼りに、テテオは怪物の正体を探ろうとしたが、
（にらみ合ってるぞ、すごい！）
いきなりナッシュが走りだし、テテオの精察は打ち切られる。
（ナッシュさん――それ以上近づくと、あぶないですよ）
（うん、わかってる）

そう言いながらも、足が自然と向かってしまう。ナッシュはコシンとゲリフの争いに、心を奪われたらしい。テテオの心配をよそに、徐々に引きよせられていっている。

そのナッシュの目の前では、戦いがすでに開始されていた。

〝グアアァッ！〟

〝フオォォォーッ！〟

まるで異界に棲息する怪物の、血も凍るような雄叫びだ。

威嚇のあと、二頭はそれぞれの喉元をねらって喰らいつこうとした。上からと下から、同時に咬みつく。しかし浅かったのか、すぐに離れて、また別の場所に咬みつこうとする。そうした動きが、目にも止まらない速さでつづく。

〝ゴオォォッ！〟

〝シャアァァーッ〟

前肢も使って、互いにダメージを与え合う。二頭のはげしい息づかいが聞こえてくる。彼らが息をつくたびに、その二頭の胸が起伏した。

ゲリフの前肢が、コシンの頭部を激しく叩く。爪跡が残った。コシンがひるみ、次の攻撃を避けるように身をひるがえす。ゲリフはコシンの金毛の身に咬みつこうと追った。

すると、身をひるがえしたコシンは四本の巨大な尾をくり出す。しなやかに動いた尾が、ゲリフの顔面を打つ。

〝ガアァッ……〟

ゲリフが頭部を地面につける。その巨軀が倒れて、転がったのだ。

（やったか！）

ナッシュが拳を振りあげて叫ぶ。

だが、まだ勝負は終わってなかった。地面を転がったゲリフはわざと腹を敵に見せ、コシンが襲いかかるところを逆にねらったらしい。あお向けのゲリフに覆いかぶさろうとしたコシンは、その顎をガフッと咬みつかれた。

〝フアァァッ……〟

不意を衝かれたコシンが、もがき出す。

しかし咬みついたゲリフは、さらにコシンの喉元に深く喰らいついていく。その咬傷から、コシンの血がぽたぽたと流れ落ちるのが見えた。

（たいへんだ、コシン――負けそうだぞ！）

（ナッシュさん！）

テテオは呼びとめたが、遅かった。

ナッシュは苦しむコシンのほうへ駆けだしている。そして弓を構え、弦を引き絞った。

ゲリフにねらいを定め、矢を放つ。

しかし届かない。

（くそっ！）

ナッシュは、格闘する二頭の近くへと駆けだす。

（――ナッシュさん、あぶないです！）

叫んだが、テテオの注意を聞くナッシュではない。

彼は矢の届くぎりぎりの距離にまで近づき、そしてまた矢を放った。

こんどこそ――放たれたその矢は、コシンの喉に咬みつくゲリフの眼に命中する。

〝グアッ！〟

ゲリフが痛みをおぼえて首を振った。それと同時に、コシンが離れる。

（まだ、いくぞ！）

ナッシュは、新たな矢を矢筒からつかみとる。だが、射る体勢に入った直後――大きな黒い影が、ナッシュのまわりを覆う。

（へっ？）

頭上をあおぐと、むきだしになった巨大な狼の牙が目の前に迫っていた。

ゲリフが、ナッシュに反撃しようとしてきたのだ。

（――ナッシュさん！）

テテオは凍りつく。

その刹那――ゲリフの脇にコシンが体当たりした。

ゲリフが横に吹っ飛ぶ。その巨体が地面にたたきつけられた。
呆然と見あげるナッシュに、
（余計なことをするな――）
コシンはそう告げて、すぐに身をひるがえす。
吹っ飛ばされたゲリフは、すでに体勢をたて直している。
〝グルルルル……〟
身構えて、うなった。しかし、もうゲリフは争いをつづける気がなくなったらしい。気まぐれな性格なのか。まわりで見守っていた狼の群れに目を向け、ともに森の奥へと引きかえしていく。
（おいっ、逃げるな！）
ナッシュが追いかけようとする。
（よせ――）
コシンが呼びとめた。
その声でナッシュは立ち止まり、振りかえってコシンをにらみあげる。
（なんでだ？）
（やつは、また来る――決着は、そのときにとっておけばよい）
（……）

ナッシュは黙りこんだ。

それで納得しているのか、していないのか——テテオにもよくわからなかった。

しかし気になるのは——やつはまた来る、というコシンの話だ。また来るということは、これまでにも幾度か争ってきた相手だということなのだろうか。

やがて銀狼ゲリフを先頭にした狼の集団は、コシンたちの前から姿を消した。

どちらか一方が負けたというより、ゲリフのほうが一気に決着をつけたがらなかったという感じにも受けとれる。

テテオがそんなことを考えていると、

(……これで、心おきなく狩りができるな)

急に、コシンが言った。

そばに立っていたナッシュは、驚いた顔で振りかえる。

(コシン、ケガしてるぞ——)

(気にするほどのことではない)

(でも——)

テテオも心配した。ゲリフに咬まれたコシンの喉から、まだ血が流れだしているのだ。

(わたしは治癒力が高い。放っておけば、すぐに治る——それよりも、おまえは狩りを教えてほしいのではないか?)

（……）

ナッシュは、コシンのその言葉に何も言いかえせなくなる。そのとおりだったからだ。

（ならば、はじめるぞ――）

そう言って、コシンは傷ついた体のまま狩りを開始する。

それは、ナッシュのための狩りだった。

夕方――ナッシュは、お腹がふくれあがるほど食にありつくことができた。

コシンの教えどおりにやって、はじめて狩りに成功したのである。

うれしさも格別である。棲家の洞穴に帰ってから、火をおこして焼いた肉片にかじりついたナッシュの表情も、幸せそのものだ。

一方のコシンは、ゲリフとの戦闘で傷ついた体を、いつもの岩の台座に横たわらせていた。テテオは、そんなコシンのそばに付き添う。

コシンの傷口はもうふさがって、血もとまっていた。コシンがみずから言ったとおりだ。でも、まだ咬傷の痛みにどこか苦しそうである。

（そなたの聞きたいことはわかっている――なぜ、ゲリフと対立しているか？）

荒い息をついていたコシンが言った。

（えっ――）

テテオは驚く。神獣は、相手の心が読めるらしい。

まさにテテオが聞きたいと思っていたことを、ずばり言い当てられてしまった。

（話してどうなるものでもないが、いいだろう。こうして何か話していれば傷の痛みも忘れられるというものだ――）

コシンはそう言って、荒い息をととのえながら語りはじめた。

（昔から、わたしとゲリフは……この森の領土をめぐって争っていた。あるとき、やつはわたしの子をねらってな。油断した隙に、わたしの子はやつに食われてしまった）

（そんな――）

テテオが、思わず声をもらす。

肉片を食っていたナッシュが、ふいに口をはさんだ。

（それ、ゆるせない――）

食事に夢中だったように見えて、コシンの話はしっかり聞いていたらしい。

コシンは独り言のようなナッシュの声を無視して、話をつづける。

（わたしの子の肉を食ったゲリフは、もはや普通の狼とは言えなくなった……神獣の力を体に宿し、おそろしいほどに変貌して強くなっている……）

（だから、あのようなふしぎな気配を漂わせていたのですね……）

テテオは、コシンの話に納得した。
最初にゲリフを見たとき、コシンと同じ神獣だと勘ちがいしそうになったのは、そのためだったのか。神獣の子を食べたから――あのゲリフは突然変異し、狼の首魁の座についたのだ。
（神から授かった子を失ったわたしは、二度と子を宿すことはないだろう――ゆえに、ゲリフは、わたしを喰らえばこの森を制覇できると考えている。だから今日も、わたしの狩場で待ち伏せしていたのだ）
と、コシンがそこまで話したときだった。
（なんで、倒しに行かない！）
（ナッシュさん――）
テテオが振りかえると、ナッシュはいつの間にか食事をやめて、立ちあがっていた。その表情は怒りにみちている。
（おれ、おまえの子じゃなくて、よかった！）
（えっ――）
テテオは、ナッシュの叫びに動揺した。彼がここまで真剣な表情で怒りをあらわにしたのは、はじめて見たからだ。
ナッシュは、まくしたてるように主張した。

（カタキ討ってくれない親――おれ、いらない。おれの村の親――子供、殺されたら、かならず見つける！　子のカタキ、かならず討つ！）

（それは人間の自己満足にすぎない――）

コシンに言いかえされたとたん、

（ジ、ジコ……なんだ、それ？）

ナッシュは理解できなかったのか、首をかしげた。

テテオが、話を導くように割って入る。

（そんなことしても、亡くなった子は戻ってこないとおっしゃりたいのでしょう）

その説明にすこし納得したのか、

（……おれ、わかんない……カタキ討たないやつ、仲間じゃない――）

そう言い残して、ナッシュは洞穴から立ち去った。

見送ったテテオは心配になる。愛想を尽かして、出ていってしまうのか。

宙に浮かびあがり、ナッシュのあとを追った。

夕焼けが美しい外に出ると、ナッシュは木の枝を拾い集めて何かを作ろうとしていた。

宙を舞うテテオは、その彼のもとへと近づいていく。いろんな虫たちの声が聞こえて

きて、夜に向けて演奏会の準備に入っているかのようだった。
そんな中で地面に座りこんだナッシュは、木の棒を半円に曲げながら何かをくくりつけている。
（何を作っているのですか？）
テテオが訊ねると、
（あたらしい、弓だ――）
ナッシュは作業をつづけながら、怒った声で答えた。よく見ると、木の棒に動物の腱を張っている。今日、自分で捕らえた獲物からそれを手に入れたらしい。
（村で、みんな……これ、使ってた）
大人たちが作っていた手順を思いかえしながら、ナッシュは弓を完成させていく。
そして構えながら、脇に置いた木の枝を手に取った。ためしに一本飛ばしてみる。
シュン！
その木の枝は、まさに矢のように飛んだ。
テテオは感動する。それは、ずいぶん本物の矢らしく飛んでいったからだ。いままでのより、飛距離ものびている。
しかし、
（なんでだ！　もっと遠く、飛べ！）

ナッシュは不満をあらわにする。村の狩人たちが使っていた弓とは、かなりちがったらしい。

（セーレェさま――）

（は、はい）

ふいに声をかけられて、テテオはあわてて答える。

ナッシュは、作ったばかりの弓を見つめながら宣言した。

（おれ、カタキ討つ）

（えっ――）

（コシンの子供、おれが――カタキ討つ！）

（ナッシュさん……）

テテオは、また驚かされた。

ナッシュは、まるで自分のことのように宣言したのだ。

（コシン、やらなくていい――おれ、カタキ討つ！）

その目は本気だった。

最初に出会ったころの、我関せずといったのんきな様ではない。

ナッシュは、自分でも気づかないうちに――自分の意志をはっきりと表に出すようになった。

いや、人間らしさを取り戻しつつあるのではないだろうか。
何に影響されて変わりつつあるのかは、わからない。けれど、野生児として育つだけでなく、人としての心も育もうとしているのはたしかな様子だ。
テテオは、もうすこし彼の成長を見守っていきたいと考えた。その理由は、自分でもはっきりしないが——。
そうしたいと願う自分がいたから……。

6

それから数年して、ナッシュはさらにたくましくなった。
ひとりで、もう獲物も立派にしとめられる。
自作の弓も改良しつづけて、その命中精度は驚くばかりにあがっていた。
テテオも、彼の姿をまぶしく見つめるばかり。
射手の狩人として、彼は立派に成長したのだ。
しかし、そのナッシュが仇を討とうと追い求めていた銀狼のゲリフは——あれ以来、姿を見せなくなってしまった。
コシンの狩場で待ち伏せされるようなことは、あのときから一度もない。ゲリフの手

下と思われる狼の群れすら、森の中でまったく見かけない。
もしかすると彼らは、この森から出て行ってしまったのだろうか。
そう思いたくなるような、平穏な暮らしがつづいていた。
そんなある日のこと。
(ほら、メシだ――)
ナッシュは洞穴の中で、焼きあげたばかりの骨のついた肉をコシンに差しだした。
コシンはいつもの岩の台座に横たわり、いくぶん弱々しい声で答える。
(……恵んでくれと……頼んでない)
(むり、すんな。ほら、食え!)
ナッシュは強引に、骨のついた肉をコシンの口元に近づけた。
しかし、コシンはいっさい食べようとしない。
このところ、神獣の衰弱は日を追うごとに目立つようになっていた。その巨軀も、以前のたくましさを失い、すっかり痩せ衰えてしまっている。
ナッシュはとうとうがまんできず、コシンの分まで食料を捕ってくるようになったのだ。だが、やつれた貌のコシンは、与えられるのを拒否するかのように起きあがる。
すこしよろめきながら歩きだし、洞穴の出口へと向かった。
(どこ行く?)

（――自分のぶんを獲りにいく）
（そうか、おれも行く！）
ナッシュはよろこんでコシンの背中に飛び乗る。
コシンはナッシュを背に乗せ、洞穴の地面を蹴って飛んだ。そのまま、洞穴をふさぐ滝を突きぬけていく。テテオはあわてて、あとを追った。

ナッシュはコシンの背中にまたがって、洞穴の中から飛び出した。
――こうでないとな！
きれいな泉の上を飛んで、風をいっぱい体に受けながら草むらにおり立った。
心配するほどでもない。コシンは元気そうだ。
ナッシュは心の中で安心していた。
長いあいだ、ずっとコシンとともに狩りをしてきたのだ。ここ何日かは、そうではなかったけど、それがまたいっしょにやれる。力を合わせれば、どんな獲物だって捕らえられる自信があるのだ。
そんな日々がまた戻ってきたかと思うと、ナッシュはうれしくなった。
泉の岸辺におり立ったコシンは、ナッシュを乗せたまま森の中を疾走する。

向かった先は、いつもの狩場だ。
そこで、いつもどおりの狩りがはじまるはずだった。
しかし今日は、空気がちがう。
コシンの背中からおり立ったナッシュは、繁みに隠れている連中の気配に気づいた。
それは、何年ぶりに感じた気配だろうか。
（あいつらだ――）
すぐにナッシュは、念話でコシンに話しかける。
（ああ――）
隣のコシンが、みじかく答えた。彼も感じているらしい。
やがて、森の奥から大きな足音が響いてくる。
もう、何が迫ってきているかはわかっている。
森の広場を囲む樹冠から、逃げだすように鳥たちがいっせいに飛び立つ。
――きたか！
コシンとナッシュは同時に身構える。
いっしょになって、にらんだ先――断層によって大きく開かれた森の広場に、銀狼のゲリフがその巨体を揺り動かしながら姿をあらわした。
ナッシュの隣にいるセーレェさまが言った。

（あの狼、生きていたのですね――）
その話に、ナッシュはかつての決意を思い出す。
（あいつ――コシンの子の、カタキ！）
そう言って怒りをにじませ、ゲリフをにらみつける。
（――よせ）
いきなりコシンが、ゲリフのほうに向かおうとしたナッシュをとめた。
（やつの相手は、おまえではない）
コシンが語気を強めて言う。どうやら、ナッシュがコシンの子の仇を討つ気でいたのを見抜いているらしい。
（――やつとの勝負は、わたしのものだ）
すごい形相で、ナッシュのことをにらんできた。
（……わ、わかった……）
するどい眼で見おろされ、仕方なくうなずく。
そこまで言うのなら、コシンに譲ってやってもいい――。
だが、代理の仇討ちをあきらめたとたん――ナッシュの中に、言いたくてたまらないことが強くこみあげてきた。
（コシン――おまえこそ、カタキ討て！）

それが、邪魔しないための条件だ。ナッシュはそう言いたげに、目でうったえる。

（……）

コシンは返事しない。

構わずナッシュは、思いを伝える。

（ぜったいだ――おまえの子のカタキ、討て！）

その気持ちで、ゲリフと闘ってほしかった。コシンには、子を殺された恨みを忘れてほしくなかったのだ。

だが、コシンはナッシュがいちばん伝えたかったことを受けとったのかどうか、何も答えない。表情をひとつも変えずに、ゲリフのもとへ歩みだしたのである。

（コシン！）

ナッシュはそのうしろ姿に叫んだが、ゲリフに向かうコシンは無言のままだった。

（くっ――）

あいかわらずのガンコ者だと、ナッシュは唇を噛んだ。

7

――こいつの貌を見るのも、ずいぶん久しぶりなことだ。

病にでもかかっていたのか。
いや、そうではない。
年老いたゲリフの姿をあらためて見て、コシンは理解した。
（お互い……死期が近づいているようだな？）
待ち構えるゲリフの目前に近づく。
いくぶんやつれた貌のゲリフは、低くうなった。
（だとしても、おまえを喰らうまでは――死なぬ！）
（それは、わたしも同じだ！）
コシンが答える。
お互いにそれをやり残したまま、死ぬわけにいかない。
決着をつけるとすれば――いまこのときをおいて、ほかにないのだ。
覚悟を決めて、コシンも身構える。
〝グルルル……〟
〝フオオォォーッ……〟
生命の最後の輝きを一気に燃やすかのように、二頭はにらみ合いから激突に移った。
コシンは牙をむき出しにしてゲリフの頭部に突進する。だが、かわされた。やつは頭を低く構え、逃れたのだ。コシンは逃すまいと、ゲリフの耳に咬みついた。

〝グアァッ！〟

ゲリフが頭を強く振って、コシンから逃れようとする。

コシンはゲリフの耳を咬みちぎった。その刹那――頭を低くしたゲリフが、コシンの前肢を大きく開いた顎で捕らえる。

〝フアァーッ！〟

激痛に天をあおぐ。コシンは、かわりにゲリフの背中に喰らいついた。そこに思いっきり牙を立てる。巨体が揺れ動く。

やがて二頭とも咬み合ったまま、もつれて地面に転倒した。地にあばら骨を強く打ちつけて、さらなる痛みがコシンに走る。

それでも放さない――顎に渾身の力を込めて、背中の肉を一部だけ引きちぎった。

ゲリフが悲鳴をあげ、コシンの前肢から口を離す。それで重心が崩れてしまい、またコシンは草の大地にひっくり返ってしまう。

すぐさま身を起こそうとしたが、咬みつかれていた前肢に力が入らない。それでも、なんとか起きあがろうとした。

傷ついていない前肢のほうは、まだ動く。巨体を支えるにはかなりの負担になるが、この闘いのあいだ、もちこたえればいい――。

コシンが貌をあげると、頭上に牙をむいたゲリフの貌があった。そこから一撃で、コ

シンの首を咬み砕くことができる。圧倒的に不利だ。
（これまでか――）
敗北を悟った――そのときだ。
（おい、コシン!!）
ナッシュの心の声が届く。
コシンがちらりと見ると、ナッシュが弓をこちらに構えている。
〝グォッ……〟
そのほうに、ゲリフも目を向ける。
ナッシュが弓を構えながら、
（おれ、やるぞ！　じゃまされたいか!?）
（ナッシュ……）
（いやなら、おまえが勝て！）
（……）
フッと、かすかに嗤った。
――あいつめ。またも余計なことを。
コシンはそうつぶやきながらも、自分の中に余裕が生まれてきたことを悟る。
ふしぎなことに、それで力が湧いてきている。

あいつのおかげなのかどうかは、わからなかったが——あきらめかけていたコシンの心に、ふたたび闘志が戻ってきたのだ。

あいつに邪魔されないためにも——やるか。

コシンは前肢に力をこめ、上体を高くそり返らせた。いま一度、ゲリフに反撃してやる。その思いで、ゲリフに襲いかかった。

〝グアッ!?〟

ゲリフはナッシュに気をとられていたせいで、かわすのが遅れた。その隙をとらえたコシンは、真上からゲリフの首に咬みつくことに成功する。

〝グオオォォッ!〟

ゲリフが暴れだす。あせって、首からコシンを離そうとするが、もはや手遅れである。深く首根っこに咬みつくことができたから、そう簡単には離れない。

〝グッ……グアッ……グアァァ……〟

もがいていたゲリフの動きが、しだいに鈍くなっていく。

どうやら勝負は決まったようだ。ゲリフの命の輝きがみるみる弱まっていく。

(ゲリフ……)

コシンは咬みついたまま、

(おまえの子を食ったのは……生きるためだったのだ)

なぜか、その過去をここで語りたくなった。
（わかってる、コシン。おれも同じだ――お互い様だろ）
ゲリフが答える。死を悟ったのか、その声はおだやかなものだった。
（これで、森を守るものが絶えるな。それがわかっていながら、わたしたちは……）
（後悔など口にするな！）
突然、ゲリフが怒りをあらわにする。コシンの思いに同意などしたくなかったらしい。
だが、それが――ゲリフの最期の言葉となった。
〝グホッ……〟
息を吐いた直後に力尽き、ゲリフの頭部がだらりと垂れる。身体からも力が失せた。
終わったのか……。
コシンが咬みついていた首を放すと、ゲリフの巨軀が地面にドスンと落ちる。
長きにわたる宿敵との闘いが、ここに幕をおろした。
（……）
見おろすコシンは、ゲリフの亡骸にしばしの黙禱をささげる。
これで、わたしも思い残すことはない……。
わたしがおまえのあとを追えば、この森は衰退していくであろう。
わたしに子孫はいないのだから。

だが、案じていても仕方ない。
いずれ神が、新たな守護のものをこの森に生みおとされるのは明白だ。
ただ、神の期待に背いたわたしの時代が終わりを告げるだけの話だ。
コシンは、亡き宿敵にそう告げた。
やがて、息絶えたゲリフからしずかに離れる。
すると——たちまち狼の群れが、繁みの中から飛びだしてきた。連中は我先にと、ゲリフの死骸に喰らいついていく。
極限まで飢えていた狼の群れは、負けたほうの肉を食することをねらっていたのだ。
コシンはそいつらを無視して、ナッシュたちのいるほうに戻った。すると呆然としていたナッシュが、我にかえって不満をもらす。
(あいつら、横取りだ——いいのか?)
(そう思うなら、おまえが奪いに行け)
興味なさそうにコシンが答えると、
(コシンの獲物……おれ、横取りしない)
と、ナッシュはあっさり言って、コシンといっしょに歩きだす。
そのまま、ともに棲家へと帰ることになった。
もう、仇がどうのこうのと、ナッシュはいっさい言ってこない。なぜか満足そうな笑

みすら浮かべている。
どうしたのだ。
訊いてみたくなったが——無駄なことだと思いとどまる。
（……）
人という生き物はわからぬもの。それを理解しようとしても、もう自分にはそれだけの時間もないのだから——と、コシンは思った。

8

それから何日かすぎて、森には大きな変化が訪れた。
コシンの衰弱が加速したことで、森全体がそれに呼応するかのように枯れてきたのだ。ナッシュには信じられない光景だった。
生き物の姿が減り、森に死が近づきつつある。おかげで狩りに出かけても、収穫は得られない。
（ハラへった……）
洞穴の中で、そうつぶやくことが多くなった。
いまや滝の音もせず、きれいな水を満たしていた泉も干あがっている。外から洞穴の

中も丸見えだ。ナッシュが外の景色に目を向けると、灰色に染まった森の死骸がどこまでもつづくのが見えた。

（なんでだ……）

木はみんな枯れはて、緑なんか一片もない……。

ナッシュはそんな光景を眺めて、ため息をつく。

すると、

（……なぜ……出て行かない？　ほかの森へ……行け……）

洞穴の奥から、コシンの弱々しい声が響いてきた。

彼は、宿敵のゲリフに勝った日以来――ずっと寝たきりだった。狩りにも出かけず、食事もしない。いや、肝心の食糧が手に入らなくなってきているのだから、狩りに出かけても無駄なことなのだが。

「うがっ……」

ナッシュは外の景色を眺めるのをやめ、洞穴の奥に戻った。コシンのそばに座りこみ、弓を手に取る。

このところ、生気なく眠るコシンのそばでナッシュのやれることといえば、弓の手入ればかり。

（聞こえ……なかったのか……ほかの森を……探せ……）

コシンに問われたナッシュは、弓の弦を引っぱり、その張りを確かめるように引き絞りながら答える。

（ここ、おれの森……出て行かない。森、いつかよみがえる）

（……時間……かかるぞ……）

諭すようなコシンの念話がかえってきた。

ナッシュは弓の構えを解き、深く息をつく。

（おまえ、置いていけない――）

そんな当たり前のこと、なぜ答える必要がある――ナッシュはそう言いたげに、奥の台座に横たわるコシンをにらみかえす。

（もういい。わたしは……寿命なのだ……）

コシンは掠れた声で、あきらかにする。すでに、みずからの運命を受け入れているかのようだ。

（そうか……）

表情を変えず、ナッシュはそれを認めた。いまさら、どうあがいたって仕方ないのだ。

（だったら……どうすれば、いい？）

そう訊くしかなかった。

しばらくして、コシンは要求した。

（わたしが死んだら……わたしの肉を……おまえが……食え）

（……）

（望んでいたはずだ……忘れたのか……。はじめて会ったころ、おまえは……わたしを獲物に決めたはずだ。獲物であるわたしを倒し……その肉を食べてこそ……おまえは、はじめて成人になれる……ちがうか）

力をふりしぼって話すコシンに問われて、ナッシュは顔をそむける。

そういえば——そうだった。

すっかり忘れていたが、昔はそんなことも考えていた。

はじめての獲物を——自分で狩る。

それが、ナッシュが生まれた村での掟。

成人になるための儀式だった。

自分でさえ忘れていたことを、コシンはよく憶えていたものだ。ナッシュは感心すると同時に、そのような昔の自分に対する反発も抱きはじめる。

もう、昔の自分とはちがうのだ。

だから、きっぱり言いかえす。

（おれ……仲間の肉、食わない……横取りしない）

それは、いまのナッシュにとって本心だった。

しかし、言われた側のコシンは、感謝もなければそのことに同意する様子もない。
（……痩せがまん……するな。この森は……どんどん痩せ細って……もう獲物はいない。みんな森を捨てて、出ていった……おまえの……選べる道は……残されていない。これは……わたしの遺言……わたしの肉を食え……約束だぞ――）
（……）
コシンの要求に、ナッシュは何も返事しなかった。
いまは、そのことを考えたくもない。だから無心で弓の手入ればかりした。
腹はとんでもなく減っている。
だけど我慢した。
どうして我慢するのか、わからない。
でも、どうしても我慢したかった。
ナッシュは空腹と闘いながら、拒むように首を振りつづけた。
やがて日が暮れて、その日は終わりを告げる……。

翌朝、コシンの寿命は尽きた。
あれだけいろいろ伝えてきたのは、自分の最期を悟ったからなのだろうか……。

ナッシュは、岩の台座で冷たくなったコシンの亡骸を見つめるうちに——何年ぶりかの寂しさがよみがえってきた。
村のみんなを失ったとき以来の、寂しさだ。
もう乗り越えたはずと思っていたのに。
また、こうして失ってしまった……。
(ナッシュさん……これから、どうされるのですか?)
そばにいたテテオが訊ねてくる。
ナッシュは、永遠の眠りについたコシンをじっと見つめながら答えた。
(おれ、べつの森、めざす——)
そう言うと、テテオは何も言えなくなったらしい。
しばらくして納得したのか、
(そうですか……)
と、ぽつりとつぶやく。
しかしナッシュは、それだけで話を終わりにさせたくなかった。
(いつか、戻ってくる——)
(えっ?)
テテオが驚きの息をもらす。

ナッシュは、すでに心の中で決めていたことを念話で伝える。
（この森、いつかよみがえる……それ、待つ――）
たとえ悪い状態になっても、この生まれ故郷の森は棄てない。
それはナッシュがずっと思っていること。
生き延びるための手段をべつに見つけるだけ。それが見つかれば、あとは森の回復を待てばいいのだ。
森は、かならず復活するのだから――そう信じていた。
（はい。わたしもそう思います）
テテオの、嬉しそうな念話がかえってくる。よろこんでくれているらしい。
（でも……その前に――）
ナッシュは、あらためてコシンの亡骸を見つめた。
決心して近づく。すこしだけ開いた口からのぞく小さな牙のひとつをつかみ、力をこめて何度も引っぱりつづけた。
かなりの時間、それをくりかえす。ずっと、くりかえす。
やがてナッシュは、その小さな牙のひとつを引きぬいた。
（これ、形見……コシン、おれ……約束、守る――……）
引きぬいた牙に、誓うようにつぶやく。

機会を与えてくれたコシンに、感謝したい。
ナッシュにとっての成人の儀式が――いま、はじまろうとしていたのだから。

9

それから数年して、ナッシュが予言したとおり――森はよみがえった。
テテオは、長い過去の旅から――意識を現在に戻した。眼下では、そのよみがえった森の中をナッシュが先導して、ユーリィたちを道案内している。
あの日神獣の肉を食したことで、ナッシュは驚異的な身体能力を得ていた。
あの銀狼のゲリフのような突然変異などはなく、本来の生命力が強化された感じだ。きっと欲望にみちたゲリフとは、またちがった効果があらわれたのだろう。おかげで、彼は森の冬の時代さえ乗りきることもできた。
その事実をテテオはうれしく思う。
彼は、コシンの遺志を継いで、森を守ろうとしているのだ。本人にその意識はなくても、自然とそうなっているようにテテオには見えた。
ナッシュはいま、彼らを毒花の親玉がいる場所に連れていこうと森を進んでいく。
やがてけばけばしくきわだった色の煙が、繁みの向こう側から立ちのぼっているのが

見えてきた。
さっとナッシュがその繁みの前で身を隠すと、ユーリィたちもそれにしたがう。
奥をのぞきこみながら、
「アレが、ヘンな花――」
ナッシュがそう教えると、ユーリィたちも緊張しながら繁みの向こう側へそっと身を乗りだした。

巨木に囲まれた中央に、真っ赤な花が咲いている。そいつの花びらは、人を軽々と呑みこんでしまえるほどの大きさで、異臭をあたりに放っていた。
「な、なるほど。たしかにヘンな花というか……どうみても魔物であるな」
陰から様子をうかがうアルハナーレムがつぶやく。
ナッシュは、あらためてユーリィたちに注意を促した。
「あの息、毒もってる。気をつける。森に迷惑かける。たぶん、食ってもうまくない。いいとこない、悪いやつに違いない――」
「食べられるかどうかで、判断するのであるか？」
問いかけたアルハナーレムに、ナッシュは自信をもって答える。
「おまえら、みんなうまそう――だから、きっといいやつ」

「……」

アルハナーレムは黙りこんだ。つまり、うまそうだからいいやつだと判断できる——そう言ったのを納得したらしい。

「じゅる」

ナッシュは彼らを見て、涎が出そうだった。

そんな中で、

「よし、行こう！」

ユーリィが立ちあがり、物陰から飛びだす。

ナッシュは、その行動の速さに驚いた。さっそく毒花の怪物を倒す気だ。

あわててナッシュとアルハナーレムもあとにつづく。チェリンカも後方からつづいた。

森の広場に飛びだした三人は、その巨大な花をにらみつける。

毒花の親玉は、毒の胞子をまき散らして対抗してきた。

「むぅ、みんな下がるのである！」

アルハナーレムは前に出るなり、杖を突きだす。そして、その先端からはげしい炎を走らせる。

宙に舞う毒の胞子を焼き尽くしたあと、ユーリィが一気に花の中心めがけて走った。

中心にある、きらきらと光る赤い物体をねらっているらしい。

「ユーリィ、紅いクリスタルを壊すのである！」
アルハナーレムが叫んだ。
「わかってる！」
駆けながら答えたユーリィは、その紅いクリスタルに向かって剣を振りあげた。
すると、それを嫌った毒花が身を回転させ、ユーリィを払い落とそうとする。
「くっ――」
花の中心をめざしていたユーリィがよろめく。
それを見たナッシュが、すばやく弓を構える。
――あの紅いクリスタルとやらを壊せばいいんだな！
背中の矢筒から一本の太い矢を引きぬき、ねらいを定めて弦を引き絞る。次の瞬間、放たれた矢は、ねらいどおりに紅いクリスタルに突き刺さった。
当たったぞ！
毒花が苦しみだす。大きな花びらを閉じたり開いたりしている。ユーリィは抵抗する花びらを避け、ふたたび花の中心にたどり着くなり、剣を紅いクリスタルに浴びせつづけた。毒をおそれず戦うその姿に、ナッシュは目を見張る。
――なんてやつだ。
こんな勇気のあるやつ、いままで見たことないぞ――。

そう思った直後、

（ユーリィ、負けないで！）

チェリンカの声が聞こえてくる。ユーリィの戦意を支えているかのようだ。

ナッシュはその声で我にかえり、すぐさま援護のための矢を次々に放つ。

アルハナーレムも杖から火炎を放射し、攻撃の手を休めない。

いつしか全員で、連携のとれた戦い方をしていた。

やがて毒花の親玉は動きが鈍くなってくる。巨大な花びらも、ぐったりしてきた。

その中心でユーリィが、剣をふるって紅いクリスタルを叩き割った。

（やった――）

チェリンカの声が、勝利を告げる。

ついに毒花の親玉を倒したのだ――コシンとの約束を果たしたことをナッシュは悟った。

（……どうしたの？）

しばらくして、チェリンカが訊ねてくる。

「おかしい。森、もとに戻らない……おれ、まちがえた？」

森の様子を眺めていたナッシュは、首をかしげた。

この森の復活を邪魔していたやつを取り除いたのだから、もう安全のはずである。

なのに、森はまだ黙ったままだ。

「いや、あの紅いクリスタルが原因であるのはまちがいないのである。原因を取りのぞいたとはいえ、さすがに一瞬では戻らないのである。動物たちの気配はどうであるか？」

アルハナーレムに促されて、ナッシュはもう一度あたりの様子をうかがう。

意識を集中させて聴いてみると、かすかに動物たちの気配が四方から伝わってくる。

「……ほんとだ、声がきこえる……みんな帰ってきた。おまえ、すごい！」

ナッシュが感心していると、

「じゃあ、これで――」

ユーリィは剣を鞘におさめ、歩みだした。その隣をアルハナーレムも歩みだす。

「王との謁見はまちがいないであるな。情報どころか、事件解決である」

「なんだ、どっかいくのか？」

帰ろうとしはじめた三人に、ナッシュは声をかけた。

先を急ごうとするユーリィが立ち止まり、ナッシュのほうに振りかえる。

「うん、ぼくたちはこれからお城に行って、王様に会わなくちゃならない。ナッシュ、手伝ってくれてありがとう。きみのことは忘れないよ」

「そうか、じゃあ行こう」
「え――えーと、一緒に？」
ユーリィは、いっしょに歩きだしたナッシュの行動に驚いたらしい。
「――おまえたち、忘れやすいな。森の民、恩は忘れない」
ナッシュは、もう心に決めたことを彼らに告げる。
「命助けてくれた恩、かえすまで離れない。それとも、おれ――邪魔か？」
「そんなことない、大歓迎だよ――わぁ、はじめて友達ができた。ね、ね、チェリンカ、すごいね！」
ユーリィがよろこんでくれた。それまでけわしかった表情がいきなり笑顔になり、いくぶん子供っぽさまでのぞかせている。
（うん、よろしくね、ナッシュくん……ナッシュくん？）
同じように笑顔で歩みよってきたチェリンカが、呼びかけてきた。
その声に、ふとナッシュは答える。
「……あ？　おれのこと呼んだか？　おれ、『ナッシュクン』ちがう。ナッシュだ――忘れすぎだ――」
と言いかえすと、
（あはははは……）

チェリンカが安心したように笑った。
それにつられて、ユーリィとアルハナーレムも笑う。
何だかわからないが、ナッシュも笑った。
――いい友だちになれそうだ。
さらに、いままでとはちがう世界がこれからはじまるような予感もする。
(……村のみんな……それからコシンと、セーレェさまも見ててくれよ。おれ、がんばるからな――)
ナッシュは、いままで見守ってくれたみんなにそう伝えるのだった。

第六章　ミースの救出

過去、大惨事にみまわれたレラ・シエル。
そこは、いまも闇に覆われています……。
わたしは、この闇がクリスタルの光で照らされることを願っていました。
負の記憶を消すためにも……。

1

「ただいまなのですー」
「おかえりなのですー。ふぅー。ずいぶんとお疲れのようなのですー」
うす暗い部屋にぽつんとたたずみ——楽劇の一幕でも演じるかのようにひとりで二役をこなしている女性がいた。
幼子のようなころころとした体形の彼女は、リルティ族のミースである。その容姿や口調からは想像しにくいが、ミースは立派に大人の女性であった。
「いやー、どこまで行っても瓦礫だらけで、出口が見当たらないのですー」
「元気出すのですー。あきらめちゃダメなのですー」
「あきらめないのですー。おや？　くんくん……いいにおいなのですー」
「よく気づきやがったのですー。今夜はシチューだったのですー」

「おっ、それはいいのですー。もうおなか、ペッコペコなのですー」
「元気だしてもらおうと思って、作ってたのですよー」
「うんうん、それ食べて、明日もがんばるのですー」
そう言ってミースは、テーブルの前に座った。しばらくしてまた立ちあがり、部屋の奥からシチューの皿を運んでくる女性を演じる。
「お待ちどうさまなのですー。さあ、とっとと食いやがれなのですー」
「はいなのですー。とっとと、いただきますなのですー」
ふたたびテーブルの前に座ったミースは、シチューをごちそうになる側の女性を演じだす。
「んっ、かぷっ……んんっ！　おいしいのです！　これはすごいのです、ミースは料理の天才なのです！」
「にゃー、ミースからそんなに誉めてもらえるとは思わなかったのですー。うれしいのですー」
食べる側のミースは、シチューの皿をかちゃかちゃ鳴らしながら何度も木さじを口に運んでいく。
しかしその皿は空のままで——シチューなど入っていない。
やがて、

「くぅ〜〜、ほんとのシチューを食べたいです〜〜〜っ。もう非常食の缶詰は、飽きたのですー。ここにユーリィがいれば、たとえ缶詰の食材しかなくても、おいしく作れるはずなのですー……ユーリィ……また『いい子、いい子』してほしいのです〜〜〜」

と、いきなり素に戻って、不満をいろいろもらしだす。

数年前――ユーリィとチェリンカの父を殺したチャスペルに挑んだとき、結果的にミースはこの場所へと流されてきたのだ。以来、陽の光が届かない部屋の中での生活をつづけながら、ここからの脱出の機会をうかがっている。

思えば、何年もひとりで耐えてきたのだ。

そのために講じた工夫や苦労は、数かぎりなくあった。

「う〜〜っ、ぶるぶるぶるぅー……なんか今夜は、冷えるのですー」

「そ、そう言われれば、そうなのですー……さっそく暖炉に、火を灯すのですー」

「薪は、あるのです？」

「大丈夫なのですー、まかせるのですー。いろいろ燃やせるものをあちこちから拾ってきているのですー」

と、ミースは通行可能な区画にある、ほかの部屋や倉庫からかき集めてきた木製品を床に広げた。

その中にある一本の杖を手に取るなり、それを斜めに壁に立てかける。そのあと、斧を構え、杖を二本に叩き折った。

折れた杖を容赦なく、暖炉の中に放りこむ。

ぱちっ、ぱちぱちっ……。

暖炉の火が若干、大きくなった。

「う～～～っ、よく燃えて部屋もあったかくなってきやがったのですー」

満足そうに言いながら、ミースは暖をとった。

「……そういえば、いまごろ……ユーリィとチェリンカはどうしているか気になるのです。元気でいるのです？　元気なら、ミースもうれしいのです……そう、元気なら……それでいいのです……」

そんなことをひとりつぶやきながら、ミースの一日はまたすぎていった。

2

「雨で……あるな……」

アルハナーレムは、灰色の空から降り注ぐ雨に打たれながらつぶやく。

目の前には瓦礫の山が見える。岸辺から渡された橋を進んだ湖上の中心に、それは当

時の面影をわずかにしのばせるようにして残っていた。
以前、水の都とうたわれた『レラ・シエル』の残骸である。その瓦礫は、災害を受けて崩れたときの姿をそのまままさらしているのだ。
アルハナーレムは、ふたたび自分がこの場所に立つとは思わなかった。
いままで、避けるようにして生きてきたのだから……。
「どうしたの、アル？」
うしろからユーリィに声をかけられた。振りかえると、心配そうなまなざしがそこにある。
「……何でもないのである。あそこから中へ入れるのである」
我にかえったように冷静な声で、瓦礫の中に現存する施設の入り口を指さした。
ユーリィもその方向に目を向けたが、
「でも、なんか封鎖されてるみたいだ。あれじゃ入れそうにないよ」
「大丈夫である。あそこの鍵は、我が持っているのである」
（えっ、アルが？）
チェリンカが心の中で、驚きの声をあげた。
アルハナーレムは、ひとりごちる。
「もう使うことはないと思っていたのであるが……」

と、複雑な心境をのぞかせた。いままで忘れかけていたものがよみがえり、胸を締めつけてくるような思いがする。

気がつくと、ユーリィもチェリンカも、そして新たに仲間となったナッシュも、神妙な表情でアルハナーレムのことを見守っていた。

たぶん、様子が変だと気づいたのだろう。

とくにユーリィは、

「ここ、あの鬼火が浮かんでくる場所だよね……」

と、幼いころに村の丘から見た記憶をたよりにつぶやく。

彼の亡き父――ラトフが、よく鬼火に向かって祈りをささげていた姿をおぼえているのだ。隣のチェリンカもユーリィのつぶやきを聞いたあとは、しずかになってしまった。ふたりの様子にナッシュも遠慮したのか、何もしゃべらずにいる。

……いけないのである。すっかり、皆を重い気分にさせてしまったのである。

アルハナーレムは自省し、気持ちを切り替えようとした。

「おそらく内部はところどころ崩落しているはずである。この雨だと、ここもそう長く持たないのである。急ぐのである――」

そう言って、みんなを先導しながら瓦礫のレラ・シエルに向かって歩みだす。

――ユーリィたちがこの場所を訪れたのは、アルハナーレムが以前に所有していたという特別な杖を探しだすためである。

それは王都レベナ・テ・ラのコルカ王より賜った『錫杖』で、アルハナーレムが過去に宮廷魔道師であったことを証明する大事なものだ。

それが、この瓦礫と化したレラ・シエルの地下に眠っているという。

ユーリィたちはその錫杖を見つけだし、アルハナーレムが本物のアルハナーレムだということを証明しなければならなかった。

なぜなら、もうひとり――アルハナーレムの名を騙る人物が、王城に存在したからである。

そのアルハナーレムという人物は、奇妙な印のついた丸い仮面をかぶり、病床に臥したコルカ王に代わって執政をつとめているという。

しかも王に謁見を求めたユーリィたちに対して――。

「……あーはっはっは！　これはまた、ずいぶん堂々としたニセモノが現れたもんだ！」

と、まるで取り合わなかった。

その人物に断られてしまうと、ほかにコルカ王と会う手立てがない。

「おまえが本物だという証拠はあるのかい？」

仮面の女は強い口調で訊ねてくる。まわりの衛兵たちもユーリィたちを警戒していた。もはや王宮に、ユーリィたちといっしょにいるアルハナーレムのほうが本物だと証言してくれる人はいなかったのだ。

いまだ病床の身だと伝えられる、コルカ王をのぞいては……。

「わかったのである。我が、我である証を見せればよいのであるな？　さすればお前は偽者であると認め、ここから去ると誓うのであるな？」

アルハナーレムは、自分の名を騙るアルハナーレムにたしかめるように問いかける。

「いいだろう、誓ってやるよ。この偽者め――」

玉座にいる、執政代行の偽者が吐き捨てるように言いかえす。

「言ったであるな。その言葉、ユーク族の盟約に基づき、汝の魂に刻まれたのである。もし違えることあらば――その仮面を剝がし、素顔を晒してもらうのである」

アルハナーレムはそう告げて、王城をあとにした。

証となるものを手にして、戻ってこよう――。

そのためユーリィたちとともに、二度と足を踏み入れるはずのなかったこの地をふたたび訪れたのだった。

3

レラ・シエルの内部はうす暗かった。

しかし驚いたことに施設の一部は、まだ機能しているのだ。動力源であるクリスタルが力を回復させているのだろうか。

アルハナーレムはそんな予感を高めながら、床に瓦礫が散らばる中を進んでいく。

非常灯が灯されたままになっているおかげで、目的の場所に向かう道順に迷うことはなかった。体がおぼえているとおりに歩めばいい。ユーリィたちも、足場の悪い瓦礫の上を乗りこえながらしっかりついてくる。

部屋や通路の床が照らされていて、注意すれば転ぶこともない。わずかな明るさをたよりに進めばよかったのだ。

みんなを先導するアルハナーレムは、いつものような饒舌になれずにいた。それだけ自分の中に緊張感が高まってきている。

……き、気にしてはいけないのである。忘れるのである……。

角を曲がり、広場に出た。左から二つ目の通路に入っていく。その道順も、しっかりおぼえている。

ああ、そうである……。

我はいつもこの通路を通って、教室や研究室に向かったのであるな……。

脳裡には、その昔――この通路を行き交っていた学徒たちの姿までもが浮かんできていた。

むぅ、なつかしい光景である……。

アルハナーレムにはユーリィたちが見ているものとはべつの情景が浮かんできてしまっている。半ば、それにとらわれつつもあった。

ここは、魔法研究機関というお堅い看板を掲げていたわりには、その実情は子供たちがたくさん集うにぎやかな場所であったのだ。

しかし、それはあのときの災害で……。

――いや、当時のことを思い出して何になるというのであるか……。

歩みながら、アルハナーレムはかぶりを振った。

いまは、そのような感傷にひたっているときではない。そう自分に言い聞かせ、地下に降りるための昇降機へ急いだ。

そこは以前、魔法研究機関の学徒たちが使っていた昇降機のフロアである。

円を描いた壁に沿って、昇降機がぐるりと六基備えつけられてあった。
比較的、損傷の少ない区域である。よく見ると、昇降機の機能も生きているらしい。
それぞれのスイッチが赤く光っている。
「ここから降りれば――以前、我が使っていた部屋にすぐたどり着けるのである」
アルハナーレムが説明すると、
「これって、何なの？」
ユーリィがまわりを見まわしながら訊ねてきた。
アルハナーレムはうなずき、説明をつづける。
「これは、昇降機である。地下に行けたり、上の階に行けたりするのである。そう、壁のこのボタンを押せばいいのである」
と、アルハナーレムが説明しながら壁のボタンのひとつに歩みよろうとした。
そのときだ。
いきなり――床の一部分が、アルハナーレムの体重を支えきれずに陥没した。
「ぐおっ！」
「アルっ！」
ユーリィが叫んだと同時に、アルハナーレムはその陥没した穴から転落してしまった。

崩れた穴から落ちたアルハナーレムは、途中でいろんな壁にぶち当たり、跳ねかえされて、またべつの穴に入りこんでしまう。

「うぐっ！　ぐっ！　ぬぬぬぬ～～～っ――」

いつの間にか、通風孔の中を勢いよくすべり落ちている。

――ど、どこまで落ちていくのであるか!?

それは災害時に歪んでへし曲がったのか、くねくねとどこまでもつづいている。途中には風穴も開いていた。そこからぬけ落ち、また衝突した何かにはじきかえされる。

ようやく止まったかと思えたとき、レラ・シエル内のどの場所にいるのかわからなくなっていた。

「こ、ここは……どこなのである？」

床に倒れたアルハナーレムは身を起こし、あたりを見まわす。

地下だということはわかる。しかし見慣れない場所である。

過去にこの施設で働いていたときは、必要な場所以外はめったに立ち入らなかった。

そのうちのひとつなのはたしかなようだ。

「さて、戻らねばならないのである――」

立ちあがったアルハナーレムは、自分がすべり落ちてきた方向に引きかえそうとした。

すると、自分が落下した際に衝撃を与えたのが原因なのか――いきなり瓦礫が大量に崩れ落ちてくる。

「むぅ！」

巻きこまれないよう、あとずさった。土煙が舞いあがり、視界をふさぐ。しばらくしてそれが晴れたとき、アルハナーレムは愕然とした。

瓦礫が、先刻落ちてきた穴をふさいでしまっていたのだ。これでは、もう簡単には引きかえせない。

「……し、仕方ないのである……べつの道から戻るのである」

アルハナーレムはあきらめて、引きかえす。

通路を歩みだすと、被害の大きかった区画に行き着いた。通路が途中から分断されるように崩れ落ちて巨大な落とし穴のようになっていたり、またべつのルートでは瓦礫が積もった状態で、行き止まりになっていたり……。

あちこちの通路を行ったりきたりするうちに、しだいにあせりの色が濃くなってくる。

――はやく、ユーリィたちのところに戻らねばいけないのである。

自分がいないことで、残されたユーリィたちに危険が及ぶ可能性が強い。

アルハナーレムは、ひとりごちた。

閉じこめられ、戻れなくなる――それは、もっとも避けたい最悪の事態だ。

しかし、いくらべつのルートを試してみても出口は見つかりそうにない。うす暗い通路は、迷い人と化したアルハナーレムをあざ笑うかのように、出口を閉ざしているのだ。

アルハナーレムがいよいよ頭を抱えて叫びたくなったときである。

ふいに、それは訪れた。

〝アル先生、どうしたの？　道に迷った――？〟

アルハナーレムはその幻聴を耳にしたとたん、はっとした。

「シュ、シュルム!?」

それは昔、アルハナーレムが教えていた生徒の名である。魔法の研究機関に属する学徒のひとり、リルティ族の女の子だ。

もしかして生きているのか？

思わず、あたりを見まわした。そして近くの瓦礫を取りのぞきだす。――もしかして、この下に！

いや、そんなはずはない。あの災害から何年が経過しているというのだ。落ちつくのである。

と、自分に言い聞かせたときだ。
さらに幻聴が響く。
〝アル先生、こっちだよ――〟
「ん？」
アルハナーレムは顔をあげて、振りかえる。
すると、
「――シュルム！」
頭のてっぺんで髪を結い、タマネギのように見える髪型をした小柄な女の子が立っているのが見えた。
まさかと思い、アルハナーレムは頭の仮面をたたく。しかし、その光り輝く半透明の人影は消えない。
幼子のようなころころとした体形に、そのまん丸い顔だちは、いまも忘れない。
いや、まちがいない――それこそは、アルハナーレムの生徒だったシュルムである。
「な、なぜであるか……どうしてシュルムが、ここにいるのである……」
アルハナーレムは動揺した。
幻覚ではないかと疑いながらも、
「もしや、我に会いに出てきてくれたのであるか……？」

その子の幻に向かって真剣に話しかけてしまう。

「もし、そうであるなら……シュルム……我は、シュルムに謝りたいのである……あのときの……」

アルハナーレムは、自分の声が震えだしたのを悟る。

その子は、アルハナーレムの教え子の中で——唯一レラ・シエルの災害に巻きこまれた犠牲者だった。

突如として襲った豪雨が、水量制御の限界を突破し、施設の倒壊を招いた……。

当時のアルハナーレムは事態を予測して学徒全員を避難させたはずだったが、途中でこっそり施設の中に戻ってしまった学徒がいたのである。それがシュルムであった。

彼女は仲間に「忘れ物をした」と言って施設の中に引きかえしたという。悔やまれるのは、それをアルハナーレムが知ったのはレラ・シエルの塔が倒壊した後だったということだ。

助けにも行けず、申し訳なかったのである……。

アルハナーレムはそのことを思いかえし、シュルムに詫びたいと思っていた。

〝アル先生……いつになったら授業をはじめるの？〟

目の前にただよう半透明のシュルムが、ふいに問いかけてくる。

「シュ、シュルム……」

アルハナーレムは言いようのない悲しさに襲われた。たとえ幻だったとしても、ずしりと重くのしかかってくる。

〝ふしぎなんだよね……いくら教室で待ってても誰も入ってこないし、わたし……教室まちがえたのかな？〟

独り言のように、彼女は首をかしげながらつぶやく。

〝ねぇ、アル先生――早く授業をはじめようよ。わたし、さびしいよ……〟

「う、うむ……そ、そうであるな……」

シュルムは……まだ自分が死んだことを気づかないでいるのであるか。

そのことを感じ取ったアルハナーレムは、たまらなくなる。

「こ、こんな思いを引きずるのであるなら……わ、我も死ねばよかったのであるか！　さすればシュルムは思う存分、我の授業を受けられるのである！　我が、さびしい思いをさせないのである！」

アルハナーレムは抑えていたものが爆発したように叫んでいた。

その叫びによって消されたのか――シュルムの幻が、ふっといなくなってしまう。

「……シュ、シュルム？　どこに行ったであるか!?」

アルハナーレムはあわてて、消えた愛弟子を探す。

だが、彼女は二度と出てこなかった。
いくら探してみても見つからず、またどれほど待ってもあらわれてはくれなかった。
「シュルム……」
アルハナーレムは、がっくりと床に膝をついた。
時間を忘れて、うめきつづける。
悔やむ思いも高まり、アルハナーレムは拳で床をたたきつづけた。
こんなことをしても……彼女は戻ってこない。
わかっていながら、止められない。アルハナーレムが自分でもわけがわからなくなるほどうめき声をあげたときだった。
〝死ぬな、アルハナーレム――〟
ふいに男の声が、脳裡に届く。
聞き覚えのある声だ。
アルハナーレムは顔をあげた。
「ラ、ラトフ様……」
その名を口にしたとたん、アルハナーレムの記憶の底にあったひとつの光景がよみがえってくる。

それは、ユーリィとチェリンカが生まれた翌日のことであった。
ふたりの誕生を祝う宴が催され、楽しい時間をすごせた日である。
夜遅くになって宴はお開きになり、ラトフはアルハナーレムとともに集落の近くにある丘の上にきていた。
久しぶりに男同士の会話だ。
満天の星空の下、丘の上に突き出た岩にふたりで腰かける。遠くにはレラ・シエルの廃墟が残る湖があり、そこには今夜も鬼火がまたたいていた。
その光景を眺めていたラトフが、ぽつりと言う。
「アルハナーレム、ありがとう……」
「ラ、ラトフ様……急にどうしたであるか？」
「ミースとふたりして、わたしによくついてきてくれた。おかげで見知らぬ土地でこんなにも早く安定した暮らしができるようになった。ふたりが力を貸してくれたおかげだ」
ラトフは感謝の気持ちを述べる。
それを聞いたアルハナーレムは、すこし照れくさくなった。
「いや、我は当たり前のことをしただけである。こちらこそ、ラトフ様についてきてよ

かったと思っているのである。あの神殿の手からも逃れられて――」

そこまで言って、アルハナーレムは口をつぐんだ。

今夜はおめでたい日なのだ。何も辛かったときのことを思い出す必要はない。アルハナーレムはそう考えて、話をつづけるのはやめた。

ラトフもしばらく何も言わなかった。ふたりで、じっと鬼火を見つめつづける。あれだけの悲惨な出来事があったというのに、あの場所は――世界じゅうを探してもどこにもないほどの美しい光景に変わっている。

アルハナーレムがそのことをふしぎに思いながら眺めていると、またラトフが口を開いた。

「じつは、アルハナーレムにたのみたいことがある――」

「なんであるか、ラトフ様?」

「うん……いつか、このわたしにもしものことがあったときは――」

「ラ、ラトフ様! 何を言いだすであるか!?」

びっくりして、アルハナーレムは声が大きくなる。

「いや、ちがうのだ。よく聞いてくれ、アルハナーレム。これは、もしもの場合の話だ」

ラトフは諭すように言い直す。

「う、うむ……も、もしもの場合であるな……」
話を聞いてうなずき、アルハナーレムは落ちつきを取り戻す。
ラトフはあらためて話をはじめる。
「わたしは、生まれたばかりのユーリィとチェリンカを——あのふたりを守るために、これからも生きていくつもりだ。しかし、未来に何が起きるかは誰にもわからない……だから、この機会にアルハナーレムにたのんでおきたい……わたしに、もしものことがあったときには、子供たちをたのむ——」
「ラトフ様……」
「わたしはアルハナーレムとミースを、自分の家族のように思っている。もちろん子供たちにも、ふたりのことを親のように思ってほしいと願ってる。だからアルハナーレムたちも——」
「ラトフ様、みなまで言わなくてもいいのである」
アルハナーレムは、ラトフの話をさえぎるように口をはさんだ。
「そんな心配はいらないのである。我は、もともとユーリィとチェリンカの親になったつもりで接する気でいたのである——」
「アルハナーレム……」
「まかせてほしいのである、ラトフ様——」

そう言って、アルハナーレムは自分の胸をたたく。
もしものことなど、あってはならないことだが——ラトフからたよられたことは素直にうれしかった。

その、もしもの場合が——いまは現実になっている。
「ラトフ様……」
アルハナーレムは我にかえり、地下道にたたずんだままつぶやく。
生きていたころのラトフが言った、もしもの場合——不幸にも、いまやそうなってしまっているのだ。
そのことを思い出したとたん、アルハナーレムは気づく。
「我は……こ、ここで何をしているのであるか……」
シュルムのことを悲しんでいたあまり、肝心なことを忘れていた。
いまのアルハナーレムにとって、いちばん大事なこと——それはユーリィとチェリンカのことだ。
亡きラトフに代わって、ふたりの親がわりになる。
あの子たちの支えになっていかねばならない。

水害の事故で亡くなったシュルムのことも忘れてはいけないが――しかし亡くなった彼女の分まで、ユーリィとチェリンカのことを助けていくべきなのである。

それが、アルハナーレムにとってのつとめであり、ラトフと交わした約束なのだ。

「むぅ、そうであったのである――我は、なんとしてもここからユーリィたちのもとに戻らねばならないのである！」

アルハナーレムは力強く宣言する。

ようやく、いまの自分がやるべきことを見つけられた。そうであれば、ここから脱出するために最大限の努力をするべきだ。

アルハナーレムは、自分が落ちてきた場所に戻った。瓦礫で埋まった穴だ。瓦礫をひとつずつ取り除きだす。その撤去作業に全力を傾けた。

「ユーリィたちのもとへ戻るのである――」

たとえどれだけ時間がかかろうとも、ひとつずつ片づけていけば、いずれ道は開けてくる。そう、あきらめないことが大事なのだ。

アルハナーレムは、引っぱりだした破片を脇に置いていく。どんどんそれが溜まって、山のようになっていく。

「まだまだ、がんばるのである――」

気合いを入れ直し、瓦礫の撤去作業を黙々とつづける。

おかげで、ふさがれていた穴の形がしだいに見えるようになってきた。通路の脇に置く、取り除いた破片の山も大変な量だ。

「この、大きなゴミを取れば、向こう側へ通じるのである……ぬっ、うぬぬぬぅ……け、けっこう重いのである……」

アルハナーレムは懸命に、それを引っぱる。

何かにはさまっているのか、なかなかぬけない。

「うぬぬぬぅ……も、もうちょっと……なので、あるぅぅーっ……」

力いっぱいに引きずり出そうとしたときだ。

いきなり、その大きな破片が勝手に奥へと進み、穴の中に引っこんでしまった。

「な、なんであるか――」

驚いたアルハナーレムが、その穴の中をおそるおそる覗きこむ。

すると奥に光が見えた。さっきの大きな破片が向こう側へと通りぬけてしまったらしい。ふさがれていた穴が開通したのである。そしてよく見ると、その穴の向こう側からひとりの少年がこちらを覗きこんでいる。

「むっ！」

アルハナーレムはどきりとした。もちろん、それはよく知っている顔だ。

「……ユ、ユーリィ!?」

アルハナーレムは、穴の向こう側に立つ少年に向かって叫ぶ。
どうやらユーリィたちも、アルハナーレムを捜して瓦礫を取り除きながらそこまで進んできたようであった。

4

ふたたびアルハナーレムと合流したユーリィたちは、地下道から目的の場所をめざした。
こんどは足場に気をつけて慎重に歩んだ。
一見して大丈夫そうな通路でも、どの部分が腐食しているかわからない。表面は頑丈に見えても、その内部は脆くなっているかもしれないからだ。
ユーリィは先頭を歩むことにし、通路の床の硬さを剣で突いてたしかめてから後続のみんなに合図を送る。そうやってすこしずつ前進した。時間はかかったが、確実に進むことができた。
やがて地下道を遠回りしているうちに、奇妙な部屋にたどり着く。
「な、なんであるかここは？　これではまるで村の――」
アルハナーレムはその部屋を見て、言葉を失った。目の前にあるのは、ユーリィたち

の暮らしていた集落に存在したミースとアルハナーレムの家の中とそっくりな部屋だったのだ。

「むっ、誰かくるようである」

反対側にある扉から誰かが入ってくる気配を感じて、アルハナーレムはすばやく本棚の陰に隠れる。ユーリィたちも、それにしたがう。

すると扉を開けて、ひとりの女性が入ってきた。幼児のように小柄な女性である。

「ただいまなのですー。おかえりなのですー。ふぅー。ずいぶんとお疲れのようなのですー。どこまで行っても瓦礫だらけで出口が見当たらないのですー。元気出すのですー。あきらめちゃダメなのですー。あきらめないのですー。とっとと脱出してふたりを、ユーリィとチェリンカが……待って……でも……ミースだけじゃ……もう……えう……」

ひとりでしゃべりつづけたその女性が、徐々に涙声になってしょんぼりする。

「ミース――」

ユーリィが物陰から飛び出した。

そのミースと呼ばれた女性はどきりとしたが、すぐにのんびりした表情に戻って話しだす。

「あー、久しぶりのお客様なのですー。遠いところ、ようこそきやがったのですー。たいしたお構いも……」

「ミース……ミースなの？」
ユーリィはもう一度、たしかめる。
「へ――あれ、なんでミースのこと知って？」
「ぼくだよ、ユーリィだよ。忘れちゃったの？」
「……またまたご冗談を」
「冗談ではないのである。気持ちはわかるのであるが、ユーリィとチェリンカである」
アルハナーレムも物陰から出て、そのミースに説明する。
彼女はアルハナーレムの姿を見て、やっと状況が呑みこめたらしい。
「……うっそーん？　ひぁぁぁっ!?」
「よかった……やっと会えた！」
ユーリィがよろこびのあまり、小さな体のミースを抱きしめていた。
「ミース……遅れてゴメンね……」
ユーリィがほっとして、あらためて話しかける。
その姿をミースはまじまじと見つめなおす。そして、あとから顔を出したチェリンカにも目を向けている。
「ユーリィ……チェリンカ……？　幻じゃ……あぅぅ～、懐かしい匂いなのです……じゃあ……ほんとうに……うぐ……チェリンカ……えぐ……ユーリィ……ひっく……う、

うわぁぁぁぁぁんっ！　本物なのですー。寂しかったのですー」
（わたしもだよ――）
チェリンカが心の声でそう話しかけると、
「ぴぎゃ――――っ！」
ミースは大声で泣きだした。かと思うと、
「にへー」
と、にやけてみたり、
「はぁぁぁぁふうううううう……」
さらに幸せをかみ締めるように、とても長～い息をついたりしている。
「ねぇ――ミースは、ずっとひとりでここに？」
ユーリィは気になって訊ねた。
聞かれたミースは、思い出すように虚空を見つめて話しだす。
「そうなのです。数年前の、あの雨の日――変な仮面をかぶったやつが突然あらわれて、ミースを――ミースを錬金ポットの中に詰めて、村のあの崖から落っことしやがったのです！」
「……え？」
ユーリィが、はっとする。

数年前の雨の日というと――それは父を殺したチャスペルが、村に侵入してきた日のことである。あの冷たい雨の日の夜――ユーリィは知らなかったが、アルハナーレムとミースのふたりは、チャスペルと外で闘っていたというのか。

「それはもう散々だったのです。落ちまくり転がりまくりの最後に大ジャンプ、飛びまくりだったのです。ガラガラ、ひゅーん、メーデー、メーデー、操作不能！　ばしゃーん、ぶくぶくー、なのです」

「え、えーと、もしかしてそれで……村からここまで、飛ばされてきたの？」

ユーリィが話を整理するように確かめる。

「そうそう、それなのです。気がついたときは、ここに……九死に一生ミラクルなのです。ミースはいい子だから無敵でよかったのです。でも入り口が封鎖されてて、結局ずっと出られなかったのです」

ミースの話に、ふとユーリィは思い出す。

「入り口が封鎖……あそこの鍵は、確かアルが……」

「にゅ？」

「あ、ううん、なんでもない。大変だったんだね……でもよかった、生きていてくれて」

「当たり前なのです。ユーリィとチェリンカを残して死ねるかです」

ミースの力強い返事に、
「……ありがとう」
ユーリィは、ほほえんでかえす。
「ミース、いい子？」
「うん」
ユーリィは笑顔でうなずき、ミースの頭を撫でてあげる。
「んにゅ～、こ、これ……んにゅ～、こ、これ……これなのですー。はぁ～～～～～～～～、ふぅ～～～～～～～～～～……」
ミースは撫でられながら、じつにうれしそうだ。
あの村に住んでいたとき、ずっとこれでミースをよろこばせてきた。
こうしてミースの頭を撫でていると、幼かったころに戻ったような懐かしさがこみあげてくる。
頭を撫でられながらミースは言った。
「はぁ～～～～、よかったのですー……昔とちがって、ユーリィは大変身なのです。びっくりなのですー。ラトフ様があだったから、ユーリィまでヒゲモジャになったらと、ずっと心配だったのですー」
「あ、あはは……べつにぼくは、それでも構わないけど」

「ななな、なにを言うかです!?　否！　断じて否なのです！　ジョリジョリのユーリィなんて、ダメなのです！」

ミースは、何度も首を振って主張する。

と、そこで――ふいに何かに気づいた表情に変わった。

ミースはしきりにユーリィたちの人数を確認するように見まわしたあと、

「ところで、ラトフ様は――どうしたのです？」

訊ねられたとたん、ユーリィの表情が曇る。

「お、おとうさんは……」

言いづらそうにつぶやく。ユーリィがその先を話そうとしたら、ミースが手をさしのべるようにしてとめた。

彼女はしずかに首を振って、

「わかったのです……その先は、言わなくてもいいのです……」

「ミース……」

「ユーリィたちが生きていてくれただけでも……それだけでも、よかったのです……」

ミースはしんみりとした表情で言う。

このことを予測して、覚悟を決めていたような雰囲気がある。

しばらくして、

「ところでミース、我の杖を見なかったであるか？」
話題を変えるように、急にアルハナーレムが緊張した声で訊ねた。
この部屋には、集落に住んでいたときと同じような調度品の数々が同じような間取りに配置されてある。きっとそうすることで、長い期間に及ぶ孤独を自分で癒そうとしてきたのだろう。
「これだけのものを集めたのであれば、我の杖も見ている可能性が高いのである」
「杖……？」
アルハナーレムに向き直ったミースが目をしばたたかせる。
「そうである。昔、我が持っていた——王より賜った『錫杖』である」
「錫杖？　あー、そういえばあったのです！」
「おお、やはり！　どこにあるのであるか？　それがあれば、我が我である証を……」
「ないのです」
「む？　しかし、先ほど……」
「見つけたあと、速攻で燃やしたのです」
「……へ？」
アルハナーレムの身が硬直した。
「よく燃えたのです。とてもよい燃料だったのです。おかげでポカポカだったのです」

「……な、な、な……なんてことをしてくれたのであるかーっ!?　あれは、コルカ王より賜った大切な品である！　それを燃やしたとは何事であるか！」

アルハナーレムが怒りだすのも無理はない。わざわざそれを手に入れるために、危険を冒してここにきたのだから……。

「何、怒ってやがるのです。カルシウム足りないのです。小魚を牛乳で流し込むといいのです」

「むきーっ!!」

アルハナーレムは悔しそうにうなる。

だが、ミースのほうは臆することなく言い放つ。

「その杖がどれだけのものかなど関係ないのです。ミースは生きてふたりに会えるためなら何でもするのです。命より価値があるものなど、この世にないのです。おまえは命と杖を天秤にかけるのかです」

「ぐ……むむ……むむむっ。悔しいであるが、そのとおりである。しかし……むぅぅぅ……」

ミースの言ったことに納得したものの、あきらめがつかないアルハナーレムだった。

「わかればいいのですー。このミースに勝とうなど、二万年早いのです」

ミースはいつもの明るい笑顔に戻っている。

その一方でアルハナーレムは、
「むぅ……せっかくここまで来たというのに……我の証は、炭であるか……」
あきらめるしかないのだが、ため息ばかりついていた。
それをよそに、ミースはチェリンカのもとに歩みよっていく。
「チェリンカも無事でよかったのです。しばらく会わないうちに、ずいぶんと女らしくなったのです」
(えっ、そ、そんなことないよ)
「これからはミースが、レイディーのたしなみを教えてあげるのです」
(い、いいよそんなの。わたしには、まだ早いよ)
と、チェリンカが照れたときだった。
「チェリンカ、声はどうしたのです?」
(うん……なんか出なくなっちゃって……あ、あれ? ミースも、わたしの言葉がわかるの?)
「わかるに決まってるのです。言葉を音声のみにたよるのは、人の悪い癖なのです」
ミースは平然として答えたのだが、
「チェリンカは子供のころから考えてることがダダ漏れなので……え――――っ!?
声が出なくなっちゃったのかです?」

（うん……）

チェリンカがうなずくのを見て、さっきまでの堂々とした話しぶりはどこへ行ったのかと言いたくなるほど、ミースはうろたえだす。

「た、たたた、大変なのです！　なんでそんな大事なこと黙ってたのです!?　なんで、もっと早く言わないのです。びっくりなのです！」

（あ、でも大丈夫だよ。みんなには、ちゃんと通じるし）

チェリンカは心配させまいと、にっこりして答える。

しかしミースは、首を何度も振って言う。

「心配いらないのです。家に帰ったら、ミースが治してあげるのです」

（治るの!?）

「当然なのです。ミースに不可能はないのです。ちょっと苦い薬を飲むだけなのです」

（も、もしかして子供のころに飲まされた、ミースが調合したアレ？）

「そうなのです！。効き目はバッチリなのです！。でも今回は、もうちょっとだけ苦いのです。さあ！　そうとなればチェリンカのためにも、早くここから出るのです」

と言って、扉に急ごうとしたミースであったが、ふと立ち止まって戻ってくる。

「ところで……その前に、この空気に馴染みすぎて、まったく違和感のないこいつは、誰なのかです！」

と、半裸の姿で立っている少年の前に近づいた。
「……ン？　おれか？　おれ、ナッシュ。早くメシにしよう！」
ミースににらまれたナッシュが答える。
そうだった——ミースは、まだナッシュのことを知らなかったんだ。
ユーリィがそのことに気づいて、説明した。
「ナッシュとは、深淵の森で知り合って友達になったんだ」
「トモダチだ」
ナッシュが、ユーリィの言葉にうなずく。
「……」
ミースは、そのナッシュの顔をじーっとのぞきこむ。
するとナッシュも同じようにミースの顔を見つめかえす。しばし、ふたりして怒った顔をしたり、笑ったり、にらめっこのようなことをしたあと、
「……何だ、いいやつなのですー。歓迎するのですー」
と、あっさりミースは笑顔になった。
「……な、なぜそれで、会話が成立するのであるか……」
アルハナーレムは、ふしぎそうにつぶやいた。

意外な場所でミースと再会したユーリィたちは、レラ・シエルから脱出しようと地下道を進んだ。

目的の品物だったアルハナーレムの『錫杖』が焼失したとわかった以上、もうここに長居は無用である。

すでにアルハナーレムが入り口の鍵を開けているので、すぐに戻れるのかと期待したのだが、そこまでたどり着くのには、ミースくらいの小さな体しか通れない狭いところを進んでいく必要があった。ミースより体の大きいユーリィたちには無理である。

結局、べつのルートを探すしかない。

ユーリィたちは、迷路のようになった地下通路をあちこち試していく。やがてひとつの大きな広場に行き当たった。

「ここは……」

ユーリィは立ち止まって、その空間を眺める。

いくつもの水路が縦横に走る溝渠の上に、一本の長い橋がかけられていた。その橋の上から先のほうに目を向けると、向こう側にも重厚な扉がある。それは開くのかどうかわからないが、確かめてみる価値はある。

ユーリィはそう考え、

「行ってみよう――」
みんなに告げたあと、橋を駆けだした。
全員、ユーリィと同じ考えなのか、あとにつづいた。
そして橋の途中まで来たときだ。
ズズズズズッ……。
いきなり地下の広場全体が揺れはじめた。
「ひあぁぁっ！　じ、地震なのです!!」
立ち止まったミースが叫ぶ。
「む、マズいのである。この震動は崩壊(ほうかい)が――!?」
アルハナーレムもあたりを見まわし、危機を察する。
地下全体の揺れは、ますます大きくなった。
「逃げよう！」
ユーリィは、ふたたび橋を渡りきろうと走りだす。
だが、向こう側までは遠い。ユーリィたちが駆けているあいだに、施設の天井から、崩壊の兆しを告げるようにたくさんの物が落下しはじめる。
「わぁ！　すげェ！」
駆けているナッシュの近くに、大きな瓦礫がドスンと落ちていた。

――いけない、このままじゃみんなが！
ユーリィがそう思ったときである。
（きゃあっ！　ユーリィ、あの柱が――）
チェリンカが、危険を知らせてきた。
ユーリィがその方向を見ると、地下の広場に立っていた大きな柱のひとつが罅割れ、いまにも倒壊しそうに傾きだしている。
「――っ！」
ユーリィは息を呑んだ。
もし、その柱がそのまま倒れてきたら、橋の上にいるユーリィたちも無事ではいられない。
――いやだ！　こんなところで終わるものか！
とっさに心の中で叫んでいた。
しかし、その望みは届かず――巨大な柱は、こちらに向かって倒れてくる。
「わあぁっ！」
全員がいっせいに声をあげた。
そのときだ。
ユーリィは無我夢中で、力を放っていた。

ズズズズズッ……。

ユーリィたちのいる橋めがけて倒れてきた柱が、なんと宙で静止してしまっている。

（えっ……）

驚きの表情でチェリンカが、ユーリィを見つめる。

チェリンカだけでなく、ほかのアルハナーレム、ミース、ナッシュも呆気にとられていた。

ユーリィは腕を突きあげ、懸命に倒壊しかけた柱に念じていたのである。

「みんな、いまのうちに――早く！」

無我夢中のユーリィは、それだけを言うのが精一杯だった。

みんなはユーリィの努力を無にしないよう、ふたたび走りだす。

向こう側の扉にたどり着くと、ユーリィを呼んだ。

（ユーリィも早く、こっちへ！）

チェリンカの心の声が聞こえる。

踏ん張っていたユーリィは、構えを解いて走りだす。みんなが待っている扉のほうをめざして一気に橋の上を駆けていく。

それと同時に、宙で静止していた巨大な柱が倒れだす。ほかの瓦礫もユーリィが突如として使った力で止まっていたのか、次々に落下を再開する。

（早く早く！　ユーリィ！）

待っているチェリンカもあせってくる。

――もうすこしだ。

ユーリィはみんなの前に到着した。その刹那、巨大な柱が轟音をあげて横倒しとなると、その落下した場所に存在した橋が、途中で分断されてしまった。

あぶないところだった……。

ユーリィが安堵の息をついて、みんなのほうに向き直ったときである。

「あっ……」

突然、ユーリィは目眩を感じる。急に身体が重くなり、立っていられなくなりそうな状態に陥ってしまった――。

5

テテオの魂は父のもとを離れ、レラ・シエルの地下にある制御室に隣接する『クリスタルの間』に来ていた。

ほんとうのことを言うと、訪れたくなかった場所である。

自分が亡くなった場所に戻ってくるのは辛いことであったが――しかしユーリィたち

がここに足を踏み入れた以上、避けるわけにもいかない。
停止したままの設備をすこしでもよみがえらせ、ユーリィたちの手助けをしたい。
そう考えたテテオは、クリスタルの動力を一時的に復活させていた。
もちろん完全にまでは至らないが、非常灯や扉の開閉ていどは稼働させられていたのである。
（……）
テテオはクリスタルを見あげる。
あのときは真っ赤に光っていたのに、いまはもとの青い輝きを取り戻している……。
生前、テテオは視察の名目でここを訪れ、ラトフたちの導きで王都からの脱出を図ろうとした。しかし、それは神殿側に察知され、豪雨で足止めを食っていたときにチャスペルに捕まってしまうという結果を招く。
そしてチャスペルは、テテオをこの地下制御室にあるクリスタルの中に閉じこめてしまったのだ。
そのあとは、思い出したくもない惨劇が――。
テテオが、過去から目をそむけようとしたときだった。
クリスタルの間の扉を開けて、ユーリィたちが入ってきた。

「ひぃー、あぶなかったのですー。危機一髪なのですー」
なつかしいその声は、ミースだ。
「ふむ、ここはまだ施設の機能が生きているようであるな。とりあえずここで休むのである」
アルハナーレムはうしろを振りかえって、ユーリィに言った。
そのユーリィは疲れているのか、すこし足がふらついている。
（ユーリィ……）
隣を歩むチェリンカが、心配そうな顔で訊ねた。
「大丈夫……大丈夫だよ」
ユーリィは疲れた顔のままチェリンカに返事する。
しかし、
「大丈……夫……なんでも……ない……から……」
意識が朦朧としてきたのか、途切れ途切れの声になって倒れそうにふらつきだす。
（ユーリィ？　ユーリィってば！　あっ――ユーリィ！　なんでこんなに体が冷たく!?　全然大丈夫じゃないよ、少し休もう。ね？）
チェリンカが支えるようにユーリィの腕に触れたとたん、
「大丈夫……大丈夫……だか……ら……」

そう答えるユーリィだが、
「かはっ!?　ケフッ！　ケフッ！」
突然、咳きこんでしまう。
（――ユーリィ！）
そのチェリンカの叫びに、みんなが集まってくる。
「ユーリィ！　顔が真っ青なのです！」
ミースも、ユーリィの顔色の変化に気づく。
「チェ……リン……カ……」
立っているのがやっとのユーリィがつぶやく。
（寒い？　寒いの？　ユーリィ、しっかりして！　ユーリィ！）
もうチェリンカの呼びかけも届かないのか、ユーリィはがっくりとくずおれ、そのまま床に倒れてしまう。
（そ……そんな……うそ？）
チェリンカは呆然とする。
「むぅ、まずいのである」
アルハナーレムも緊張した。
（ユ、ユーリィ……やだよぅ……ユーリィ……誰か、助けて……ユーリィが……）

チェリンカは、うつぶせに倒れたユーリィを揺り動かしながら呼びかけている。
さきほど突発的に力を使ったことが原因なのだろうか。
ユーリィは、倒れたまま動かない。
――このまま死んでしまうのだろうか。
（ユーリィが死んじゃう……死んじゃうよぉ……け……て……）
呼びかけるチェリンカに異変があらわれた。
「助けてっ！　誰かユーリィを助けてぇっ！」
チェリンカは無心で叫んでいた。それがいつもの念話ではなく、外に発した声であることにも気がつかず、チェリンカはうったえつづけたのだ。
「だめっ、ユーリィを連れていかないで！　お願い、ユーリィを助けて！　ユーリィ、ユーリィ……お願い生きて……行かないで……わたしをひとりにしないで……ユーリィ!!」
倒れたままのユーリィを呼びつづけるチェリンカの声が、悲しくクリスタルの間に響く。
誰もが無言で見守る中、チェリンカに話しかけてくる存在があった。
（大丈夫です、チェリンカさん――）
テテオの声だ。

チェリンカが顔をあげると、離れた場所に安置されたクリスタルのそばにうすく輝くようなテテオの姿があった。

テテオは、チェリンカを招くようにゆっくりとうなずく。チェリンカはそれに応えるように立ちあがり、テテオのそばへと近づいていく。

ミースとアルハナーレムは呆然とし、ナッシュは神妙な顔でチェリンカのことを見送った。

(チェリンカさん、わたしの法衣を使ってください)

テテオは、そばに寄ってきたチェリンカに告げる。彼女が宙に浮かぶその下には一着の衣が落ちていた。

古くてすこし汚れているが、よく見ると、王家の紋章が刺繍された豪奢な法衣であることがわかる。

チェリンカはそれを床から拾いあげ、あらためてテテオを見つめかえす。

「これを……使うの？」

その問いにテテオがうなずく。

(はい。ここで死したわたしが、本来まっとうするはずの生命を——その法衣を通じて、ユーリィさんに分け与えましょう)

「……わかったわ……これをユーリィに」

（はい）

テテオが微笑む。

チェリンカは法衣を両手に抱えたまま、ユーリィのもとへ戻る。

倒れて動かないユーリィの背中に、そっとその法衣をかぶせた。

すると、テテオの輝きが増す。目を閉じて念じている表情になる。彼女の力が法衣を媒介にして、ユーリィに与えられていく。

その様子をチェリンカは驚きの表情で見守っていた。

やがて冷たくなっていたユーリィの肉体に、その魂が戻ってくる。

「うっ……ううっ……」

うつ伏せになったユーリィから声がもれた。

「ユ、ユーリィ!?」

チェリンカは、元に戻った声で呼びかける。

ゆっくりとユーリィが目を開けた。

「……チェリンカ……」

上体を起こし、ユーリィはうすくほほえむ。

「ぼくは……どこにも行かないよ……約束……したじゃないか……」

「ユー……リィ？」

「声……出るようになったんだね」
身を起こしたユーリィが訊ねる。
チェリンカは、なんどもうなずきかえす。
「うん……うん……よかった……ユーリィ……よかった……」
「チェリンカ……心配かけてごめんね」
「もうあんなことしないで。わたしたちの力はふたりで意味をなすもの。ユーリィだけで……意志の力だけで、それをすればユーリィは……ユーリィは……」
チェリンカは涙声で話しつづける。
ユーリィは、黙って聞いていた。
「だから、ユーリィ——もうあんなことは絶対しないで。ユーリィがいなくなったら、わたし……お願い、わたしをひとりにしないで——」
「チェリンカ……そうだね、ぼくは、大切なことを忘れてたみたいだ……ずっと一緒にいるって約束したもんね……」
「そうだよぉ……ひどいよぉ……」
「うん、ごめん。もう絶対にしないから」
「うん……うん……約束やぶっちゃダメだからね」
チェリンカのお願いに、よみがえったユーリィは誓うようにうなずきかえした。

6

ユーリィが無事に生還したのを確認したアルハナーレムは、室内の様子を探ろうとしていた。

「ここは、この施設の最中心、そして最深部にあたるクリスタルの間である。昔はこのクリスタルから力を得て、施設を動かしていたのであるな。いままで力を失っていたのが、チェリンカのクリスタルに呼応して再び力を取り戻したのである。あの状態から、まだ動くとは驚きである――」

アルハナーレムはぶつぶつ言いながら、自分の考えをまとめていく。

その隣に、ナッシュがやってくる。

「雨の匂い……上か？」

見あげてつぶやく。

アルハナーレムもそれにつづいて天井をあおいだ。ナッシュのするどい嗅覚は、外部の空気を嗅ぎとっているらしい。

それもそのはず、クリスタルの真上に外部とつながった大きな筒が垂直にのびているのである。

「センターシャフトであるな……採光のために、ここより全階層を貫いて地上へとつながっているのである。クリスタルは自然光のもとでこそ、いちばんの効率を発揮するのである。ふむ、暗いということは地上はもう夜なのかもしれないであるな」
「なんだ、じゃあここ、のぼっていけば外に出られるのか？　行こうぜ、ここ飽きた」
ナッシュが、アルハナーレムに言った。
しかしアルハナーレムは、しばらく考えたのちに答える。
「垂直に切り立った坑道を、何の道具もなしに地上までのぼるなど不可能なのである」
「じゃあ、どうすんだ。ここで暮らすのか？　ハラへったぞ」
「むう、緊急避難用の転送式はあるのであるが、このクリスタルの出力では……地上にある転送式も作動できれば、なんとか繋がると思うのである。しかし、それには誰かが地上に行かないとダメなのである。転移魔法でもないと不可能である」
アルハナーレムはまわりに視線を向けて可能性を探ったが、どうもいい方策は見つかりそうにない。
「その地上の何とかってのは、誰でも大丈夫なのか？」
「スイッチと連動しているから、乗るだけで作動するはずである」
「おもしろそうだな。よし、おれが行ってきてやる！」
突然、ナッシュはクリスタルに向かって歩みだした。

「何を言っているのであるか。地上までどれだけあると思っているのであるか。坑道は垂直でつかまる突起もなく、しかも闇に包まれているのである。危険である。無茶である――」

「大丈夫だ。まあ、見てろって。よっと！」

そう言ってナッシュは、クリスタルによじ登っていく。なんとも身軽な少年である。彼はクリスタルのてっぺんに立つと、さらに上のセンターシャフトに向かって飛びあがり、大きな管の内側にある壁から壁へ跳躍をくりかえしながら、すこしずつのぼっていったのだ。

「むう、もう見えなくなってしまったのである。すごい身体能力なのである」

アルハナーレムは、その姿に感心しながら見送った。

「よっ……はっ……」

ナッシュはセルキー族特有の身軽さで跳躍をくりかえし、空洞となった大きな管の中をのぼりつづける。

その途中にテテオの魂が待っていた。

（ナッシュさん――）

（おう、セーレェさま。久しぶりだな）
（はい……上のほうまで、わたしがお導きいたします）
そう言って宙に浮かぶテテオの魂は、ナッシュとともにセンターシャフトをのぼっていく。

一方――クリスタルの間では、
「体はもう大丈夫なの？　無理しちゃダメだよ」
チェリンカが、立ちあがったばかりのユーリィに心配そうに声をかけていた。
「いつもより調子がいいくらいだよ。さっきまでの寒さが嘘みたいだ。何をしたの？」
ユーリィは自分の両肩にかけられた法衣を気にしながら、チェリンカに笑顔をみせる。
「……あの子が助けてくれたの」
チェリンカは神妙な顔で、ユーリィの肩に乗せられた法衣を見つめる。
その視線にユーリィも気づいて、
「……この服……なんだろう、どこかで見たことがある。それにあの子って？」
「ほら、覚えてるかな……昔、洞窟で会ったことあるでしょ。あのときはびっくりして、逃げちゃったけど」

「ああ……お父さんを追って、城下町の旧市街に行ったときも会ったよね。うん、おぼえてる。ほんとだ……これ、あの子が着ていた服と一緒だね」

「うん……」

チェリンカが思い出すように微笑む。

「そうか……どうりで、見覚えがあるはずだ……でも、何でこんなところにあるんだろ」

ユーリィがそう疑問を口にした直後だ。

それまで呆然と法衣を見つめていたミースが我にかえったように、あわわて訊ねた。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと待つのです！　なんでふたりが、この服を知っているのです？　しかもあの子って……この服の持ち主と会ったことがあるのです？」

「うん、子供のときに何度か」

ユーリィは思い出すような表情を浮かべて答える。

「小さくて、明るい髪の色をしたおかっぱ頭の女の子だったかな」

ユーリィにつづいて、チェリンカも口を開く。

「……そして、いつも寂しそうにこっちを見てた」

「そ……それ……間違いないのです……テテオ様なのです……この服……テテオ様の物なのです。間違いないのです！」

「そう、あの子テテオっていうんだ――彼女も、ずいぶんと大きくなってるだろうね。会ってみたいな」

「……ユーリィ……彼女はもう……」

チェリンカは小声で真実を教えようとする。

だが、ユーリィはそれが聞こえなかったのか、かまわず話をつづけた。

「いつもすぐいなくなっちゃうから、チェリンカが幽霊と勘ちがいしちゃってさ。チェリンカ、お化けとかそういうのダメだったから、あの子と会うたびにすごかったんだよ」

「よ、余計なことは思い出さなくていいの！」

チェリンカが叱ろうとしたあとに、

「……ユーリィ、残念だけどテテオ様はもう大きくなることはないのです……う……テテオ様……こんな所で……えっく……ずっとひとりで……」

「ミース、どうしたの？」

ユーリィは、いきなり泣きだしたミースにびっくりする。

「ユーリィ、そっとしてあげて……」

チェリンカがそう言うと、ついにミースの感情が爆発した。

「うあぁぁぁぁぁん、テテオ様ぁーっ、かわいそうなのですー。ぴぎゃ――っ！

あんなにおやさしかったテテオ様が、こんな……ひどいのですー っ、ぴぎゃ――――っ！」

「ミース、泣かないで……あの子はもう死んでしまったけど、それでも消えてしまったわけではないわ」

チェリンカはミースのそばによって、自分だけが知る事実を明らかにする。

「にゅ……？」

その話に、ミースはチェリンカのことを見あげた。

「わたしにはあの子が見えるの。さっきもユーリィを助けてくれたのは彼女だったのよ。いまだって、どこからか、わたしたちのことを見守ってくれてる……」

「ひっく……ひっく……ほんと？」

「うん、だからミースが泣いてたら、やさしい彼女が心配してしまうでしょ。いつものように笑ってあげて、ね？」

「う……わ……わかったのです……やってみるのです……」

ミースは涙をぬぐって、クリスタルの間を見わたした。

「テテオ様ー。ミースは元気なのです。心配はいらないのですー。ずっと、会って言いたかったのです。ミースはやさしいテテオ様のことが大好きだったのですー。テテオ様と過ごした楽しい時間、ミースはずっとずっと忘れないのです……」

思いの丈を虚空に向かってぶつけたミースは、深く息をつく。
「えう……難しいのです、うまく出来ないのです……」
「そんなことない。とてもよろこんでいると思う」
「……そうだと、うれしいのです……」
ミースは、ぽつりとチェリンカに答える。
チェリンカはテテオの姿を見たと言った。ユーリィも、ずっと前から見ていたと言う。だったら、きっとミースの、いまの話だって聞いていてくれたかもしれない。いや、何度だって言う。チェリンカが「いるよ」と教えてくれたときは、かならず伝えよう。たとえ見えなくても、気持ちさえ伝わればいい……。
ミースがそう考えていると、
「彼女のことを教えてくれるわね？　こんどはわたしたちが、テテオさんを助けてあげましょう」
チェリンカが言った。
「にゅ……」
ミースはゆっくりとうなずき、チェリンカとユーリィに向き直った。

7

「テテオ様は、レベナ・テ・ラの第一王女さまだったのです。コルカ王さまのご息女なのです」

「え……じゃあ……お姫さま!?」

チェリンカが目を見張る。

「そうなのです。そしてテテオ様は、大変な素質を持ったクリスタル使いでもあったのです」

「クリスタル使い……？」

聞きおぼえのある顔で、チェリンカがつぶやいた。

「特異なほどクリスタルの力をあやつる能力に長けた人をそう呼ぶのです。チェリンカと同じ力なのです」

「わ、わたしのはそんなのじゃないよ。生まれつきだもの。ユーリィがいないと、何も出来ないし――」

「クリスタルの能力は素質なのです。訓練で伸ばすことはできても、その上限は決まっているのです。チェリンカのはたぶん、アーチェス様から受け継いだものなのです」

「アーチェス……お母さん？」

記憶をたぐりよせたかのようにチェリンカがたずねる。

「アーチェス様こそ、レベナ・テ・ラでもほかに類を見ない、最高のクリスタル使いなのです。その力は未来を見通せるとも言われ、みんなからは『星詠みの巫女』と呼ばれていたのです。ミースはアーチェス様付きの侍女で、テテオさまの教育係も任されていたのです。ここへは、テテオさまのクリスタル制御の勉強を兼ねて、視察にきたのですが……」

と、そこでミースは口をつぐんだ。

そこから先のことは——なかなか口に出せない。

すると、

「そこで事故にあった……そこからは我が話すのである」

アルハナーレムが、ユーリィたちのもとに歩みよってきた。どうやら話が聞こえたらしい。ナッシュと話していて、施設の上のほうにのぼっていった彼を見送っていたアルハナーレムが代わってユーリィたちに説明をはじめた。

「レベナ・テ・ラは、古よりクリスタルに関するさまざまな知識を持ち、魔法によって栄えた国である。そのレベナ・テ・ラが長い年月をかけて建設したのが、この施設なのである。役割はふたつ。ひとつは王都をシエラの水難から守るための巨大な制御装置と

して。もうひとつはクリスタルのさらなる研究と優れた術者の育成を目的とした学術機関としての役割である。王立の両施設としてここを任されていたのが――我とラトフ様である」

「アルと……お父さんが？」

こんどはユーリィが目を見張る。尊敬する父のことだけに、その反応も大きかった。

アルハナーレムはユーリィにうなずいたあと、話をすすめる。

「我々はここにあるクリスタルを中心に、施設すべてに魔法的な術式を張りめぐらせ、集中的に管理することにした。施設が持つ能力は飛躍的に上がり、論理上はシエラの全水量を自在に制御できるようにまでなったのである。あの日……シエラは連日の大雨に見舞われて、我は教え子たちの避難を誘導していたのであるが――突然、空へ紅い光が昇って……クリスタルが拒絶反応を示して暴走し、施設は一気に崩壊したのである」

部屋を見まわしながら語っていたアルハナーレムが、ため息をつく。

「あとは見てのとおりである……多くの犠牲者を出し、ここは瓦礫の山となった。ただ、いまにして思えば、暴走というのは変であるな。クリスタルは感応触媒である。術者の感応力に反応して魔素を形成し、意志を持って式となす。クリスタル自体が暴走することはないのである」

そこで、ふと何かに気づいたかのようにアルハナーレムは話を止めた。

アルハナーレムはしばらく考えこむようなしぐさを見せたあと、独り言のようにつぶやきはじめる。

「あのとき見た紅い光……そして突如として変異したと思われるクリスタル。どちらも術者が悪しき力の具現のためにクリスタルを使用しなければ、起こらないことである。それも、クリスタル使いレベルの者が……である」

「やめるのです！　それ以上テテオ様を疑うなら――ミースは許さないのです！　あのテテオ様が、そんなことをしたというのですか!?」

突然、ミースがアルハナーレムに食ってかかる。

「ミース、落ちついて。アル――わたしも、彼女はそんなことしないと思う」

チェリンカが割って入った。

「そうなのである――そこが、謎なのである――」

「へ？」

ミースは、まだ考えこむようにつぶやくアルハナーレムに目をしばたたく。

どうやらアルハナーレムは、テテオのことを疑うのではなく――その先に隠れている真実に迫ろうとしていたのだ。

「クリスタルに優れた感能力を発する、すなわちそれだけ聖なる力で満たされている者なのである。クリスタルは力を拒絶して紅くなる。クリスタルに反するは悪しき邪なる

力。クリスタルと対極するは月……月……月……月の……民？」

ひとつの答えに行き着いたように、アルハナーレムが顔をあげる。

「月の民というのは、悪しき心に囚われている者の通称である。不吉なことは月夜の晩に起こるという伝承があって、そこからつけられたのであるな――となると……」

またアルハナーレムが独り言のようにつづけようとしたときだ。

ミースが、アルハナーレムに歩みよった。

「ま、待つのです！　いま、月の民と言ったのです!?」

「言ったであるが、月の民は――その悪しき心により、クリスタルは使えないのである」

「ちがうのです。以前テテオ様が、神殿の教皇をそう呼んでたのです。確かあれは前の教皇様がお亡くなりになって――新教皇の拝命式のときだったのです。テテオ様があの白ヒゲのじじいの顔を見るなり、ひどく脅えて……そうもらしたのです。会場は騒然となったのです。そのとき白ヒゲはものすごい形相で……あんなのが、聖人のはずないのです。だからきっと、そうなのです！　何だかわからないけど、神殿はクリスタル使いが必要なのです！　あのときだって、アーチェス様を……！」

思わずミースが口走った瞬間、アルハナーレムが声をあげる。

「ミースッ！」

「あ……」
自分の口を手でふさぎ、ミースはあわてた。
「おかあさん？　お母さんをどうしたの!?」
チェリンカの顔色が変わる。
「……あうあう……」
「ミースッ！」
チェリンカが語気を強めて、ミースに詰めよる。
それを見て、アルハナーレムは隠しきれないと悟った。代わりに自分が、チェリンカたちに話すことにする。
「……アーチェス様も……ふたりが生まれてすぐ、神殿に連行されてしまったのである」
「な、なんだって!?」
ユーリィが声を荒らげた。ふたりにとって衝撃の大きい話である。
チェリンカは声をふるわせる。
「お母さんが……神殿に……じゃあ……お母さんは……お母さんは……」
「チェリンカのときと同じように……」
ユーリィが悪い想像をめぐらせてつぶやく。いや、その想像はおそらく外れていない

だろう。数年前の雨の日、チャスペルが村を襲撃したのは——チェリンカをさらうためだったのだ。

「なんで、ふたりとも教えてくれなかったの？」

チェリンカが、怒りの矛先をアルハナーレムとミースに向ける。

たちまちふたりは、うろたえだす。

「……アーチェス様が」

「……ラトフ様もである」

「ちゃんと答えなさい！」

「ハ、ハイーッ！」

アルハナーレムが直立不動になって即答する。

ミースも同じような格好になって、チェリンカの質問に応じた。

「ア、アーチェス様は——自分のために子供たちが心を壊さないように、月に捕らわれてしまわないようにって！　ふたりは世界のすべてと言ってたのです」

「ふたりに復讐を背負わせてはならない。まっすぐに育って欲しいと……」

アルハナーレムもあとにつづく。

「お父さん……お母さん……」

それを聞いて、チェリンカは悲しげにつぶやく。

「アル……ミース……ありがとう。ふたりが、ぼくたちの家族でいてくれて、本当によかったと思う」

ユーリィは、ふたりが正直に話してくれたことに礼を言った。

「……アーチェス様……何の心配もいらないのです。ふたりはこんなにまっすぐに育ったのです」

「……そうであるな。チェリンカは怒るとアーチェス様そっくりであるし」

「も、もう……何よそれ」

チェリンカがくちびるを尖らせたときだ。

「うわっ、うわっ！　びっくりしたのである。いつの間に戻ってきたであるか？」

アルハナーレムが飛びあがって驚く。その脇に立っていたのは、いつの間にか戻ってきていたナッシュだった。

「ハ、ハイーッ！　……のあたりだ」

「よ、よりにもよって、いちばんイヤなときに戻ってきたであるな」

アルハナーレムが言いかえすと、ナッシュは顔をしかめた。

「言われたとおりスイッチを入れてきたぞ。ほら、あれでいいんだろ？」

と、転送式のほうを指さす。

ナッシュをはじめ、ユーリィ、チェリンカには、その転送式のそばで装置の動作状況

を見守るテオの姿が小さく見えていた。おかげで転送式はゆっくりと、ユーリィたちのもとに降下しはじめる。

「ぬぉ!? ほ、ほんとである。起動しているのである——しかし、ここから地上までの距離は垂直にざっと二百……」

アルハナーレムは、クリスタルの間におりてきた転送式を確認してうなった。

その様子に、こんどはナッシュが言いかえす。

「なんだ、信じてなかったのか。仲間を信じないで何を信じるんだ。おまえ、けっこうバカだったんだな」

「ぐ……む……むぅ……悔しいが、全面的に正しい意見なのである」

「なかなか、おもしろかったぞ。こんど一緒にのぼろうぜ」

と、ナッシュが言ったあとだ。

チェリンカがみんなの前に出て、けわしい表情で振りかえる。

「戻りましょう。お城に行って——このことを王様に話さないと」

「そうなのです、お城に行くのです！ テオ様は、神殿に……あいつら絶対許さないのです！」

ミースもつづく。

全員がうなずいた。

それを――センターシャフトの中間あたりから見守っていたテテオも、ほほえみながらうなずいていた。

第七章　癒されるコルカ王

お父さまは、永らく心を失っていました。
わたしがいなくなったあと、心を閉ざし、悪い人に操られるようになっていたのです。
昔の心を取り戻してほしい――。
わたしはもう一度、あのときのお父さまに会いたいと願っていました。

1

レラ・シエルを脱出したユーリィたちは、ふたたび王都レベナ・テ・ラに入った。
雨はあがり、夜空には真っ赤な月が輝く。
ユーリィたちは城下町の広場に入り、王城をめざす途中で人々の声を耳にした。
「雨も上がって今夜の月も格別だ。見ろよ、空が真っ赤だぜ。微妙に気が滅入る色だけどな。月夜の晩は不吉なことが起きるとはよく言ったもんだ。なんであんな色してんだろうな。不吉だねぇ……妙なことが起きなければいいが」
「疲れた。今日もぐったりだ。クリスタルが使用禁止で魔法がまったく使えないんだよ。食品はすぐ腐るし、火を起こすのだってひと苦労だ。全部自分で一からやるんだぜ。朝メシ作るのに全力でやって、できあがるのが夕方だからな。割りに合わないよ。しかもそれだけならいいが、怪我をしても治癒魔法が使えないんだ。これはさすがに問題なん

じゃないかな」

街の広場でそれぞれ話し合う人々の顔には、不安の色が灯っている。

「魔法が使えなくなってるって……どういうことなんだ？」

ユーリィが足をとめ、集まって相談し合う人々の輪に目を向けた。

「ふむ。神殿が何かよからぬことでもはじめたのであるか……」

「あの連中なら、やりかねないのです――」

ミースが、アルハナーレムの話に同意する。

「こ、これが……街というのか……で、でけぇなー」

ナッシュだけは、街の様子にひとり圧倒されていた。

「とにかく、王様のもとへ急ぎましょう」

皆を促すようにチェリンカが言った。

「そうだね。急ごう――」

ユーリィが先頭を切って歩きだす。

めざすレベナ・テ・ラの王城は、街の広場をこえた先にあった。

頑丈な両開きの城門には、ふたりの門衛が立っていて、ユーリィたちに制止をかける。

だがユーリィたちは、彼らに「あるもの」を見せた。

それは色あせた古着であったが、施された紋章の刺繍を見せたとたん、門衛たちの顔

色はがらりと変化する。それが王家の証と、彼らはすぐ悟ったのだ。
それでユーリィたちは身元を証明したのも同様の扱いで、城門を通されることになる。
もう日没をすぎているので日をあらためてという考えもあったが、神殿の最高権力者であるガルデス教皇が『月の民』だという疑いが強いため、一刻も早くコルカ王に謁見する必要があった。

「はあ、王に会わせろ？　このような時間に突然やってきて、いきなり何を言いだすかと思えば……深淵の森で少々の手柄を立てたからといって、調子に乗るんじゃないよ。下賤の輩はこれだから手に負えないね」
玉座にあらわれたのはコルカ王ではなく――あのアルハナーレムの名を騙る女であった。
あいかわらず奇妙な印の付いた仮面をかぶっている。そしてユーリィたちを見下した言動だ。
その態度に、この仮面の女とはじめて顔を合わせたミースはかちんときたらしい。
「調子に乗ってるのは、おまえのほうなのです。側近の分際で、何してやがるです！　ミースたちは、コルカ様に重要な報告があるのです――とっとと取り次ぎやがれです」

「な、ななな、なんて口の利きようだい。あたしを〝アルハナーレム〟と知っての狼藉なんだろうね!?」

「……へ？　アルハナーレム？」

ミースの目が、いきなり出鼻をくじかれたように点になる。

しかし仮面の女は、ミースのその態度を——じつは尊敬すべき相手だったと知って、身を凍らせたものだと勘違いし、

「そうだよ、レベナ・テ・ラの英知、天下の大魔道師アルハナーレムとはあたしのことさ。恐れ入ったろう！」

と、誇らしげに胸を張った。

「……ばか？　てゃひゃっひゃっひゃ。よ、よりにもよって、なんて名前を騙ってやがるですか！」

ミースは、たちまち大笑いする。

「……むー」

その隣でアルハナーレムは、むっとした声をもらす。

「いやいや、パクられてこそ一流なのです。すごいのです、すこし見直したのです……ぷっ……くくっ……」

ミースは笑いながら、アルハナーレムを慰めようと——いや、何とか誉めたたえよう

とする。

「……くうぅぅ」

アルハナーレムには、誉め言葉にも慰めにもなっていなかった。

「あー、もういい加減におし。陛下が、貴様たちの用など聞くものか――さあ、帰った帰った！」

ふたりのやりとりを眺めていた仮面の女が、話を打ち切ってユーリィたちを追い払おうとする。

さらに反発したのはミースだった。

「うるさいのです。ミースたちは、これをコルカ様に届けなければならないのです！」

と言って、手にしていた古着を仮面の女に向かってかざす。先刻、門衛たちを驚かせた王家の紋章が入った小さな外套である。

「ふん、何だい。そんな……うす汚れた……服……ぐぅっ……こ、これは……この力は……っ！」

仮面の女は突如として狼狽した。ミースの掲げる服から発せられるすさまじい魔力を感じとり、身の危険を察知したらしい。

「え、衛兵！　こいつらをつまみ出すんだ！」

「はっ！」

ユーリィたちのまわりに控えていた衛兵たちが、一斉に取り押さえようと集まってくる。

「何しやがるのです!?　やめるのです！」

「ミース！　あっ、チェリンカ――」

「きゃっ、放して」

腕をつかまれたチェリンカが抵抗した。

「よせ、おれに触ると咬むぞ――」

ナッシュは迫る衛兵を威嚇する。

「や、やめるのである――おまえたちを相手に、争いたくはないのである！」

アルハナーレムは説得を試みていた。

ユーリィも同じ気持ちで、両肩を衛兵につかまれても――けっして剣をぬこうとはしない。だが、どんどん集まってくる衛兵たちの輪に囲まれ、さすがにユーリィたちも観念せざるを得なくなったときだ。

「まったく……こんな夜更けに何の騒ぎだ。寝所のほうまで声が聞こえてきたぞ！」

広間の奥のほうから力強い男の声がした。

その声を耳にしたとたん、ユーリィたちを取り抑えようとしていた衛兵たちの動きがぴたりと止まる。すぐに輪がさっと解かれると、衛兵たちは声がした方向に一斉に体を

向けてかしこまった。
輪の中心にいたユーリィたちは何が起きたんだろうという表情で、広間の奥のほうに目を向ける。
そこには背が高くてがっちりとした体軀の男性が立っていた。
すこしばかり頬がこけ、やつれたようにも見えるが——眼には力があり、威厳が漂っていた。その人物は、まさに自身で言ったとおり、寝室から出てきたばかりなのか、豪奢な王家の外套を羽織った下は寝間着姿のままだった。
「へ、陛下!?　申し訳ありません。この者たちが押し入ってきて……」
仮面の女があわてて、その男性の前へ駆けよる。
「衛兵！　早くつまみ出せ！」
あらためて仮面の女は、広間に立つ衛兵たちに命じた。
しかし、
「……ん？　待て！」
陛下と呼ばれたその男性は、何かに気づいて声をあげる。すると、ふたたびユーリィたちを取り囲もうとしていた衛兵たちの動きがとまった。
「そ、それは……っ!?　その服は……まさかっ！」
そう言いながら、王家の外套を羽織った男性はユーリィたちのほうに歩みよってくる。

その人の視線は、ミースが掲げる小さな外套に注がれている。
視線に気づいたミースは、さらに高くそれを掲げて言った。
「コルカさまぁっ!!　テテオ様の法衣なのです！　レラ・シエルで見つけたのですー」
「ミース？　お主、ミースではないか!?　なんと！　それに、そこにいるのは……」
ユーリィたちに近づいてきたコルカ王は、あらためて五人に目をやる。
「王よ……久しぶりなのである。たったいま、帰還したのである」
アルハナーレムが、コルカ王の前に歩みでた。
コルカ王は彼の姿を見た瞬間に——顔色を変える。
「アルハ……っ！　ぐぅぅっ、なんだ……頭が……割れるようだ」
突然、コルカ王が頭を押さえて苦しみだした。

仮面の女は動揺していた。
いままで病人だと思いこんでくれていたはずのコルカ王が、自分を取り戻しつつあるのだ。
——なぜだ？
まさか、あのテテオ王女が生前にまとっていた法衣に宿る力が、洗脳されていたコル

カ王に何らかの影響をもたらしたというのか。
もし、そうならば——もう一度だ。
仮面の女は周囲に悟られぬよう、コルカ王の背に向かって片手をかざしたのである。
しかし、コルカ王は苦しみだして、抵抗を見せはじめた。
「……ちっ、術が……マズい……」
小声で舌打ちをした仮面の女は、あせってまわりに命令する。
「ええい、陛下を惑わす不届き者め。衛兵！　何をしている!?　早く何とかしろ！」
「し、しかし……」
衛兵たちは動くべきかどうか迷いだす。
そのざわついた空気に、
「静まらぬか！　この者たちは、余の身内である。無礼を働くことまかりならん。下がれ！」
頭を押さえつつもコルカ王は大声で止める。
「ですが陛下……」
しかし仮面の女はひるまず、コルカ王に近づく。何とかうまく言いくるめて、この場からコルカ王を連れ去ろうと考えたのだが、
「下がれと言っている。おまえにはずいぶんと勝手を許してきた。だが、これは過ぎる

ぞ。よもや余にまで意見するのではあるまいな」
逆に、コルカ王から釘を刺されてしまった。
「くっ……御意」
仮面の女は立ち止まり、コルカ王のそばから一歩下がる。
なんということか……。
ここまでコルカ王が意識を回復させるとは、まったく予想外のことである。
仮面の女は心の中で、連中と接見したことを後悔した。
……はじめて顔を見せたときとちがって、あいつらは実績を積んできている。深淵の森で毒花の魔物を倒し、仲間を増やし、そしてテテオ王女の法衣まで持ち帰ってきているのだ。その行動に対し、王城の衛兵たちも連中に信頼をよせはじめている。
これは注意が足らなかった。
おかげでコルカ王は、
「ミース……それにアルハナーレム。詳しい話を聞かせてもらうぞ」
などと、連中に話しかけているではないか。
「はっ……陛下」
アルハナーレムと呼ばれたことで仮面の女はすぐさま返事したが、
「おまえではない。よいな、アルハナーレム」

と、コルカ王は男のほうのアルハナーレムに声をかけている。
「御意である」
そいつが答えた。
仮面の女はその声を聞いて、怒りがこみあげてくる……。
「でも、その前に……人払いをしてほしいのです」
「わかった。では、余の私室で話そう。ついてまいれ」
コルカ王は、ミースという小柄な女のたのみをあっさり受け入れた。
「へ、陛下……」
仮面の女はそれを止めようとしたが、コルカ王からにらみかえされてしまう。
もはや、何も聞きいれてもらえない状況だ。
やがてコルカ王は、連中を導くように広間をあとにする。
「……ミースたちの勝ちなのです」
小生意気な小柄の女が、目の前を通りすぎるときに言った。
その瞬間、強い危機感に苛まれる。
――いけない、連中に好き放題にさせては！
仮面の女は、もはや自分だけでは判断できない状況だと悟り、ガルデス教皇に指示をあおごうと決めた。

コルカ王と連中が去ったのを見届けると、仮面の女は足早に、神殿とつながる秘密の地下通路へと急いだ。

2

ユーリィたちは、コルカ王の私室に通されていた。

そこは王ひとりの部屋にしては、かなりの広さがある。何人かで剣の練習をしたとしても、まだ余裕で空間が余ってしまうほどだ。

「武器、いろいろあるな……」

ナッシュは、部屋の壁際に並べられた鎧や剣などを物珍しそうに眺めていく。

そのあいだにアルハナーレムやミースは、コルカ王にレラ・シエルでの経緯を説明する。ユーリィとチェリンカも、その話に加わった。

「そうか、そんなことが――」

話を聞き終えたコルカ王が、神妙な顔でつぶやく。

「きっとテテオ様が助けてくれたのです」

ミースは、王の執務用の机上に広げるように置かれたテテオの法衣に、感謝の気持ちを捧げる。

「あの子らしい……が、やはりテテオは、もう……」
「王よ、まだテテオ様と決まったわけではないのである」
アルハナーレムが言ったが、コルカ王はかぶりを振った。
「よい。覚悟はしていた……この衣は娘の誕生日に特別に作らせた、この世にふたつとない品なのだ。なにより、ここに入れてあるこれが、本物であることを証明している」
と言って、コルカ王は執務机の上に広げた法衣から何かを取りだす。
「それは何であるか？」
アルハナーレムが訊いた。
コルカ王は、取り出したそれを掲げる。
「ただの鍵だ……だが、これを持つ意味は重い。そう……わたしには重過ぎるものだ」
しばし目を閉じて黙ったあと、コルカ王はふたたびユーリィたちを見つめて言った。
「なぜここがレベナ・テ・ラと呼ばれるのかわかるかね。それは星を統べる世界のすべてがここにあるからだ。これはその扉を開く鍵だ。我が王家の血筋には、不思議な力があってな。クリスタルを操る能力に恵まれている。中でもテテオは特にその力が色濃く出ていた。だが、それはあまりに大きすぎたのだ。大きすぎる力は破滅を招く。希代のクリスタル使いたちは、いつの時代もそうして自壊する。あの子も逝ってしまった……もうわたしには、何も残されてはいない……」

手にした鍵を見つめ、コルカ王は寂しげに言った。
長きにわたる孤独を味わい、疲れきったような声だ。あらためてテテオの死の悲しみに触れて、誰もが言葉を失っている。
しかし、
「そんなことはありません。彼女は、まだあなたの――」
沈黙を破って、口を開いたのはチェリンカだった。

そのとき、テテオの魂は王の部屋の外にいた。
豪奢な絨毯を敷きつめた廊下で、部屋の扉をずっと見つめている。これまでとはちがって、中に入れずにいた。
あの法衣を見た父は、悲しみを――いままで以上に深めている。
そんな辛い顔の父を見ることができなかった……。
だが、
――テテオさん、わたしのそばに来て。
チェリンカの心の声が呼んでいる。そのあと、彼女はこう告げた。
(わたしに、力添えをさせてほしいの――)

テオはその申し出に驚く。
こんどは、わたしがあなたを助ける番――チェリンカはそう伝えてきたのだ。
（でも……）
（ためらわないで。あなたのお父さまを救うには、あなたから話しかけてあげるのが、いちばんだと思うの――）
（チェリンカさん……）
（さあ、早く――）
念話で、チェリンカがうったえてくる。
（……）
テテオは彼女の思いに感謝し、王の部屋に扉をすりぬけて入っていく。
その瞬間――。
驚いた表情でこちらを見ている父の顔が、視界いっぱいに広がる。
（ああっ……お父さま……）
テテオの魂は、思わずつぶやく。それがそのまま――チェリンカの力によって肉声となる。
「チェ、チェリンカ？」
ユーリィがびっくりしたらしい。

チェリンカは力を使って、テテオの姿をコルカ王に見せていたのだ。
「テ、テテオ……テテオなのか？」
「はい……」
テテオはうなずく。しかも声は、テテオのものとして王の部屋に響く。
「ど、どういうことなのだ……」
コルカ王は困惑した表情になった。
「お父さま……いま、わたしはチェリンカさんの力をお借りして、お父さまに見える姿になりました。ほんの短い時間ですが……こうしてお父さまと、また会えて……うれしく思います」
「テ、テテオ！」
コルカ王は、ようやく娘の魂が目の前に存在することを認めた。
それは、あまりに衝撃的な再会だったらしい。
何から話せばいいのかわからず、コルカ王は呆然とテテオの姿を見つめていた。

3

ミースも——驚きのあまり、言葉が見つからなくなっていた。

チェリンカの隣に、いまテテオ王女の魂があるのだ。
見えなかった存在が見える――いや、声さえも聞こえてくる。
突然の出来事に面食らってしまっていたが――その一方で、ミースの脳裡には最後にテテオと別れた日のことが浮かんできていた。
――あのときの出来事が、昨日のことのように思い出されてくる。
それは、テテオがレラ・シエルに視察へ向かう日のことだ――。

「――コルカ様っ！」
ミースの声が、王城の広間に響く。
当時、テテオの世話役をつとめていたミースは、レラ・シエル視察への同行を許されなかったことを怒っていた。
「どうしてミースは、テテオ様のお供をしてはいけないのです!?」
広間に入ってくるなりの大声だ。
玉座のコルカ王だけでなく、出発のあいさつでコルカ王の前にかしこまっていたテテオ王女も、そして彼女の教育係であるアーチェスもびっくりしてミースに注目していた。
「下がれ、ミース。わしの決定は覆らぬぞ」

「お言葉ですが、従えないのです」
「何っ？」
玉座のコルカ王のまなざしが、厳しいものに変わる。しかしミースは動じず、王の前にひざまずいているテテオの隣に行って、同じようにひざまずくなり、コルカ王をにらみかえした。
「おそれながらコルカ様、いまのこのような事態にテテオ様を王都の外へ出されるのは、あまりに危険なのです。ですからミースは、テテオ様のお供をさせてほしいのです」
「ならぬ。レラ・シエルへの視察は前から決まっていたことだ。それにこのような事態とは、どういう意味なのだ？」
コルカ王の問いかけに、ミースはあきれかえった。
「お、お忘れなのです？　クリスタル使いを神殿の仕事だけに専従させるという、例の法令のことなのです。噂によると、それが決まりかかっているというのです。コルカ様は、まさかテテオ様を神殿に渡されるおつもりなのかです？」
ミースは半ば泣きそうな声で、コルカ王にうったえる。
このころ王城では、重苦しい空気に覆われた日がつづいていた。神殿が勢力をのばし、王政での発言力を強め、まるで王宮が乗っ取られているかのような不穏な空気がただよっていたのだ。

おかげで、神殿が得をするような法案ばかりが可決されている。ミースが聞いた噂では、大臣たちが神殿側に次々に買収され、賛成票を投じているという。

そんな中で出てきた、クリスタル使いに対する法令。

《クリスタル使いは、神殿より与えられし『使命』にその一生を捧げて、従事しなければならない――》

あまりに身勝手で、神殿に都合のいい内容だ。

もしそれが可決されたら、テテオは強制執行で神殿に連れさられる可能性がある。ミースはそれをおそれて、テテオの身を案じる日を送ってきたのだ。

それなのに突然、レラ・シエルへ同行するなと言われた。

どうしてなのか――ミースとしては、コルカ王の口から理由を聞かないと収まりがつかなくなっていたのである。

「考えすぎだ、ミース――」

玉座のコルカ王が言った。

「あの法令が通ったとして、まだ九歳と幼いテテオを、すぐに神殿が連れていくはずがなかろう」

「それはわからないのです。神殿の者たちは、みんなヘンなのです。目がすわっているやつらばっかしで、信用も置けないのです！」

「黙れ、ミース！　わしの前で言葉がすぎるぞ――」

とうとうコルカ王の怒りに触れたときである。

「ミース、もうやめて――」

隣でひざまずいていたテテオが、小さな声でミースにお願いした。

「テ、テテオ様……」

ミースは、彼女の覚悟した表情を見て――はっとする。もちろん不安におびえているのだが、それでも王女として泣き言は口にしないと心に決めているかのような表情だ。

なんという、けなげな王女なのか。

あらためてミースは、いとしくなる。

まだ九歳の身なのに……。

さまざまな思いがよぎり、哀しくなるが――でも、世話役のほうが泣いているばかりではいけない。

涙をぬぐって、ミースはテテオに話しかける。

「だ、大丈夫なのです……きっとコルカ様が――いえ、お父さまが、テテオ様のことを守ってくださるのです」

「はい……」

テテオが小さくうなずきかえす。

ミースは、ふたたび玉座に目を向ける。父として、娘を安心させる言葉を贈ってほしかった。でも、玉座のコルカ王はうつむいて無言のままである。

どうして……。最近のコルカ王は、どうしてテテオ様にそんなに冷たくするのだろう。

ミースは、ふしぎでならなかった。

「それでは行ってまいります――」

アーチェスが玉座に一礼して、立ちあがる。

「行ってまいります」

テテオも小さく言って立ちあがった。

「あ、テテオ様――」

ミースが呼び止めると、アーチェスとともに歩みだしたテテオが足を止めて、振りかえる。

……にこっ。

テテオが、ミースにほほえむ。――わたしは、大丈夫だから。そう言っているように見えた。その笑顔に何も言えなくなって見送ろうとしていると、

「ミース――テテオ様がお戻りになられるまでのあいだ、コルカ王のお世話をお願いしますね」

アーチェスが急に確認してきた。

そういえば、侍女班の主任から同行の中止を言いわたされたとき――代わりにそんな仕事を言いつけられた記憶がある。テテオと引き離されることに熱くなって忘れていたのだが、なぜアーチェスが急にそのことを確認してくるのだろう。ミースがきょとんとしていると、

「まずは、王様の私室を片づけることからお願いします。それは本日からミースの役目ですから――」

「役目……あ、わかったのです。まかせてくださいなのです」

途中でミースは、はっとして答える。

「じゃあ、これで……」

言葉すくなにアーチェスは、テテオとともに広間をあとにした。

見送りながらミースは、合点がいった表情になる。

――いま、アーチェスから目で合図されたのだ。

ミースの疑問は、そのあとコルカ王の私室を掃除しに行ったときに晴れた。

王の書斎に一通の書状があり、その宛名が『娘が愛する大事な世話係へ』となっていたのだ。

アーチェスが別れ際にこっそり見せた目配せの合図は、これを読めということなのか。

ミースはそう解釈し、書状を開いた。

そして一読して、涙が出そうになった。

――コルカ王は、テテオのことを愛していたのだ。ただ、周囲の目をごまかすために、あえて素っ気ない態度を示していたのである。

書状に書かれていたことは、レラ・シエルの視察に赴いたテテオを――そのまま神殿の手がおよばない場所に逃すという計画だった。もちろん、あのクリスタル使いへの法令が決まることを想定しての苦肉の策だ。ゆえに、それを神殿に悟られないよう秘密裡に行う必要がある。

このためミースは別行動とし、王都を脱出したあとの生活物資を一日遅れてレラ・シエルに運んでほしいというコルカ王からの要請が綴られていた。ミースが城を出るときは、王の態度に不満が爆発して里に帰るというふりでもして出かけてくれと、周囲に見せかけるための指示も書き添えられてある。

――やっと事情が呑みこめた。

ミースは書状を懐にしまい、そうなったら行動開始だと、王の部屋をあとにしようとした。そのとき、部屋に戻ってきたコルカ王と鉢合わせしたのだ。

「ミース……さっきは……すまなかったな」

コルカ王はすぐさま、申し訳なさそうに言った。
「いいえ、いいのです。ミースのほうこそ、わけも知らずに叫んだりして……このとおり、お詫びするのです」
ぺこりと、ミースは頭をさげる。
「いや、悪いのはすべて、わしのほうだよ。神殿に気づかれないようにと娘に向かって冷たい態度までとってしまった……あれでは、何も教えていないテテオは……わしのことを恨んでいるだろうな」
「コルカ様……」
「いや――とにかく、わしはどうなってもいいのだ。あの子だけは守りたい。だから、親友に預ける。レラ・シエルにいるラトフなら、きっとわしに代わってテテオを守ってくれるはずだ――」
「それはミースも同じなのです。ラトフ様なら、ミースも信頼できるのです」
「うむ、そのとおりだ。もうわしには、おまえたちだけがたよりなのだ」
「コルカ様にそう言われると、なんか力が湧いてくるのです！　大丈夫なのです、このミースにまかせてほしいのです！　それでは、さっそく準備に取りかかるのです！」
ミースは、コルカ王に胸を張って答えていた。

あれから、かなりのときが流れた……。

――テテオの王都からの脱出計画は神殿に見ぬかれ、父と娘が二度と会えない結果を招いてしまっている。

いま、こうして長き時間を経て、ふたりが言葉を交わせる機会が訪れようとは予想もつかなかった。

コルカ王と向き合うテテオは、父からの言葉を待つかのように沈黙をつづけていた。ふたりを見守るみんなも、神妙な面持ちだ。

「テテオや、わしはわしは……」

やっと、コルカ王が口を開いた。しかし、なかなか言葉がつづかない。

テテオも緊張しているのか、話のきっかけをつかめずにいる。

そんな中、チェリンカが代わりにきっかけをつかもうとしたのか――コルカ王に話しかけた。

「王様……テテオさんは、もうすべてわかってるわ。だから……彼女に悪かったという悔やむ思いでなくて、ふつうに、父親として話してあげて」

「ま、待ってくれ……わしは……テテオに、まだ……」

コルカ王の心には罪の意識が深く残っているらしい。苦悩の表情がまだ消せずにいる。

「お父さま……」

うすく輝くテテオの姿が、ゆっくりとコルカ王に近づいた。

「ああっ、許して……許してくれ、テテオ……」

コルカ王は思わず詫びながらあとずさる。

チェリンカが静かに言った。

「彼女は……あなたを恨んでなどいないわ。それどころか、ずっと守ってきたのよ。何を脅えているの。とても大切な人でしょ。愛しているのでしょ」

「愛しているとも……あの子はわしのすべてだった……だが、わしは……大切なあの子を守ってやれなかった。何もしてやれなかった……」

コルカ王が悔やんでやまない過去に向き合ったときだ。

半透明に輝くテテオが答える。

「いいえ、わたしはこれ以上ないほど幸せな時間をもらったわ。わたしがいつもうしろをついてまわったのは……あの大きな背中が好きだったから……」

それを聞いたコルカが、はっとする。彼女が幼少だったころを思い出したらしい。

そのときは、まだ王宮も平和そのものだった。

コルカは、生まれて間もなく母を亡くした娘を元気づけようと、なるべく多くの時間をテテオと過ごしていたのだ。

だから娘とよく遊んだ。――笑顔で父のあとについてくる幼いテテオの姿が、コルカの脳裡によみがえってくる。

「また昔のように……わたしが大好きだったあのころのように――前を見て、わたしの分まで……ねえ、お父さん」

「テテオ……」

コルカは、両肩にずっと背負っていたものが外れたような気持ちになった。同時に体が軽くなって、ほっとする。

――そんな笑みが、自然と浮かんできた。

テテオが王女という立場でなく、娘としてコルカ王のことを『お父さん』と呼んでくれている。そのことに、コルカの瞳には涙がにじみ出していた。

「お父さん……よかった、またこうして話ができた」

「そうか……おまえは、ずっと……そばにいてくれたのだな……」

「うん。でも……」

「もう……いいのだな？」

「うん」

テテオがうなずく。

コルカも笑顔でうなずきかえす。

父と娘による心の再会が、ようやく果たされたのだ。

「テテオ――」

コルカの口調には力強さが戻っていた。

「わしには、まだ王としての使命がある。先に行って待っていてくれぬか？」

以前の王に近い声だ――そのことを知るアルハナーレムとミースは安堵の息をつき、父の姿を見守るテテオも、よろこびを感じていた。

「さよなら……お父さん」

「うむ……また会えたときは、もっと父親らしいことをさせてくれ」

父がそう答える。

テテオのよろこびは、さらに大きくなった。

もう、父は大丈夫だ……。

以前のようなたのもしさが目の前にある。

安心したと同時に、テテオの魂は昇天のときを迎えた。意識がすーっと天に召されるような感覚だ。気がつくと、天井に近い高さから父やユーリィたちを見おろしている。

そこでテテオの魂は、別れの言葉を告げる。

（ありがとう、あなたがたにクリスタルの光がともにあらんことを……）

その念話を最後に、テテオの魂は王の私室からぬけ出た。

さらに王城の上空へと舞いあがると、天高くへ召されていく。
長きにわたったテテオの旅は、ここにその幕をおろしたのだった。

4

「行ったんだ……」
王の部屋で天井を見あげていたユーリィがつぶやく。
チェリンカはそれに、「うん」と小さく答えた。
部屋にいる一同が、しばらく無言のままで見送っていた。
と、そこに。
「くっくっくっ……何をみなさんでお話しされているのかと思えば、亡き王女の鎮魂式でしたか……何とも辛気臭い集いでありますな」
あやしげな男の声が響いた。
ユーリィたちが、はっとして振りかえる。
王の私室の入り口に立っていたのはチャスペルと、アルハナーレムの名を騙る仮面の女だった。
「チャスペル！　貴様、わしの部屋に勝手に――」

コルカ王がにらみかえす。

「これはこれは……コルカ様。いけませんね、あなたは重い病を患われているはずですが……さあ、早くベッドでお休みくださいませ」

獣のような形をした仮面をかぶったチャスペルが、すこし苛立ったような声で話す。

それに対してコルカ王は、怒りにみちた声で言いかえす。

「わしはどこも悪くはない——貴様らが勝手に、流言を飛ばしていただけの話であろう。しかし、それもここまでだ。レベナ・テ・ラをこれ以上、おまえたちの好き勝手にはさせぬぞ！」

その力強い言葉に、チャスペルはひるんだ。コルカ王が完全に立ち直っていることを知ったらしい。

「……仕方ありません。こうなったら、リッチ——あなたがお相手をしてあげなさい」

チャスペルは、隣に立つ仮面の女に命じた。

リッチと呼ばれた仮面の女は、一礼すると、部屋から立ち去るチャスペルを見送る。

そして、ふたたびユーリィたちのほうに向き直った。

「んふふふっ、あはははは！　チャスペル様は、あんたたちを全員処刑しろってさ！　おとなしく言いなりになってれば、死なずにすんだのにさ！」

「ぼくたちは、おまえなんかに負けない！」

ユーリィが剣をぬいて、リッチに対して身構える。アルハナーレムたちも戦闘態勢に入る。そしてコルカ王を守るように前に出てきた。

「んっふっふっふ、無駄だよ、あたしは死でできているからね。死を与えても何も変わりはしないのさ」

仮面の女――リッチは、自身の正体をすこし明かした。

「ふむ、なるほど……それはずいぶんと面倒そうだ。さてどうしたものかな、ユーリィ、どこまで細かくできるか試してみるか？」

うしろからそう言ったのはコルカ王である。なんと部屋の壁にかけた剣を手にとって、ユーリィたちと同じ位置に並んだのだ。

「コ、コルカ様……」

ミースが呆れたように言う。

「王よ、若いころと変わっていないのである……」

アルハナーレムも半ばあきらめた口調だ。

「ふふっ……久しぶりなのでな。カンを取り戻すまで、すこし足を引っぱるかもしれんが、許せよ」

剣を構えたコルカ王が、楽しそうに言う。

勇敢な王として民に知れわたっていただけに、アルハナーレムの名を騙った賊をみず

からの手で倒そうとする意欲にみちていた。
「無駄だというのにバカな男たちだ。まあでも……そういう男は嫌いじゃないよ。さあ、あたしの世界へ――」
リッチはそう言って、ユーリィたちの前で仮面を脱ぎ捨てる。
「――っ！」
ユーリィたちが一斉に息を呑む。
女の仮面の下には顔が存在せず――代わりに、仮面のあったところから霊気のようなものを噴出したのだ。
その霊気は彼女の全身を覆うほどに膨れあがり、そして中から異様な影を浮かびあがらせてくる。やがて霊気が消えると、魔物に変貌した姿がはっきり見てとれた。
「これが正体だったのか――」
コルカ王がそいつを見あげる。
全身が巨大な竜の骸骨にも思えるそいつは、歯車のたくさんついた奇妙で重厚な鎧をまとっていた。いかにも霊界からの使者のごとき風貌だ。
〝さあ、早くあたしのところへお越しよ。かわいい坊や――〟
女の声が、その魔物から響いた。
「誰が貴様のところへなど！　返り討ちにしてくれる！」

コルカ王が、極太の王家の剣を振りあげる。
それをきっかけにして、真っ先にユーリィが飛びだした。王を守るかのようにその前に躍りでて、魔物に斬りかかっていく。
〝ゴオオォッ！〟
魔物が亡者のうめき声のごときおぞましい音を響かせ、鎧で覆われた左手をくり出す。斬りかかろうとしたユーリィは、それに薙ぎ払われてしまう。
「くはっ！」
ユーリィは吹っ飛ばされ、チェリンカたちのいるほうに背中から落ちた。
「――ユーリィっ！」
チェリンカが駆けよる。床に叩きつけられたユーリィは、すでに気を失っていた。だが、よく見ると様子がちがう。チェリンカは、抱き起こそうとしてユーリィの体に触れたとたんに気づく。
「ユ、ユーリィ……？」
チェリンカは驚愕する。ユーリィが息をしていないのだ。
どうやら魔物から、闇魔法による『死の宣告』を受けたらしい。
「た、大変――」
チェリンカはあわてて、回復魔法をユーリィにかける。

――まにあって！

大事なユーリィを守るため、チェリンカはユーリィにかけられた闇魔法の解消に専念する。

「うぬっ、接近戦は危険である――皆で、あやつの胸の紅いクリスタルを攻撃するのである！」

アルハナーレムが最前列に立ち、全員に告げた。

「了解なのです！　コルカ様は、下がってるのです」

「わしを除け者にする気か？」

コルカ王は、ミースに言いかえす。

「ちがうのです。大将は最後の切り札として、うしろに控えているものなのです――」

ミースはそう言って、アルハナーレムの隣に立ち――取り出した壺を魔物に向かって投げつける。

アルハナーレムは杖をくり出し、その先端から火炎攻撃を放つ。

さらにナッシュも前に出てきて、矢を放つ。

魔物は、三人からの一斉攻撃を受けた。

〝ゴオオッ！〟

もがいた魔物の両腕が吹っ飛ぶ。

――やったか。

勝利をつかみかけたと思ったアルハナーレムたちは、拳に力を入れる。

だが、そうではなかった。

魔物の両腕は、攻撃を受けて吹っ飛んだのではない。そいつ自身の意志で切り離したのだ。左右にわかれて、魔物の腕が宙を舞う。

「にゅ？」

ミースがその行方を目で追ったときだ。二手にわかれて飛ぶ両腕は、アルハナーレムたちを挟みこむように移動するなり、左右から電撃を放ってきたのだ。

「うっきゃあああぁぁ！」

ミースが悲鳴をあげる。ミースだけでなく、横並びに立っていたアルハナーレムも、ナッシュも、両腕からの電撃を浴びて次々に床に倒れていく。

「あぐぐぐっ……」

床に突っ伏したミースは、意識が朦朧としながらも身を起こそうとする。

その瞳に映ったのは――。

「とりゃあああーっ！」

アルハナーレムたちのうしろに控えていたコルカ王が、宙に浮かんだ魔物の片腕めがけて剣を振るうところだった。コルカ王の剣によって、魔物の片腕はたたき落とされる。

「おまえたち、大丈夫か！」

床に突っ伏したアルハナーレムたちに、コルカ王が声をかけた。電撃を浴びた三人が身をふるわせながら起きあがろうとする。

「でやあっ！」

コルカ王は、もう片方の魔物の腕にも太刀を見舞った。極太の刃に、宙に浮かぶ腕は真っ二つに斬り裂かれて、床に落ちる。

さすが、ミースが最後の切り札だと言っただけのことはある。彼女がそう思いながら立ちあがろうとしたときだ。

魔物の本体から、円形状の闇が拡大される。

「むっ!?」

コルカ王が振りかえったとき、王を含めたアルハナーレムたち四人全員が——円形状の闇の空間内に取り込まれた。

——ドドンッ！

その闇の中で、魔の震動が四人を襲う。

それは、ただの地響きではない。生命あるものの魂を揺さぶり、活動不能に陥らせるための特殊な震動だったのだ。

「くあっ——」

武勇の誉れ高いコルカ王もたまらず、床にくずおれた。
立ち上がろうとしていたアルハナーレムたちも同じである。
いまや魔物に立ち向かえる勇者はいないかに見えた。
だが、そんな中で――。
「ユーリィ……起きて……ユーリィ……」
チェリンカだけはユーリィの復活を信じて祈りつづけていた。
そのユーリィが、やっと目を醒ます。闇の魔法から解放されたのだ。
「チェリンカ……ありがとう……」
ユーリィは礼を言うと、すぐさま立ちあがった。
「待って、ユーリィ――」
チェリンカは、魔物に向かおうとしたユーリィを呼び止める。
「いっしょに、魔法を使おうよ――」
「えっ――」
振りかえったユーリィが、その申し出にどきりとする。
幼いとき、父を殺したチャスペルに対して抱いた殺意で――クリスタルの力を使ったことがある。その過ちのことが、ユーリィの脳裡をかすめた。
あのようなことを二度と起こしたくない。

チェリンカを失うようなことがあってはならない。
その思いが強いため、ユーリィはすぐにはチェリンカに返事できなかった。
だが、彼女はかぶりを振る。
「信じようよ、わたしたちの力を――わたしたちが、テテオさんから授かった力を」
「えっ……」
ユーリィはチェリンカの話に驚く。彼女は、テテオから新たに力を得たというのか。
「チェリンカ……」
「死の魔物に死を与えられないのなら、逆に生を与えたらどうなるのかしら――ねぇ、ユーリィ。それを試してみようよ――」
その言葉に、ユーリィはうなずいた。
「わかった、やってみよう――」
いまこそ、あのときの過ちをくりかえすのではなく――乗り越えるときなのかもしれない。そう思ったユーリィは、魔物に向き直る。
そいつは、倒れて意識を失った仲間の魂を喰らおうとしていた。コルカ王に斬り裂かれて床に落ちた両腕がみるみる再生し、ふたたび宙に浮かびあがる。そしてそれは魔物の本体に戻って、合体した。
――早くやっつけないと！

ユーリィは剣を構え直し、魔物に突進していく。
「たあああぁぁっ！」
背後から斬りかかり、そいつの背中を蹴って舞いあがった。宙で身をひねり、魔物の前におり立つ。胸に輝く紅いクリスタルが見えた。
――これを叩き割ればいいんだ！
ユーリィはもう一度、剣を振りあげて魔物の胸に飛びかかる。
だが、そいつは身をそらす。
巨体を翻し、どこにいくのかと思ったら――なんとチェリンカに襲いかかろうとしている。
「チェリンカっ！」
ユーリィが叫んだ。
魔法を使うため、祈りの準備に入っていたチェリンカが目を開く。彼女の前に巨大な影が迫っている。
「きゃあああっ！」
チェリンカの悲鳴を耳にし、ユーリィが床を蹴って飛びだす。
――チェリンカから離れろ！
魔物めがけて、ユーリィは剣をくり出した。

チェリンカを捕まえようとしていたそいつの腕に、刃の一閃が走る。魔物の腕が床に落ち、そいつがユーリィを振りかえった。
「おまえの相手は、ぼくだ！」
着地したユーリィが、剣を構えなおす。
魔物はチェリンカから離れ、ユーリィのほうに向かってくる。その間、チェリンカは魔法を使うための祈りを再開した。
（ユーリィ、行くよ……）
チェリンカからの念話が、ユーリィの脳裡に届く。
準備が整ったのだ。
――よし、行こう！
ユーリィも心の中で応え、迫る魔物の胸に納められた紅いクリスタルに視線を注ぐ。
その力を使う『意味』を――ユーリィが心の中で定める。
クリスタルの力を借りて、闇からの使者に――聖なる光を浴びせん！
それは、双子の意志をひとつに重ねる行為でもあった。
――レラ・クリスタル！
双子のひとつになった精神が導き出した、偉大なる魔法である。
竜の骸骨のような姿をしたそいつの胸部で、それは大爆発を招くように炸裂した。

〝グアアァッ！〟

魔物が大きくよろめく。

巨軀が崩れはじめ、それを覆っていた鎧も歯車が次々に落ち、ばらばらに解体されていく。レラ・クリスタルが、紅いクリスタルを直撃したのだ。

禍々しい光に染まった紅いクリスタルは砕かれ、魔物の源である闇の力を聖なる光で照らしつづけていく。まるで光の生命がそこに誕生したかのようなまぶしさだ。

〝ぐぅ、この光は……そ、そんな……バカな……こと……『生』は神々のみに――〟

光の中で消滅しながら、仮面の女の声がもれてくる。

その苦しそうな声が、彼女の最期の言葉だった。

巨体を誇った闇の世界の魔物――リッチは光に呑みこまれ、やがて別次元に封印されるかのように消えてしまったのである。

気がつくと、目の前には静寂を取り戻したコルカ王の私室が広がっていた。

5

「見事なものだ。さてユーリィ、それとチェリンカと言ったかな。少し長い話をしなければならないようだ……」

コルカ王はそう言って、一同を集めた。
激闘のあと、王の私室では大いなる謎が解きあかされようとしている。
ユーリィたち五人が思い思いの場所で休息を取る中、コルカ王は語りはじめた。
「はるか昔、人が生を受けるよりも遠く、まだ星が誕生して間もないころのことだ――この星はすべてが入り交じり、混沌とした塊にすぎなかった。あるとき、光る神が彼方より舞い降り、混沌から悪を切り離して天空へと追放し、地上と空を作った」
「天地創造であるな」
アルハナーレムが答える。
「ずっと神話やおとぎ話の類だと思っていたのである。光る神とはクリスタル。天空へ追放された悪とは月であるな」
アルハナーレムの話を受けて、ふたたびコルカ王が言った。
「光と闇が混じり合わないように、クリスタルと月は相反するものだ。クリスタルがあるかぎり、月は地上に帰ることができない」
「けれど、それを覆そうとする者がいる。それが――月の民」
ユーリィが怒りをにじませてつぶやく。
コルカ王は、ユーリィを見てうなずいた。
「そうだ。月の魔性に魅入られてしまった人々をそう呼ぶ。我らの世界はすべてクリス

タルによって成り立っている。それは世界の根幹となるものだ。クリスタルはこの星の核となり、長い年月とともに星の記憶を蓄えつづけた。起こりうるすべての可能性を模索し、その道筋をすべて記録しつづける。これがどういうことかわかるか。我らは魔法を使う。では魔法とは何だ？」

「簡単に言えば、クリスタルによる力の練成。意志による管制と制御であるな」

「さすがアルハナーレムは魔法学に明るいな……では聞こう。なぜそれで魔法になるのだ？」

「魔法とは流れを導くものである。クリスタルの力を導き、現象として――」

「どこに何を導く？　導かれた力が意志で変異するのはなぜだ。何故、我々はそのようなことができる」

「むぅ、それは解明されてないのである」

アルハナーレムは答えに詰まった。

「物理現象をねじ曲げ、自然の法則を無視して奇跡を行使する。そこには必ずクリスタルの力が存在する。では、なぜクリスタルなのかと考えたことはないか」

コルカ王はそう言って一同を見まわす。誰もが答えられず、話を聞くほうに集中している。

「魔法とは無限にある未来の中から、それが実行された世界を選択することだ。選択さ

れるすべての未来はクリスタルの中にある。それが我々の世界に干渉する」

コルカ王の話に、アルハナーレムが疑問を口にした。

「おかしいのである。それでは理論上どんな世界でもできてしまうのである」

「ああ、できる。未来に束縛はない。だが、驕ってはならない。我々は神ではないのだ」

コルカ王は、アルハナーレムの疑問に答えた。

「魔法を使う――それはごく近い世界の未来を選択しているにすぎない。だが神々が起こすような奇跡は違う。大きな魔法に大きな力が必要なのは、遠い世界を選択するためだ。さらに遠い世界を選択するには、もっと大きな力が必要となる。クリスタルに蓄積された情報はあまりに膨大で、人の精神は耐えられない。人の魂など簡単に吹き飛んでしまう。大きな力は自身を滅ぼす。テテオがそうであったようにだ。月の民は魔法が使えない。それは月とクリスタルが相反するものだからだ。だから贄などというものに頼り、それに肩代わりをさせる。チェリンカといったか。きみは娘と同じ能力――いや、それ以上の大きな力を持っている」

「はい」

チェリンカは神妙な顔で、コルカ王にうなずく。

「いいかね、その力は絶対に使ってはならん。何があってもだ。クリスタルの記憶を覗いてはいけない。ひとり残された者の辛さを、わしと同じ思いを、ユーリィにさせては

いけないよ」

「はい」

チェリンカは、すでに触れた経験のあるクリスタルレコードのことを思いかえしながら答えた。

テテオに連れられていった、あの広大な空間——過去から未来へつながる万物の生命の記録が収められたあれこそが、クリスタルレコードなのだ。

そこに蓄積されたあらゆる生命の情報、あらゆる天体の情報の量は果てしない。もしもその核の部分にまで深く触れてしまったら、最期なのだ。

クリスタルの力とは、扱う者の心ひとつで自滅さえ招きかねない危険なものである。さっきは魔物を倒すためにうまく使えたが、ひきつづき注意を怠ってはならない。

そのことを強く言い渡されたのだ。

チェリンカが胸に刻むように考えこんでいると、コルカ王は彼女からユーリィのほうに視線を向けた。

「ユーリィ、おまえにも注意がある。いいかね、クリスタルに関わる者は悪しき心にとらわれてはならない……決してだ。それは人であるかぎり最も難しいことだろう。だが連中はそれを待っているのだよ。負の感情こそ、奴らの糧。憎しみ、怨み、妬み、殺意。それらはクリスタルと相反する月の意志だ。心がそれで塗り込められたとき、人は月の

民となり、奴らの力が一気に増長する。クリスタルに関わる者が月の民であってはならない。それは自滅の道だ……死んだ者は決して帰ってこない。その者がみずからの命を賭してまで何を護りたかったのか、何を願ったのか……おまえになら、わかるはずだ」

「はい……」

ユーリィは神妙にうなずきかえす。

「こんどはおまえの番だ。いま、守るべきもののことを考えるのだ。負の感情は誰もが持ち合わせている。やつらはそこを巧みに突いてくるのだ」

コルカ王はそう言って、深く息をつく。

「思えば神殿が月の民に乗っ取られたのも、わかる気がするよ。クリスタルのおかげでこの国は繁栄し、大きな財を生んだ。しかしその栄華は同時に権力と地位争いを生み、人々を澱ませてしまったようだ……長い年月のうちに地位や名声は、見栄を張る手段となり、権力は金を生み出す道具になっていた。やつらの手にかかれば、そんな彼らを取りこむことは造作もなかっただろうな。そんなことをせずとも、すでに神殿は月の民と化していたのかもしれない。教皇……いや、その禍々しき月の者、その名はガルデス。あのとき……娘の……テテオの言葉さえ聞いていれば、あるいは……」

コルカ王は、ガルデスが教皇の座に就く拝命式のとき、娘のテテオが「あの人は月の民」とつぶやいたのを思いかえす。

あのときは深い意味を求めず、何かのまちがいであろうと聞き流していた。
いや、神殿を崇める大勢の信徒の勢いがすさまじく、娘のつぶやきをあとで思いかえす余裕すら失っていたのだ。
人は、あとになって悔やむ。
だが——それにとらわれずに生きていくことのほうが、もっと大事なのだ。
「ずいぶんと長話をしてしまったな。もう夜が明ける時刻ではないか」
コルカ王は、私室の露台からさしこむ朝日をまぶしそうに眺めた。
「皆、今日はここに泊まってゆっくりと体を休めるといい。目を覚ましたら忙しくなるぞ——」
その言葉の意味を理解したユーリィたちは顔つきを変える。コルカは一同を見まわし、王としての決断を下したのである。
「我らを謀った罪、やつらに思い知らせてくれよう——」

6

「いやぁ、キレイな夕陽なのですー。すっかり爆睡ぶっこいちゃったのですー」
「見事に寝過ごしであるな」

アルハナーレムは、隣で欠伸をするミースに答えた。
仮眠を取ったつもりだったが、ミースの言ったとおり――ユーリィたちはぐっすり寝てしまった。
おかげで、いままでの旅でたまった疲れもすっかりとれたが、王城の門から外に出てみれば空はすっかり夕焼けに染まっていたのである。
時間を忘れて寝すぎてしまったときは、起きてからその予定の狂いに直面して、呆然としてしまうものだ。このときのユーリィたちも城門にたたずみ、しばし夕暮れをぼんやり眺めている状態だったのだが、
「いえ、ちょうどよい頃合いかと思います」
門衛のひとりが、脇からユーリィたちに声をかけてきた。
「王から神殿討伐の命が出され、掃討作戦が開始されたのが早朝――昼過ぎにはあらかた制圧しましたが、一部残党が聖堂に立てこもり、現在突入部隊が待機しています。先ほど王が突入の先陣をと、ご出陣されたばかりです」
「なんと、王みずからであるか？」
アルハナーレムが呆れたような声をだす。
王宮勤めをしていたころに知る若きコルカは、手に負えないくらいのやんちゃな性格だったのだが――やはりそれは、いまも健在なのか。

ユーリィたちが寝ているあいだに、電光石火のごとく神殿を追いつめていたとは……いやはや、王になっても元気すぎるお方である。

アルハナーレムがため息をついていると、城門のほうへ駆けのぼってくる兵がいた。

「王からの伝言があります――。装備を整え、準備ができ次第、一部残党の立てこもる神殿まで来て欲しいとのことです」

その兵がひざまずき、ユーリィたちに伝える。

「よし、ぼくたちの出番だね」

ユーリィが言った。

「いよいよだね、ユーリィ」

「うん」

ユーリィは、チェリンカに言われて力強く返事する。その隣で、きょとんとした顔のナッシュが駆けつけた伝令の兵に訊ねる。

「なあ、一部残党って――何だ？」

「はっ。ガルデス教皇と枢機卿クー・チャスペルにあります。その二名が、いまだ神殿内に立てこもっております」

「なっ――なんと！　大物が、まだ残っていたのです！」

「オオモノ？　なんだ、それ――うまいのか？」

ナッシュが、こんどはミースに訊ねた。
「食っても、おいしくないのです。まずいに決まってるのです――そいつら、いちばん悪いやつらなのです！」
「そうか、まずいか――よし、やっつけよう！」
ナッシュが、ユーリィに言う。
「もちろんだよ――みんな、神殿に急ごう！」
ユーリィは言い放ち、城門をあとにする。
「そうなのです、主役は遅れて登場なのです！」
ミースも駆けだす。ほかのみんなも、ユーリィのあとを追って駆けだした。

街は大騒ぎだった。
奮起したコルカ王が討伐隊を編成し、神殿のまわりを取り囲んだのだから無理もない。
ユーリィたちが街の広場に出ると、大勢の人たちでごった返していた。
いままで信じてきた神殿の行いが――すべて陰謀によるものだったとの発表を受け、混乱している人々もいる。しかし、それに気づきはじめていた人もいて、拳を振りあげてコルカ王の軍勢を応援する声が高まりつつあった。

「よ、要するに――野次馬が多すぎるのである！」
人混みをかき分けるように進むアルハナーレムが、たまらず言う。
だが、警備に当たっている兵がすぐにユーリィたちの姿に気づいて、人々の整理をはじめた。
「皆の衆、下がれ！　そこの方々は――コルカ王の手助けにまいられた、心強い友軍のみなさんだ！　すぐに道を開けられよ！」
街の警備に当たる兵のひと言で、人々が一斉にユーリィたちに注目する。
「おおっ、すみませんでした！」
「英雄よ！　英雄のみなさんが来てくださったんだわ！」
「お願いしますぞ――詐欺野郎のガルデスを、あんたたちの手でひっ捕らえてくださいなっ！」
人々の声が広がり、ユーリィたちの前にあった人垣が左右に分かれていく。
「え、英雄って……」
ユーリィはとまどいを口にしたが、
「いいのですよー、最後の戦いには盛りあがりが必要なのです！」
「うむ。悪い気はしないのである」
「行こうぜ！　悪いやつ、早く倒す！」

ミースをはじめとし、アルハナーレムもナッシュも、戦いを前にして力をみなぎらせているかのようだ。

すでにユーリィたちの前は、人垣が両側にわかれて通れるようになっている。

ユーリィは声高らかに宣言した。

「みんな――ありがとう！　ぼくたちは一歩も引かない。今日こそ決着をつけてみせる」

「おーっ！」

街の人々が、ユーリィの言葉に声援をあげる。

その人垣のあいだを走りぬけ、ユーリィたちは神殿をめざした。

「やっとまいったか。我慢できずに突入するところであったぞ――」

神殿の入り口に立っていたコルカ王が、大きな声でユーリィたちを出迎える。

その言葉どおり、神殿の巨大な塔の周囲はすでに数千の兵によって包囲網が敷かれていた。隅のほうでは捕らえられた神官たちが兵に連行されていくのが見える。

まさに、あっという間の猛攻撃だったらしい。ユーリィたちがもうすこし出遅れていたなら、コルカ王はすべてカタをつけてしまっていたかもしれない。

「ハハハハハ、冗談だ。お前たちをのけものにしては、テテオに叱られてしまうからな……」

と、コルカ王は笑ったあと、ユーリィたちをあらためて見る。

「……いい顔だ。英気は充分。準備はいいな？」

「はい――」

ユーリィは、真剣な表情でうなずきかえす。

「では、まいろうか。お互い、積年の思い存分に晴らそうぞ……テテオ、見ていてくれ。いま、終わらせてやるぞ……」

コルカ王は天をあおいで娘に告げたあと、

「開門っ！」

ひときわ大きな声で兵たちに命じた。

固く閉ざされていた大きな扉をこじ開けて突入してみると、ユーリィたちはその異変に気づいて足を止める。

神殿の中はうす暗く、その名にふさわしくない邪悪な空気がこもっていたのだ。

壁はどす黒く汚れ、採光のための天窓もふさがれている。祭壇に在るべきクリスタルの姿はなく、内部の構造も本来の神殿の様子とは異なっていた。いたるところに抜け道

のような細い通路が、壁をくりぬいて増築されており、蟻の巣を思わせる不気味な様子に変わり果てている。

その光景に圧倒されながらも、ユーリィたちとたくさんの兵をともなったコルカ王は神殿の奥へと進軍していく。

怪物の棲家にも感じられる雰囲気の中で、ユーリィたちはいくつかの部屋をくぐりぬける。そして、広間のような場所に出たときに発見した。

まるで王のごとき態度で玉座に鎮座したままのガルデス教皇と、その脇にひざまずくチャスペルの姿を――。

重厚な鎧をまとい、白い顎鬚をのばした醜悪な面構えのガルデスが立ちあがる。

広間に入ってきた軍勢にコルカ王の姿を認めたとたん、忠実なる下僕のような態度を示してきたのだ。

「おお、我が君ではございませぬか。体調を崩されたと聞いておりましたが、いかがなされました。あまりご無理を……」

「黙れ下郎！　余の無事が残念でならぬと顔に書いておるわ。教皇……いや、ガルデス。数多くの民を殺害し、我が娘を手にかけたばかりか、余の命までをも狙いしは正に国賊。その非道、万死に値する。何か申し開きはあるか」

「申し開き？　ククク、何のことやら？」

ガルデスは、コルカ王の問いかけにその赤く染まった目を細めた。
もはや全身――人とは言いがたい形態をしたガルデスに、コルカ王はさらに言い放つ。
「貴様は、あれに囚われているのだ。小さいやつよ、月の王など器が知れるものだ。わからぬとでも思ったか、痴れ者め――」
そしてコルカ王は剣をぬいた。
「余はレベナ・テ・ラの名をもつ国の王。天空に浮かぶあの禍々しい凶星のことなど、とうに見抜いておるわ！　貴様、よくもテテオをあのような目に……いままで生き長らえたこと後悔するがよい、捕らえよ！」
剣の切っ先をガルデスに向けながら、居並ぶ兵たちに命じる。
大勢の兵が前進しようとしたとき、ガルデスの脇にひざまずいていたチャスペルが常人離れした跳躍力で高く舞いあがり――軍勢の前で着地した。
「まったく、あなた方には信仰というものが少しも感じられませんね」
獣のような仮面をかぶったチャスペルが、コルカ王の突撃部隊をねめつける。その威嚇に、兵たちはおそれをなして立ち止まってしまう。
「猊下、あなた様はこれより大事な儀のある御身にございます。ここは私めに」
「ククッ、よかろう。存分に楽しむがよい」
ガルデスがチャスペルの言葉にうなずき、広間の玉座のうしろにある通路の中へと姿

を消した。
「待ていっ、ガルデス！」
コルカ王が叫ぶ。
するとチャスペルが手甲から鉤爪をのばして、あやしい動きをはじめる。左右に移動して兵たちを牽制し、ガルデスを追わせないようにしながら、
「明日の日の出は、太陽祭。凶日を払う大切な儀式なのですよ」
「おのれ、貴様……」
目障りなチャスペルに、コルカ王が視線を向けた。
そいつはガルデスを逃すために注目を集めようと、大きな声でしゃべりだす。
「我らの月の神は大変慈悲深い。我らの立場をわきまえず天をめざした者は翼をもがれ、地上へと落とされます。ですが、その者たちを焼き殺した子らには祝福が与えられたと言います。なんと素晴らしい――」
「何が素晴らしいものだ――そのへらず口からふさいでやろう！」
コルカ王が歩みだしたとたん、
「王様！　こいつは、ぼくたちに任せてください！」
ユーリィたちが前に出て、チャスペルを取り囲んだ。
「……なるほど、あなたたちですか。猊下には感謝せねばなりませんね」

「あのときの、ぼくとはちがうぞ！」
ユーリィがチャスペルに対して剣を構える。
「くくくっ、見ればわかりますよ。あのときより、すこし大人になったから――いまこそ、父親の仇討ちをなさりたいとでも？」
「ちがうよ」
「ならば、何だとおっしゃるのです？」
チャスペルが仮面の下からあざけりの声で問いかけた。
「ぼくたちは、聖なるものを穢したおまえたちを成敗するために、ここに来た！　覚悟しろ！」
「戯言を――」
チャスペルが手甲の鉤爪をきらめかせる。
ユーリィは、心の中で誓った。
もう殺意を抱かず、目の前の敵と真っ向勝負する。同じ過ちはくりかえさない。
――見ててよ、父さん！
ユーリィは剣をかざし、宿敵のチャスペルに挑んでいった。

第八章　最終決戦

とうとう訪れた、最後の戦い――。
天に召されたわたしは、ただ見守ることしかできません。
でも、彼らが未来をつかめることを信じています。
クリスタルの光がユーリィたちとともにあらんことを……。

1

ユーリィは剣を振るい、そいつがくり出してくる鉤爪を打ち払っていく。すばしっこく動きまわるやつだった。

「忘れるものですか。わたしの胸は喜びで、いまも破裂してしまいそうです。なぜなら、あなたたちを殺せるからですよ！」

チャスペルがめまぐるしく動きながら言った。左側にいたかと思うと、もう右側に移動している。あまりのすばしっこさに見失いそうだ。

おかげでミースが放つ壺の攻撃も、ナッシュの弓も、アルハナーレムの杖から発する火炎攻撃の魔法も、ことごとくかわされてしまう。

仕方なくユーリィは、音でチャスペルの動きを予測して斬りかかった。

「そこだっ！」

しかし剣は、空を斬る。
「えっ――」
ユーリィはあたりを見まわす。
たしかに、そこにいたはずなのに――チャスペルの姿が消えている。
――どこへ行った？
ユーリィだけでなく、アルハナーレムたちもきょろきょろしている。
と、そのときだ。
ユーリィの背後に、すさまじい回転音が迫った。
「っ！」
振りかえると、チャスペルの体が回転して宙を走ってくる。かわす余裕はない。そのまま体当たりを喰らってしまう。
「うわっ！」
ユーリィが吹っ飛ぶ。チャスペルは回転しながら鉤爪で攻撃したらしい。ユーリィの鎧の表面に罅が走っていた。
「――ユーリィっ！」
チェリンカが床に倒れたユーリィのもとに駆けよろうとする。だが、ユーリィはすぐに身を起こしてチェリンカに言った。

「チェリンカ、来ちゃだめだ！　ぼくにまかせて――」
制止を受けて、チェリンカは立ち止まる。ユーリィの本気になった目を見たからだ。
「むぅ――あの目は！」
それは、コルカ王にも伝わっていた。次の瞬間、王はまわりに言い放つ。
「よいか、誰も手出しをしてはならぬ！　あれぞ、男の戦う姿だ――」
コルカ王は、ユーリィの目に何かを感じ取ったらしい。
「ユーリィ……」
心配しながらも、チェリンカはユーリィのことを信じてうしろに下がった。
広間で、ユーリィは剣を構えなおす。
ふたたび姿を消したチャスペルの行方を探し、あたりを警戒しつづける。
すると――こんどは、ユーリィの横にあらわれた。
またもや全身を回転させて迫ってくる。
だが、
「二度もさせない！」
ユーリィは地を蹴って、チャスペルの体当たりをかわした。みずからも空中で回転し、チャスペルが舞いおりるであろう場所を予測して――そこに着地する。
予想はみごとに当たった。

回転を解いてふたたび跳躍しようとしたチャスペルの背が、目の前にあったのだ。
そのわずかな隙を突いて、ユーリィは剣を振りおろす。手応えがあった。
「ぐぎゃあああーっ！」
チャスペルが悲鳴をあげて、よろめく。背中を斬られたせいで、高速移動ができなくなっている。
「はあ、はあっ……思い出しますねぇ。あなたの父親も、ずいぶん手こずらせてくれたものでした……でも、負けたんですよね……このわたしに――くっくっくっ」
ユーリィを振りかえったチャスペルが、荒い息をつきながら悪態をつく。回復の時間を稼ごうと、しゃべりつづけているのか。
そんな宿敵に、ユーリィはあえて言いかえした。
「――ぼくは、父さんとはちがう！」
「ふっ、ふへへっ……そ、そうですね……このわたしだって、あのときとはちがうのですよ……装備も、魔力も……はるかに上回っているのですよ。それをご覧に入れてさしあげますよ！」
息を整えたチャスペルが、反撃のための技をくり出す。
なんと、それは――。
「ええっ!?　ぶ、分身しやがったのです！」

離れた場所から見守っていたミースが、真っ先に仰天する。
「むぅ、おそろしき魔の力である！」
アルハナーレムも戦慄した。
ユーリィの目の前には、チャスペルが三人に増えていたのだ。同じ形をした仮面をかぶり、同じ背格好をして、三方向からユーリィを取り囲んでくる。
「くっくっくっ……さあ、三人で寄ってたかって、あなたを血祭りに上げてあげましょう」
「くっ――」
ユーリィは、三人のチャスペルを前にしてとまどう。
どいつから攻撃するべきか、迷いが生じる。
そんな状態のユーリィに、三人のチャスペルが一斉に飛びかかった。
「ユーリィっ！」
チェリンカが悲鳴のように叫ぶ。
「ユーリィが不利なのです！　これは、黙って見ていられないのです！」
ミースがそう言った直後――アルハナーレムとナッシュが、援護のために杖と弓での攻撃を再開させる。
アルハナーレムの杖から火炎が走り、目についたチャスペルのひとりをねらう。

するとそのチャスペルは、ひとりだけ向きを変えて火炎噴射をかわす。どうやら三人は、別々の動きをするらしい。

べつのチャスペルは、鉤爪でユーリィに斬りかかった。それが体に触れる寸前で見切り、横に逃れたユーリィだったが、よけた場所には——ほかのチャスペルが待ち構えている。

身を翻し、そいつに襲われる前にユーリィは剣をくり出そうとした。

だが、さらにべつのチャスペルが背後に迫る気配を察する。

「くそっ」

結局、ユーリィは攻撃をやめて——三人のチャスペルから距離をとった。

「くくくっ……どうしたのです？　逃げてばかりですよ？」

三人のチャスペルが一斉に嗤いだす。

たしかに防戦一方だ。

その状況にユーリィは悔しげに、くちびるを噛む。なかなか攻撃のきっかけをつかめない。どれかひとりを標的にしても、べつのチャスペルが妨害してくるのだ。

——どうすればいいんだ。

ユーリィが攻撃を仕掛けられずにいると、横からアルハナーレムの火炎放射が飛んでくる。それは、すこしでもユーリィを助けようとチャスペルをねらったものだが、三人

とも動きが速くて、あっさり外されてしまう。何度やっても結果は同じだ。
そのくりかえしだけの状態に、とうとうミースが苛立った声をはりあげる。
「こら、鳥のおっさん！　いつまでも同じ魔法ばっか使ってないで、たまにはパターンを変えてみやがれってのです！」
隣で文句を言われたアルハナーレムは、
「おおっ、そうであるな！」
やっと気づいたように杖を持ちかえた。そして火炎攻撃から――こんどは氷結魔法に切り替えて放つ。杖の先端から、たちまち冷気が螺旋を描くように飛びだす。
それは三人のチャスペルに向かっていく。だが、そいつらは冷気を避けるように次々に床を蹴って、飛びあがる。
またもや、外れたのか――誰もがそう思ったときだ。
ひとりのチャスペルが逃げ遅れたのか、いきなり全身が凍りついて床に落ちた。
――いまだ！
ユーリィは、凍りついたチャスペルめがけて駆けだす。剣を振りおろし、そいつを粉砕した。ばらばらになった氷の塊が、床に飛び散る。
「やった――」
チェリンカが、ユーリィの勝利に喜悦する。

しかし、まだふたりのチャスペルが残っている。そいつらの姿は見えない。たぶん、高速で広間を移動しているのだろう。

「むむっ、おかしいのである――いまのあやつ、当たってないのに凍ったのである!?」

自分で氷結魔法を放っておきながら、アルハナーレムがふしぎがっている。

「何を驚いているかです。あいつは冷たいのが苦手だってことなのです！」

横から助言したミースに、アルハナーレムは謎が氷解したように大きくうなずいた。

「なるほど――そうであるか！　つまり、あやつに当たらずとも周囲の温度が下がれば、動きが鈍くなってしまうわけであるな！」

「ようやくわかりやがったか、このすっとこどっこい――なのです！　わかったのなら、ユーリィを凍らさないよう冷気を撃ちまくってやれ、なのです！」

「わかったのである――我のやる気は、真っ赤に燃えてきたのである！」

「だから燃やしては、だめなのです！　冷やすのです！　何度言えばわかるのです！」

「むぅ、ややこしいのである――」

「おい！　また出てきたぞ！」

ナッシュが、やり合っていたミースとアルハナーレムに叫ぶ。

残った二体のチャスペルが、ユーリィの前に出てきたのだ。

そいつらは鉤爪で同時に襲いかかったが、ユーリィもすぐさま剣で反撃した。三人か

らひとり減ったことで、動きにもいくぶん余裕が出てきている。
「いいぞ、そこなのです！」
ミースが声援をおくる。
「むぅ、もう一体を消すのである」
ふたたびアルハナーレムは氷結魔法を放った。ユーリィを攻撃していたふたりのチャスペルは、あわてて逃げようとする。だが、跳躍する寸前に冷気がかすめた。
それにより、ひとりのチャスペルはまた逃げ遅れて、空中で止まってしまう。だが、静止したことで、あたりを覆う冷気がチャスペルの全身をたちまち凍りつかせた。
――これで、ふたり目だ。
ユーリィは床を蹴って、その凍りついたチャスペルに太刀を浴びせる。斬りつけられたチャスペルは氷の塊のまま、宙で砕け散った。
「やったのです！」
ミースが小躍りして、よろこぶ。
とうとうチャスペル本体のみとなった。そいつは、広間にただよう冷気に影響されて、いままでのような移動速度が出せなくなったらしい。ユーリィの前に立ち尽くし、肩で荒い息をついていた。
また、一対一の状況になった。

アルハナーレムたちも攻撃をやめ、ここからはユーリィに任せようと見守る。
静寂の訪れた広間で、コルカ王や兵たちも息を呑んで戦況をうかがう。
そんな中で、ユーリィは宿敵へと歩みを進めていく。
「もう術は終わりなの？　自慢の移動速度が出なくなってるようだけど？」
剣を構えたまま、ユーリィが問いかける。
チャスペルは動揺しているようだ。仮面の下からもれる声がふるえていた。
「お、おのれ……父親ともども、地獄へと――」
「そんな話をしても無駄だよ」
冷静な声で、ユーリィは答える。
「ぼくは、おまえが何を言っても心を乱さない。これは、とうさんを殺された仇討ちなんかじゃない。さっき言ったとおり、おまえがしてきた凶行への制裁なんだよ――」
「ガ、ガキが！　偉そうに!!」
突然、チャスペルの口調が変わった。それと同時にユーリィに向かって突進してくる。
感情的になったのはチャスペルのほうだった。
ユーリィはそれを待っていたかのように剣を構え直し、チャスペルへと駆けだした。
ふたりが正面からぶつかり合う。
その刹那――銀白色の一閃が、チャスペルの体を走りぬけた。ユーリィがすれちがい

ざまに、剣を振るったのだ。
両者は互いに背を向けたまま、立ち止まった。
――ぐらっ。
大きくよろめいたのは、チャスペルのほうだ。
どうやら一撃で勝負がついたらしい。
「ぐふっ――ひ……ひひ……ごフッ……」
傷口を押さえ、前のめりになったチャスペルが不敵に嗤いだす。
「貴様――何を笑う？」
勝負の決着を確かめようと、歩みよってきたコルカ王が問う。
チャスペルは全身がガタガタとふるえ、死の訪れが近い様子だった。しかしその声だけは敗北を認めずに、ユーリィたちを嘲笑う。
「もう……遅い……教皇様は、日の出と……ともに……世界を……手に……ひっ……ひひぃっ……ひぃはぁ――――っ!!」
奇声をはりあげた直後、チャスペルの体が爆発した。
ひとりでは死なない――道連れにしてやる。そんなチャスペルの卑劣な自爆行為だ。
「くっ！」
ユーリィをはじめ、全員が爆風に耐えようと姿勢を低くする。広間を熱風が駆けぬけ

ていったあと、チャスペルのいた場所には黒煙と炎がたちのぼっていた。
長年、ガルデスの腹心として悪業を積み重ねてきた仮面の男の最期である。
「……」
ユーリィたちは無言で、その場所を見おろす。
ふいに、コルカ王が顔をあげた。チャスペルが言い残したことに何か気づいた様子だ。
「むっ!? 日の出……世界だと……？」
つづいてアルハナーレムも、はっとした。
「……太陽祭！　明日は、太陽祭の日なのである！　しかも明日は、特別なのである。五六年周期目の太陽祭なのである！」
「五六年……皆既日食か!?　しまった、日食が起こる時刻は——早朝だぞ。明日の陽はのぼらない。朝は闇に覆われる！」
コルカ王が、急にけわしい表情になる。
「どういうこと？」
ユーリィが、ふたりに訊ねた。
アルハナーレムが振りかえって、
「この地と月と太陽が一直線に並ぶのであるな。月が太陽を完全に覆い隠すのである」
その返答のあとに、コルカ王が口を開く。

「クリスタルはいうなれば光だ。人は闇を恐れ、光を欲する。夜の恐怖を朝日が照らし、闇を払うことを願う。朝のこない夜に、人は生きてゆけないのだ。くそっ、なんということだ！」

気づくのが遅かった――と、コルカ王は悔やんだ。

「ガルデスめ、これを狙っていたのか。太陽祭は月の力が最も大きくなるときだ。何が起こってもおかしくはないぞ。急げ、なんとしても夜明けまでにやつを捕らえるのだ！」

ひときわ大きなコルカ王の号令が、神殿の広間に響きわたる。

控えていた大勢の兵が「おーっ！」と勇ましく返事し、壁にいくつも開けられた通路の中へ分隊となって突入していく。

ユーリィも、アルハナーレムたちを振りかえって言った。

「ぼくたちも行こう！」

その言葉に、全員が力強くうなずきかえす。

2

クリスタル神殿の内部は、まさに迷宮と化していた。

うす汚れた壁の通路は侵入者を惑わすように枝分れをくりかえし、ところどころに罠

も仕掛けられている。
落とし穴や障害物が落下してくる小部屋にも遭遇した。そのため、犠牲になる兵の数も多い。あちこちから、罠にかかった彼らの悲鳴が響いてくる。
気がつくと、神殿の塔の上層部をめざしているのはユーリィたちだけになっていた。
そのユーリィたちは階層を上にのぼりながら、あらゆる罠を突破する。
ナッシュが怪しい部屋には矢を放ってみて確認したり、ミースが壺を床に転がしてみたり。そして罠がある場所には、アルハナーレムが氷結魔法でその仕掛けを凍らせて動かなくさせたり。あらゆる方法を試みて、神殿の最上階へと近づいていった。
そして、ついに王都を見わたせる楼台が外に張り出した、塔の最上部にたどり着く。

そこは飾り石が使われた豪奢な展望室だった。
天井画まであり、いままでのうす汚れた階層とは異なる宮殿のような空間だ。その様子に圧倒されていたユーリィたちだったが、やがてガルデスはこの階に潜んでいるのだろうと確信を強めていった。
天に近い最上階。
月の神の降臨を願う者なら、ここで夜明けを待つ可能性は高い。
ユーリィたちはさっそく最上階に造られた部屋の中を調べ始めた。いちばん目につい

たのは、その階の中心に位置する重厚な扉で閉ざされた部屋だ。
近づくと、その扉の向こう側からあやしい気配が感じられてくる。
「見つけた。ここにちがいないよ――」
ユーリィは声を小さくして、みんなに注意を促す。
緊張の一瞬だった。誰もが表情を固くしている。
アルハナーレムも、ミースも、ナッシュも――そしてチェリンカも。
最後になるであろう決戦を前にして、神妙な顔つきのままだ。
みんなの視線が注がれるその扉を、ユーリィは力いっぱい押して開け放った。

重厚な扉を開けて進んだ先には、鮮血を思わせるような赤色に染まった部屋が広がっていた。足を踏み入れたとたん、ユーリィたちはその部屋に満たされた禍々しい力に警戒する。
その力は、部屋の中央に祀られた紅いクリスタルから発せられたものだ。
「あれは……」
ユーリィは歩みよりながらつぶやいた。
その紅いクリスタルの中に、女性らしき人影が見える。髪の長い大人の女性で、深い

眠りについているかのようだった。さらにユーリィは歩みよる。どこかなつかしさが、その女性の雰囲気から感じられる。

なぜだろう、この人は誰なんだろう……。

そんな興味に誘われて、さらに近づいていく。やがてまぶしい輝きの中に閉じこめられたその女性の顔だちが、はっきりとうかがえる距離にまで近づいた。そのとき、ユーリィは息を呑んだ。いやユーリィだけでなく、チェリンカも、アルハナーレムとミースも驚愕していた。

「……お母さん……」

ユーリィの口からもれる。記憶の片隅に残された母の面影、もはやそれは、ぼやけた残像でしかなかったはずなのに、いま再会したこのときに鋭敏な感覚が一気によみがえらせてくれたのだ。

でも、信じたくない……。

こんなに痩せ細って、やつれた姿が……お母さんだなんて。

なんてひどい扱いをされてるんだ……。

ユーリィは母の姿を正視できなくなりそうだった。

「ア、アーチェス様……」

「あ、あんまり……なのである……」

ミースもアルハナーレムも、言葉がつづかない。チェリンカは涙を浮かべていた。そのうしろで、ナッシュは怒りをにじませている。

「早く、出してやろう！」

がまんできずにナッシュがそう言ったときだ。

「さすがは血のつながりと言うべきか――」

そう声がして、ガルデスが紅いクリスタルの脇にある制御装置の陰から姿をあらわした。

「――っ！」

ユーリィたちが、いっせいに身構える。

「ふふふっ……」

ガルデスは醜悪な貌に笑みを浮かべ、アーチェスを閉じこめた紅いクリスタルのそばに歩みよった。

「ひと目で、よくわかったな――そう、これはきみたちの母君だよ。いや、だったと言うべきかな」

「……だった？」

ユーリィが声を尖らせる。

だが、ガルデスは余裕の態度で問いかえす。

「死とはどういうことだと思うか？　肉体が朽ち、魂はどこぞの世界に入って、いつかまた生まれ変わる――だが、それはまちがいだ。魂が削られ、無となること――それが、ほんとうの死だ。肉体の中に魂が封じられているのではない。魂があるから、そこに肉体が構成される。よって魂がなくなれば、必然的に――」

ガルデスはアーチェスのほうに貌を向け、うす嗤いを浮かべながら紅いクリスタルの表面に触れようとする。

「お母さんに触るな！」

ユーリィが剣をぬいた。

ガルデスはその威嚇に動じず、また嗤ってユーリィに向き直る。

「触るな、か……貴様も力を使うだろう。誰の力だ？　そう、そこにいる娘の力だ。母子そろってよく似たものよ。その娘もいずれは――」

「黙れ！」

ユーリィは、チェリンカを守るように彼女の前に移動した。

ガルデスは笑みを消し、双子をねめつける。いよいよ闘いのときが近い。ガルデスの赤き双眸が、獲物を狙う野獣のように見開かれる。

「そうだな。砕け散る魂を前に、少々お喋りが過ぎたようだ――ようこそ月の祭壇へ。力ある者たちよ。今宵は特別な日だ！」

ガルデスは、両腕を大きく広げて叫んだ。その巨軀を覆う鎧が、紅い輝きを帯びた。全身に紅いクリスタルの力を宿らせていたのか。それを一気に解放に向かわせようとしている。

ユーリィたちは、ガルデスが放つ〝気〟を受けて、肌がびりびり焼けつくような痛みとおそろしさをおぼえた。

強大な力の前に——それが、いまにも爆発しそうな予兆に、みんなの心がふるえだしている。

ガルデスは言い放つ。まるで戦いの幕を切って落とすかのように！

「昇る陽を、我らが月がすべて覆い隠す。さあ凶日を焼くときを一緒に祝おうではないか！　わたしが統べる、素晴らしい世界の前に砕けるがいい——このようにな！」

その刹那——ガルデスは、圧倒的な力を周囲に向けて放った。

ユーリィたちは、その力の波動にひるむ。吹っ飛ばされてしまいそうな力の膨張だ。しかし、全員がそれに耐えようとして踏ん張る。

まわりの制御装置や壁は、悲鳴をあげるかのように音を立てて崩れだす。それらは一瞬にして消し飛ばされたのか。

気がつくと、部屋を覆っていた壁はすべてなくなり、頭上にはあざやかな赤色の星雲が広がっていた。その赤き星雲の中央で、ひときわ強く輝くのは紅い月である。それは

いつもよりも大きく見え、それだけ地上に近づいているかに思えた。
ガルデスは紅い月と重なるように、上空に舞いあがっていく。
「みんな、夜明けがくる前に決着をつけよう！」
身をかがめて耐えていたユーリィが叫ぶ。
最上階はもはや塔の屋上と化して、強風にさらされている。その上に立ったユーリィたちは、あらためて勇気を奮い立たせる。
「行くぞ！」
ユーリィは塔の頂を蹴って、上空のガルデスをめざす。跳躍の勢いが増し、空中に止まったガルデスにぐんぐん接近する。そいつとさしちがえるくらいの覚悟で、剣をくり出した。
だが、ガルデスは嗤う。その貌が一瞬だけ見えた直後だ。ユーリィは全身に激しい痛みをおぼえる。ユーリィの剣は届かなかった。ガルデスに斬りつける前に、薙ぎ払われていたのだ。
「――あぐっ！」
ユーリィは落下し、塔の床に叩きつけられた。なぜか、すぐに起きあがれない。ものすごい力で押さえつけられたかのようだ。でも負けられない。
ユーリィは身を起こそうとして、もう一度、上空のガルデスを見た。アルハナーレム

たちが戦っている光景が目に飛びこんできた。でも、みんなの攻撃もガルデスには効果がない。打ち破られて、次々に墜落してくる。

ユーリィが何とかして立ちあがると、まわりにアルハナーレム、ミース、ナッシュが床に落ちてきた。みんな、すぐに起きあがれない。そのくらい傷ついて、気を失っているらしい——いや、まるで魂のぬけ殻となってしまったかのように動かない。

そんな……。

……ぼくたちの力が及ばない。

ユーリィは身のふるえをおぼえる。そして呆然と立ち尽くすチェリンカのもとに走る。彼女もショックを受けて、ふるえていた。

「お、おかあさんが……あいつに、あんな力を……」

「チェリンカ、大丈夫だから！　ぼくが守るから！」

あきらめたらいけない。

ユーリィは、チェリンカをかばうように盾となった。上空のガルデスが、勝ち誇ったように嗤っている。

あいつに、絶大な力を与えたのは——。

……ぼくたちのお母さん。

長いあいだ、あのクリスタルに閉じこめられて……ガルデスに力を蓄えさせた。

「ユーリィ……」
うしろでチェリンカが心細そうにつぶやく。
——ふたりで、力を使うべきだろうか。
でも、だめだ。
すぐにユーリィは、その考えを捨てる。
お母さんの、あんな姿を見てしまったから……ぼくの心は揺れている。ずっと、ふるえている。
ユーリィは感情の乱れを認めた。いまはそれを必死に抑えようとしているが、どこではじけるかわからない。そんな危険な状態で、チェリンカといっしょに力を使うわけにいかない——。
ユーリィは、また塔の頂を蹴って飛びあがる。
すると、
(……ユーリィ、チェリンカ……ああ、こんなに大きくなって、よかった……)
アーチェスの声が聞こえてくる。
(……おかあさん、会いたかった……)
チェリンカが、心の声でそれに応えていた。
(ごめんね、辛い思いをさせて……)

――ううん、ぼくたちは平気だよ……おかあさんこそ、辛かったでしょ……ごめんね。

ユーリィも心の中で母に応えながら、ガルデスに挑む。

くり出した剣が、ガルデスの胸をかすめる。鋭くのびたガルデスの爪が、ユーリィを襲う。

（ああ、一度でいい。あなたたちを抱きしめてあげたかったのに……）

アーチェスの心が泣いている。

ガルデスの爪から逃れたユーリィは、塔の頂に着地して、また飛びあがる。

（おかあさん……おかあさん？　そんな、いやだよ――おかあさんっ！）

突然、チェリンカが泣き叫び始めた。何が起きたんだろう。ガルデスとの闘いに必死で、クリスタルのほうを見る余裕がない。

でも、お母さん……。

心が揺れた瞬間、ガルデスからの攻撃を受けた。

「ぐあっ！」

ユーリィは墜落して、また床に叩きつけられた。

（もう時間がないの。わたしの存在は消えて、もう……ユーリィ、チェリンカ……）

アーチェスが何かを決意したらしい。

とっさに、ユーリィは身を起こした。紅いクリスタルの輝きが増している。

（せっかく会えたのに、そんなのないよね……チェリンカ？）

心の中で、うったえた。直観的に別れを悟っていた。

ユーリィとチェリンカの見守る前で、紅いクリスタルはさらに輝きを増す。それが、ガルデスに対するアーチェスの抵抗――みずからを消滅させることだった。

やがて輝きがおさまり、クリスタルの中にあった母の姿が消えてしまう。

「――っ！」

それを見つめるユーリィとチェリンカから血の気が引いた。

……ぼくたちを守るために？

ユーリィは頭の中が真っ白になったように立ち尽くす。

「さも美しき親子愛、といったところか。だが、おかげで届いたぞ。絶望がクリスタルの力を弱め、我らが神は――地に舞いおりる！」

頭上からガルデスが叫んだ。

ユーリィはゆっくりと顔をあげ、そいつをにらみあげる。同時に抑えきれない感情がこみあげてきた。

「そうだ、憎め。おお、なんという。これが魂が削られるということか――おまえが、おまえが！」

ガルデスは、さらなる力の膨張に狂喜したかのようだ。

——許さない。

ユーリィは怒りの塊と化す。剣の柄を持つ手に力がみなぎり、ふたたびガルデスめがけて飛び立つ。

そいつを叩き潰す——ユーリィの感情が爆発しかける。

(ユーリィっ!)

チェリンカの心の声が呼びとめた。

——えっ?

剣をかざし、ガルデスに向かうユーリィの心が揺らぐ。

チェリンカ——ぼくを止めてるの?

また、ぼくはチェリンカを……。

そう思ったときだ。

ガルデスが急に舞いおりていく。ユーリィではなく、べつのものをねらっているらしい。あわてて身をひるがえす。そいつがねらっているのは——。

「チェリンカァァァッ!」

——ぼくは、チェリンカに逃げるように叫んでいた。

すると次の瞬間、ユーリィの目の前を——闇が覆う。

3

「……えっ？　チェリンカ？」
「びっくりするじゃない。急に大きな声で、わたしのこと呼ばないでよー」
ぼくは、チェリンカに額を叩かれて目を醒ました。
「――どうした、夢でもみたのか」
「おとうさん？」
額を叩かれて目を醒ましたぼくは、何が起きたのかわからずにいた。
目の前にいるのは、チェリンカとおとうさん。それでぼくはふかふかのベッドに寝ていて、起きたばかりだった。
「ど、どういうこと……？」
ここは自分の家だ。ぼくは剣を手に持っていない。鎧も着ていない。寝間着のままで、それに六歳の子供になっている。
チェリンカだって子供のころの格好をしているし、おとうさんも元気そうだ。
――わからない、これは夢なの？
ぼくは自分でほっぺたを叩いてみたり、つねったりしてみる。

「うっ……」

とても痛かった。痛いままで、夢から醒めない。——ということは、いままでのが夢だったの？

「ほんとうにどうしたのだ、大丈夫か？」

おとうさんがベッドのほうに近づいてきて、ぼくの額に手を当てる。

「……ふむ、まだ熱があるようだな。雨に当たったせいだろう。まだ寝てなさい」

そう言って、おとうさんが頭を大きい手で撫でてくれる。

あの、ごつい手で撫でられているのが、はっきりわかる。

……これが現実？　いままでのは、みんな夢……。

ほんとうにそうなんだろうか。

まだ信じられずにいると、

コンコン。

家の玄関の扉が叩かれた。誰かが訪ねてきたみたいだ。

「はぁーい」

チェリンカが寝室から出ていった。おとうさんも玄関にいく。

そのとたん、はっとした。ぼくはベッドから出て、玄関に走った。

「チェリンカ、開けちゃダメだ！」

大きな声で言った。玄関に立ったチェリンカは扉を開けるところだった。
「……何を？」
チェリンカが、ぼくのほうを向いて聞いてくる。
「だから、ここにあいつが来て――だから、開けちゃダメだよ！」
そう言って必死に止めたのに、チェリンカは笑って扉を開けてしまった。
「ひぁぁぁ、すごい雨なのです」
「ミース？」
ぼくは目をぱちくりさせる。
家の中に入ってきたのは、おそろしい仮面の男なんかじゃなかった……。
「あー、起きてちゃダメなのです。ちゃんと寝てるのです。ミースが薬を作ってきたのです。お約束のアーンをやるのです」
ミースはこっちによってきて、ぼくに薬の入った瓶を見せる。
「えっ？　それ、苦い薬……？」
ぼくは前にも飲まされたことがあったのを思い出す。
でも、ミースは聞いてないようなふりをして、さっそくぼくに薬を飲ませようとしてくる。
「はいアーン、にやー、ホッペについているのですー。チュ。にへへ♪――をやるので

す。ひぁぁぁ、恥ずかしいのです。たまらないのです」
「あー、それやる。わたしもやるー」
横からチェリンカも楽しそうに近よってきた。
「ダメなのです——そんな嬉し恥ずかしいことは、チェリンカにはまだ早いのです」
「そんなことないもん」
「あるのです」
ミースとチェリンカが薬瓶の取り合いをしている。
ふたりの、いつもと変わらないやりとり……。
それを見ていると、
「夢……夢だったのかな」
ぼくは声に出してつぶやく。

翌日になって、ぼくはおとうさんのそばにくっついていった。
家の外で、おとうさんはいつものように薪割りをはじめようとする。
「大丈夫か。まだ寝ていてもいいんだぞ」
「大丈夫だよ」

「そうか。あまり無理はするなよ」
おとうさんは斧を手にして、薪割りをはじめた。
ぼくはそれを近くから眺める。
見あげると、雨だった昨日とは違い、空はとてもよく晴れていた。日差しもあったかくて、季節は夏が近いみたいだ。
「……長い夢を見てたんだ……」
ぼくは、おとうさんに話しかけた。何だか急に話したくなったから……。
おとうさんは黙って薪割りをつづけながら、ときどきちらりとぼくのほうを見ている。
ぼくはつづきを話した。
「みんな死んじゃって、ぼくとチェリンカだけになっちゃって……」
口に出して言うと、すこし気分が落ちついた感じになれた。
あれは、やっぱり夢だったんだ……みんな、うその世界の出来事だったんだ。
いま、そのことがわかってきて安心できた。
「なぁユーリィ。おまえは、運命というものを信じるか」
「えっ？」
考えごとをしていたぼくは、顔をあげる。
薪割りの手をとめて、おとうさんがこっちを見ていた。真面目な顔をして、ぼくに話

しかけてくる。
「あのとき、ああしていたら、あそこでこうしていたらと思うことがあるだろう。だが、時間は元に戻らない。いまがあるだけだ」
「うん」
「そうして歩んできた道の前には、すべての選択が分かれ道としてあって、我々はそれに従って歩いている」
ぼくは、おとうさんの話にすこし首をかしげた。
「うーん、そうなのかな……でも、行き先は好きに選べるんだから、道なんてないのと一緒だよ」
「普通はそうだ。だが、どんな選択をしても同じ道に通じていて、ひたすらそれを行くしかない場合がある。それを運命という」
「なんかヤダな、そういうの……」
「もしかしたらおまえの見た夢というのは、そんな道の一本だったのかもな」
「そうだね……」
むずかしい話なのに、ぼくはふしぎにも理解できたみたいだ。
運命は変えられない。どうやっても同じ結果にたどり着く。つまり、その人に用意された未来は、常にひとつしかない。努力しても未来は変えられないということ。ぼくが

見ていた長い夢は、そういう変えられない流れの中で見ていたものなのかもしれない。
ぼくがそんなことを考えていると、隣の家の扉を開けて、チェリンカが外に出てきた。
そういえば、アルに何か作ってもらうって言ってたっけ……。
「チェリンカ！　こっちこっち！」
ぼくが呼ぶと、チェリンカはこっちを向いて手を振る。その手に鎖のついた光る何かを持っている。ああ、あれはクリスタル……。たぶんアルにペンダントにしてもらったんだね。
「チェリンカ、いつもあそこで転ぶんだよね……あ、ほらやった」
ぼくが注意しようとする前に、こっちに駆けてきたチェリンカは転んでいた。
「ところでユーリィ、もしすべての道が見わたせ、自由に移れるとしたらどうだ？」
急に、おとうさんがさっきの話のつづきをはじめる。
ぼくは、ちょっと考えてから答えた。
「それって、未来を自由に選べるってことでしょ。最高だよね」
「ああ、そうだな。最高だ」
「でも……そんなこと……」
――できっこないよ。ぼくがそう言おうとしたとき。
「できるさ、こんなふうにな！」

いきなり、おとうさんの声が変わった。
ぼくはびっくりして——もういっかい、おとうさんをよく見た。
「お、おとうさん……」
目の前に立っていたのは、おとうさんじゃなかった。——どす黒い貌に、真っ赤な目。
大きな体に鎧を着た——ガルデスだ。
「ふはははっ！　どうだ？　時空を超え、世界を自由に選べる力は？」
ガルデスが、ぼくを見て嗤いだす。
——やっぱり夢じゃなかった！
ぼくは腰の剣をぬこうとして、それがないことに気がつく。
いけない、丸腰だったんだ！
しかも、いまのぼくは——六歳の子供だ。ガルデスと闘っても歯が立たない！
ここで殺されたらおしまいだ——ぼくは咄嗟に逃げようと思った。
すると、
「この世界は、嫌か？　では——」
うしろでガルデスの声がする。
逃げようと走りだしたぼくの目の前が、真っ黒になる。
——また、闇の中を旅立った。

4

「誰かいるの？　ユーリィ、ユーリィなの？」
真っ暗な中で女の子の声がして、ぼくは目を開けた。
そこは王城の中だった。立派な長椅子に腰かけたテテオさんがいる。前に見たような半透明の輝いた姿じゃなくて、ちゃんと生きているみたいだ。
「あ、チェリンカも。また、あそこから入ってきたのね？　もう、ふつうに入ってくればいいのに」
椅子に腰かけたテテオさんがそう言う。
ぼくは、はっとして隣を見る。成長したいまのチェリンカが立っていた。ということは——ぼくもちゃんといま現在のぼくで、鎧を着ていて、腰に剣もさしている。
どういうことなんだろう……。
ぼくは、さっきの世界とのちがいを思い出そうとした。でも、頭の中がぼやけてきていて、はっきり思い出せなくなっている。時間とともに、どんどん忘れていく……。
「——でね、おかしいの。もう、どうしたの、ぼうっとして。ちゃんとお姉さんの話を聞きなさい！」

「えっ」

テテオさんに叱られて、はっとした。

ずっと、ぼくたちに話しかけていたらしい。考えごとをしていたせいで、まるで聞いていなかった。そのことを謝ろうとしたら、

「あれ、ごめんなさい。おかしいね、わたしのほうが年下なのに」

テテオさんのほうが謝ってきた。

「……そうだっけ?」

ぼくは変だと思う。

九歳のテテオさんより、十二歳のぼくたちのほうが年上だけど——そもそも、テテオさんの生きていた時代は、ずっと前で……あれ? 時代のちがう者同士が、どうしてこの場にいっしょにいるんだろ?

「何を言ってるの。誰が見たってそうでしょ?」

「あ、うん……そうだよね」

ぼくはテテオさんに強く言われて、うなずいてしまった。

そのとき、ぼくの記憶がまたひとつうすれていく。——あれ? ぼくはいま、何が変だと思ってたんだろう。

「そういえば、チェリンカは静かだね。どうしたの?」

「チェリンカは、いつもこうだから……」
ぼくは、ふつうにテテオさんに答える。
チェリンカは、まだ声が元に戻っていなくて——いや、ちがう。もう戻っているはずだ。ぼくは隣のチェリンカを見て、ぎょっとした。
チェリンカが、あのときの状態になっている。人形みたく心を閉ざしたようになって、立っているだけだ。
「あら、また力を使ったの？　あまり大きな力を使うと、もとに戻らなくなっちゃうんだから」
「え？」
ぼくは、テテオさんのほうに振りかえる。そのとき、うしろで扉の開く音がした。
「おやおや、どうも賑やかだと思ったら、ふたりとも来ていたのか」
部屋に入ってきたのはコルカ王だった。
「とうさま。お仕事は、もう終わり？」
「何、つまらん仕事などより、おまえのほうが大事だからな」
豪奢な外套を着たコルカ王は、笑顔でテテオさんに言った。
「またそんなことを言って。うれしいけど、そんなことではいけません。王様は国民のために働くのです」

「これは参った。ですが姫、姫はわたしめの宝にございます。王の宝は国の宝。ならば厳重かつ丁重に扱わねばなりませぬ」
「よろしい。大事にするがよいぞ」
豪華な椅子に座ったテテオさんが、ふざけたような口調で言う。
「御意」
その前で、コルカ王が頭を下げている。
「うふふ」
テテオさんが満足そうに笑った。つづいてコルカ王も笑いだす。
「ハハハ、どうしたユーリィ？」
「もとに戻らないって……チェリンカが……」
ぼくは隣のチェリンカをじっと見つめたまま、つぶやいた。
すると、テテオさんが立ちあがって、チェリンカのほうに近づいてくる。
「チェリンカは——わたしたちはクリスタルの力を使えるでしょ。その力はとても大きなもので神々をも超えると言われるわ。ただ人の身で、それをするには代償を支払わないといけない。大きな力を前に人の魂はそれに耐えられないのよ。当然のことでしょ」
「そんな……」
ぼくは信じたくなかった。

隣で人形みたくなってしまったチェリンカは、いつ力を使ったんだろう。ぼくがそのことを思い出そうとしていると、コルカ王が話しかけてきた。

「彼女だけではない。おまえもだ。摂理は、意志と想いで曲げるようにはできていない。人が人以上の力を求めれば、代償を支払わなければならん。チェリンカは魂を削り、そしてユーリィ、おまえは命の時間を削るのだ」

「命……」

はじめて知ったことだった。

前にぼくだけが力を使おうとして、死にそうになったのはそのためだったのか……。いままでチェリンカだけが代償を受けると思いこんでいたけど、じつはどっちも傷つくんだ。

クリスタルの大いなる力を使えば――。

「さあ、夜も遅い。もう休もう。明日は太陽祭だ――」

「とうとう教皇様の力となる日だね、とうさま――」

テテオさんが、コルカ王に楽しそうに訊いている。

「ああ、だが何も恐れることはないよ。それはとても光栄なことだ。月の神がすべてを導いてくれる」

「うふふ、そうだね」

テテオさんが笑っている。その笑い方が、なんか不自然で嫌な感じがした。
——そもそも、月の神って何だ？
アルが、前に危険な神だって教えてくれなかったか。
「ねぇ、ユーリィもよろこびなさいよ。もうすぐ夜明け。太陽祭がはじまろうとしているのよ」
……もうすぐ夜明け。
瞬間——ぼくの中で何かがよみがえった。その言葉を耳にして、反射的に剣をぬいた。
「だまれっ！　ぼくたちをいたぶるのが、そんなに楽しいか！」
チェリンカを守るように、ぼくは前に出た。
剣を構えた先には——思ったとおり、ガルデスしか立っていない。
「ああ、楽しいとも。いま世界のすべては、我が思うがまま——この世界はまぎれもない現実なのだ。ここもまた無限に存在する道のひとつであり、すべてが真実だ！」
「ウソだ、ウソだ！」
ぼくは何度も首を振りながら、ガルデスに向かって飛びかかった。
すると、また目の前が真っ暗になった。
——ぼくは、次にどこへ飛ばされるのか。

「チェリンカ……」
ぼくは、ぼんやりと街を眺めていた。鎧を着て、十二歳のままで、隣にはチェリンカもいる。
ふたりで、街の広場にある長椅子に並んで座っている。
「ひどい顔、大丈夫？　何を悩んでいるの」
横から、チェリンカが心配してくれる。その声を聞いて、ぼくは安心した。
人形みたく動かないままじゃない。ちゃんと、しゃべりかけてくれている――でも、それは、ほんとうなのかどうか。
「もう、ぼくには……何が何だか……」
「何を信用していいのかわからない？　簡単な――とても簡単なことだよ、ユーリィ。どんな道でもどんな世界があっても、そこにいるすべてのわたしはユーリィの味方だよ」
「チェリンカ……」
ぼくは、彼女の顔をしっかりと見た。
チェリンカは、じっと見つめかえしてくる。
それは、うそのチェリンカには思えなかった。この世界にちゃんと存在して、自信の

ある顔で話しだす。

「たとえ世界のすべてが敵だとしても、わたしがそうである世界はない」

「言い切るんだね。まるで見てきたみたいだよ」

「うん、見たよ。そんな世界はひとつもなかった。だから大丈夫。わたしとあなたが同じでない世界はない。お姉さんを信じなさい」

「ぼくたち双子じゃないか。おねーさんも何もないよ」

ぼくは、すねたように言いかえした。もう何年も前に、同じような言い方をしていたのを思い出す。

思い出したとたん、急に懐かしくなって——ふっと頬の緊張がゆるむ。

「フフッ、それでいいの。さあ行きましょう。あなたがこの世界を気に入らないのなら、違う世界を作ればいい。わたしたちはそれができるのだから——」

チェリンカはそう言って、長い椅子から立ちあがった。

たくさんの人たちが平和そうに歩く広場を、チェリンカも歩みだす。ぼくもそのあとを追いかける。向かう先には、高い塔がそびえ立っていた。

「あ——」

「きた、ユーリィとチェリンカきた」
「遅いのですー。ミースたち、待ちくたびれたのですー」
神殿の入り口には、アル、ミース、ナッシュが立っていた。なぜか、すごく久しぶりの気がした。話を聞くと、みんなそれぞれ、べつの世界を旅していたみたいで、やっとの思いでここに戻ってこれたという。
「とうとう正念場である。準備はいいであるか？」
アルが、ぼくに訊いてきた。ぼくは、みんなの顔を見つめる。
「ね、ほら。みんないる。あなたがひとりの世界はないでしょう？」
チェリンカが笑顔で、ぼくに言った。
アル……。
ミース……。
ナッシュ……。
みんないる。闘う準備はできていると、ぼくにうなずいている。
そう、もう一度だ——もう一度、ぼくたちはガルデスに挑む。
「ユーリィ、神殿の入り口……あの扉を開ければ、元の世界に戻れるわ」
チェリンカが教えてくれる。
ぼくは振りかえって、神殿の大きな扉を見つめた。石造りで、固く閉ざされた扉だ。

「みんな、行こう――」
ぼくはしずかにそう言って、歩きだした。
あの戦いの場所に戻るために――。

5

神殿の扉を開け放ち――ユーリィたちは、ガルデスとの決戦の場に戻ってきた。
そこは、石の壁で閉ざされた最上階の一室。中央にはアーチェスの姿がない輝きの失われたクリスタルが祀られてあり、その前に醜悪な面構えのガルデスが立っていた。
ふしぎなことに、あれほど破壊されたはずの部屋が元のままになっている。もしかして幻でも見せられていたのか。
「……やはりな。結局どの世界でも、おまえたちとは相容れぬようだ！」
ガルデスは、歩みを進めるユーリィたちに言い放つ。
仲間とともに前進するユーリィが言いかえす。
「そうだね。きっと、どの世界のぼくも、おまえを滅ぼすために何度でも、ここに立つだろう」
「ククッ、戯言を。おまえはその娘がいなければ、魔法ひとつ、ろくに使えまい。無限

にある世界の中で、おまえただひとりきりの世界に移ることもできるのだぞ」
「確かにぼくは、チェリンカがいないと魔法どころか剣すら持つこともできないだろうね。なら、やってみるといい。そういう世界に移ってみるといい」
歩みを進めるユーリィは、逆にガルデスを挑発した。
「我は月の王――そして世界を手に入れ、神となった！　いまの我に、思いどおりにならぬことなどない！」
ガルデスは接近するユーリィたちを別世界に飛ばそうと、片手を振りおろす。しかし、発動しかけた力はすぐに消え失せてしまう。
「どうしたの？　ぼくはここにいるよ」
「バ、バカな……」
ガルデスの貌に、あせりがにじみだす。
「ほら、もうすぐだ。早くしないと着いてしまうよ」
歩みを進めるユーリィたちに、ガルデスがあとずさりをはじめた。
「世界は無限にあるはずだ。なぜ、おまえひとりの世界が……」
「――ないんだよ。ぼくとチェリンカが同じでない世界は存在しない」
「そんなバカなことが……」
「自分の思いどおりにならないのが、そんなに怖いか？」

「黙れ！」

ふたたび、ガルデスは力を放つ——だが、結果は同じで何も起こらない。

「しょせん、おまえも人ということだ。月に民など存在しない。人はこの星で生きていくしかないんだ。おまえは月に魅入られてしまった、ただの心の弱い人間にすぎない」

「黙らぬか、黙れ！　我は、月の神。世界のすべては、我の前にひれ伏すのだ！　神に不可能はない——おまえらがいない世界がないのなら、その世界を作ればいい。世界のすべてから消し去ってくれる！」

ガルデスが叫んだ。

すると、周囲が一気に闇へと落ちた。

別世界に飛ばされたのかと思ったが、そうではない。おそらくこれは虚仮威しの世界だ。ガルデスは、自分が闘いやすい世界にユーリィたちを移したのだ。

やがて闇の中央に、巨大なガルデスの姿が浮かびあがる。

これも幻のようなものだ。大きく見せかけて、恐怖を与えようとしてくる。

だけど、もう騙されない。

ユーリィたちはガルデスに向かっていく。

周囲に小型の紅いクリスタルが、輪を描くように存在する。まずはそいつから攻撃し、破壊していった。

ガルデスは、ユーリィたちの立っている床の一部を落とし穴のように消し去ったが、ユーリィたちは跳躍して無事な床の上におり立つ。そこも、さらに消し去られた。また跳んだ。ユーリィたちは闇に浮かぶガルデスのそばに着地する。

たちまち全員がガルデスに飛びかかった。

戦いは熾烈を極めた。

ユーリィは雄叫びをあげて、ガルデスに突進する。その一撃がガルデスの胸に炸裂したが、あっけなくはじきかえされてしまう。ユーリィは一部だけ残った床の上を転がり、ガルデスが鞭のように振るう腕から必死で逃れる。床の切れ目まで到達しそうになったとき、ナッシュが弓でガルデスの腕を射てくれた。

ユーリィは床の端で止まり、身を起こす。体勢を整えるあいだ、アルハナーレムが杖で氷結魔法をガルデスに放つ。

ガルデスが身をよじる。腹部が凍りついたのだ。そこにミースが爆弾の壺を投げつける。ガルデスの腹で、爆発が起きた。

のけぞり吼えたガルデスが、アルハナーレムたちに躍りかかる。発せられた禍々しい色の光が床を砕き、みんなが高く跳んでかわす。

チェリンカも宙に舞いあがっている。すると、チェリンカの足元から魔法陣が広がり、ガルデスを中心にして一周した。ユーリィたちは全員、その魔法陣を足場にした。

魔法陣はガルデスを軸にして、ぐるぐると回転しだす。
（いまよ、みんな力を合わせて――）
チェリンカが言った。
その言葉にユーリィがうなずく。
――こいつを閉じこめる！
ユーリィは、魔法を使う『意味』を定めた。
その瞬間――ガルデスの全身が、白い光に包まれる。
「バカナ……キサマラ、ゴトキニ……ダガ、シカシ……因果律ヲ越エル、チカラアレバ、ナンドデモ！」
白い光に覆われたガルデスは渾身の力で、その大きな腕を振りおろす。
危機を察したガルデスは、別世界へと逃げ去った。

「ねぇ、ユーリィ……」
その声で目を醒ました。ユーリィは、また闇の中に浮かんでいる。
でも、ここはガルデスが引きずりこんだ世界ではない。雰囲気がちがう。
広大で、闇だと思われた周囲に無数の星が散らばっている。

「……ここは？」
「ユーリィは、ここにくるの……はじめてよね？」
振りかえると、チェリンカとテテオが並んで立っていた。
ふたりの立つ場所には、魔法陣のような模様の描かれた床がある。さらに、まわりを格子状に連なった小さな星の群れが大きく囲んでいた。
「ユーリィさん、ここは万物の生命の記録が収められた――クリスタルレコードです」
「ク、クリスタルレコード!?」
ユーリィが驚いた声で問いかえすと、テテオがゆっくりとうなずく。
ここが、コルカ王の忠告していたクリスタルの核となる部分――。
人が触れてはいけない場所なのだ。
「ユーリィは、この世界……好き？」
チェリンカが、神妙な顔で訊ねてくる。
「……な、何やってんのさ、こんな力使ったら!?」
ユーリィは、いますぐやめさせたいと思った。
しかし、チェリンカは首を振る。
「大丈夫だよ。時を止めるなんて、こんな簡単なこと――」
「簡単って……」

そう言われても、ユーリィは心配でならなかった。チェリンカは無理していないだろうかと、それだけが気がかりだ。

「ここは、クリスタルの記憶……どんなこともわかります。また、どんなこともできるのです……」

テテオがそう言った。

隣のチェリンカは、うつむきかげんにつぶやく。

「あの人は、これがほしかったんだね……」

それはガルデスのことだろう——。

あいつは命がけで、手段も選ばず、これを手に入れたがった。でも、この場所にたどり着けていない。それを手にしているのは、クリスタル使いであるチェリンカとテテオだけ。魂が消滅してしまったアーチェスの姿はここにない。

魂が無事に昇天できたテテオと、現在のクリスタル使いであるチェリンカだけなのだ。

「……でも、わたしはこんなものいらない——ねぇ、ユーリィ……あなたは、この世界が好き？」

「そんなの……」

チェリンカの問いに、ユーリィは答えられない。

でも、彼女はうったえる。

「おとうさん、おかあさん……アルやミース……ナッシュだって……わたしがほしいのは、たぶん、あなたと同じ」
「そんなの……わかってるじゃないか。ずるいよ……」
ユーリィは、自分の口調が幼くなっているのに気づく。
すると、目の前のチェリンカも幼くなっていた。
「わかるよ。ずっと、いっしょだったんだもの。当たり前じゃない」
幼いチェリンカが答える。
この場所では、自分の気持ちの持ち方によって年齢が簡単に変わってしまうらしい。
子供時代に戻ったふたりは、じっと見つめ合っていた。
チェリンカが、また口を開く。
「でも、それではだめなの。あなたが強く望まないと、わたしひとりでは何もすることができない……あなたが望めば、それが世界の真実となる……」
急に、チェリンカが成長した姿に変わって、子供のユーリィに訊ねる。
「ここで終わりにする？　それとも……」
「でも……それをすれば、チェリンカは……」
「大丈夫だよ。ユーリィがそれを望めば、いいだけだもん」
チェリンカは信じている口調だったが、子供のユーリィはちがった。

「……こわいんだ。もし失敗して、ぼくひとりだけになってしまったら……」

子供のユーリィは、あのときの過ちを思いかえして答える。

チェリンカが人形のように動かなくなって、何年ものあいだ、ひとりで暮らしていたときの怖さがよみがえった。まさにユーリィの年齢は、そのころに移行していたのだ。

「なら、ここで終わりにする？　いいよ、ユーリィが望むのならそれでもいい……」

「ぼくは……」

子供のユーリィがつぶやく。

長いあいだの孤独に耐えぬいた歴史があるだけに、気持ちはしだいに成長したときのものへと移っていく。

「……そうだね、いっしょだった……ずっとずっと、いっしょだった……」

現在のユーリィの姿に戻って、思いをあらためる。

辛いことを乗り越えた経験が、心を乱さずに答えさせている。それを見たチェリンカは、また幼いころに戻って言った。

「これからも、いっしょだよ。たとえ、この世界のわたしがいなくなっても……ちがう世界のわたしが、過去と未来のわたしが、いまのわたしが……ずっといっしょにいてあげる。だって、わたしたちは家族なんだもの」

「チェリンカ……」

「だから、こわいことなんてないよ……あなたは何を望むの？」
「……」
ユーリィは目を閉じて考える。答えはもう決まっていた。
ふたたび目を開けると、目の前には同じ年齢に戻ったチェリンカが立っている。そのうしろでテテオが見守り、格子状になった天体の覆い――クリスタルレコードがゆっくりと回転して動きだしていた。
ユーリィは、チェリンカに視線を戻す。
「……」
自分の答えを口にすることができない。最後の最後で、まだとまどう自分がいた。
「そう、それはとても簡単なこと……」
急にチェリンカの胸のペンダントが、まぶしい光を放ちだす。
「チェリンカ……チェリンカッ!?」
「大丈夫……きっとまた……スグニ逢エルヨ……」
大きく広がったペンダントの光の中で、チェリンカの声がかすれていった。

6

「……因果律ヲ越エル、チカラアレバ……コノチカラ、アレバ……ナンドデモォッ！」

ガルデスはひとり、神殿の塔の最上階にある部屋で言い放っていた。

ユーリィもその部屋に戻っていた。しかし彼ひとりだけで、仲間の姿はない。

それもそのはず。クリスタルの大いなる力を使ったユーリィだけが、この空間に入ることを許されていたのだ。

もはや以前とは、世界も、歴史の流れもちがう。凶悪な男を封じるために選んだ世界なのだ。

ユーリィは、クリスタルの力を求めながら届くことのなかったその哀れな男に言った。

「無駄だ――おまえは滅ぶことも、ほかの世界へ移ることもできない」

「何をシタッ！」

ガルデスがおびえきった表情で問いかえす。

「すべての道を、ここにつなげた――」

ユーリィは超然とした態度で答えた。

その瞬間、ガルデスは同じ言葉をくりかえしだす。

「ダガ、シカシ……コノチカラ、アレバ……ナンドデモォッ！」
「そう……なんどでもくりかえす」
ユーリィの前で、ガルデスは同じ言葉、同じ動作をくりかえす。
「ダガ、シカシ……コノチカラ、アレバ……ナンドデモォッ！」
「過去へとつづく未来を、おまえは永劫にまわりつづけるんだ――」
ユーリィは、ガルデスの運命を告げる。
過去と未来がつながり、ひとつの輪になった状態の運命を――こいつはくりかえす。
自分で言っていたことだ。
「どんな選択をしても同じ道に通じていて、ひたすらそれを行くしかない場合がある。それを運命という――」
父のラトフに化けて教えてくれた世界だった。それにみずから、ガルデスは嵌まっている。
「ダガ、シカシ……コノチカラ、アレバ……ナンドデモォッ！」
またくりかえしていた。
ユーリィはもうここには用がないと踵をかえし、出口へと向かう。部屋の扉を閉めるときに、もう一度だけ振りかえる。
「グァーフフフ……タ、タスケテ……クレ……タスケ……テ……」

ガルデスは同じ動作をくりかえしながら、その呪縛に声をふるわせていた。
ユーリィは扉を閉める。
そして元の世界に戻るため、ふたたび闇の世界に溶けこんだ——。

その瞬間——ぼくの命の時間は削られる。
いよいよ、そのときがきたらしい……。

「よかった……生きてるね、ぼくたち……」
「……」
チェリンカは何も言わない。ただ黙って、あおむけになったぼくのことを見つめているだけ。力を使ったせいなんだろうか。また人形のようになっている。
神殿の頂上で目覚めたぼくは、そばにチェリンカがいてくれてほっとした。
「終わったよ、チェリンカ……やっと全部……帰ろう……家に帰ろう……」
ぼくはそう言って、立ちあがる。
頂上の中央に、光を失ったクリスタルが見えた。その中におかあさんの姿はない。

「……」

悲しんでる場合じゃない。チェリンカを連れて帰らなきゃ――。

ぼくは、よろめきそうになりながらも足を前に踏みだす。そうやって歩いていると、チェリンカが隣にきて支えてくれた。

「あ、ありがとう……」

ぼくは小さくお礼を言って、ふたりでゆっくりと歩む。

塔をおりて、街の中を進んだ。いろんな人が声をかけてきてくれたけど、あまり耳に届かない。

ひどく疲れていたし、早く家に帰りたかった。

でも、街の中で思いがけない再会があった。

人ごみの中に、アルが歩いている――それに気がついたぼくは、すぐにアルに声をかけようと近づいた。

だけどアルは、ぼくとチェリンカのことを無視して通りすぎていってしまう。

そのとき、ぼくは気がついた。いや、思い出した。

ここは、アルとぼくたち双子が出会ってない世界。知り合っていないという、以前とはまったくべつの歴史が流れているんだ。

ぼくは立ち去ったアルを追いかけるのはやめて、王都の出口へと足を向けた。

そのあと、街の中ではアルだけじゃなくて——近所の人たちと楽しげに話すミースの姿や、深淵の森から王都を見物にきたと思われるナッシュがきょろきょろしながら歩いている姿も見かけられた。

ふたりとも、ぼくたちの存在に気づかない。たとえ、ちらりと目が合っても——とくに変わった様子は見られない。

……やっぱり、ここはみんなと出会ってない世界なのだ。あらためてそのことを実感する。

声をかけて、これからみんなと親しくなってもいいけど——でも、幸せそうに暮らしているみんなの姿を見て、ぼくはそれを思いとどまる。

寂しいけど、仕方ないんだ。

みんなを、もう巻きこみたくなかったから——だから、ぼくたちは——ぼくたちの家に帰る。

早く家に戻って、チェリンカをゆっくり休ませてあげたいから……。

王都をあとにして、荒野をふたりで歩いた。

チェリンカはずっと、ぼくの腕を支えるようにしてそばにいてくれる。

ありがたかったけど、自分の体がこんなに弱っているのにびっくりしていた。

やがてヴァール山が大きく見えるようになってきて、ぼくたちは山道を一歩ずつ踏みしめるようにしてのぼっていく。ゆっくり、ゆっくりと……。

「やっと帰って来られたね……」

村の入り口が見えたとたん、ぼくは立ち止まってよろこんだ。

おとうさんたちが天然石を積みあげてつくった家が、ちゃんと残っている。ぼくたちが旅をしていたあいだ、何も変わらずに。

「なんか、すごくなつかしい……これで、もう安心して――っ!?」

ぼくがまた足を踏みだしたときだ。急に、胸を突きあげる痛みが襲ってきた。

「ゴフーッ！　ハア、ハア、ハア……」

地面に突っ伏して、ぼくは苦しさと戦う。

でも、

「チェリンカ……ごめん、立てないや……肩を……貸してくれる？」

ぼくは、そうお願いするしかない状態になっていた。

7

「もう……いいよ……チェリンカ……ありがとう……」

ベッドで横になったぼくは、そばに付き添ってくれているチェリンカに言った。

家の中に入ったとたん、ぼくは力尽き……ベッドの中に入ってしまっている。そんなぼくを、人形のような顔をしたチェリンカが見おろしている。

ぼくは、チェリンカのことが心配になってきた。

「すこし休まないと……ずっと寝てないでしょ？」

「……」

チェリンカは何も答えない。体は動かせるみたいだけど、瞬きもせず、しゃべることもしない。

「ほら、横になって……目を閉じて……ぼくも……すこし……眠る……よ……」

ぼくはそう言うのが精一杯だった。あまりに疲れていたせいで、チェリンカが休むのを見届けることなく、深い眠りに落ちてしまった。

どのくらい寝たのだろう……。
休めば、すこしは回復すると期待したけど、そうはならなかった。
やっぱり命の時間は削られているらしい。
そのことを感じながら目を醒ますと、ベッドのそばにはチェリンカが立っていた。
「ね、寝てなかったの……？」
そう訊いても、チェリンカは何も答えない。首を振って、答えようともしない。
ただ、その両手に食事の器を持っていた。
――これでも食べて、元気つけて。
そう言われているような気がした。ぼくは体を起こして、その器を受け取る。湯気が、ぼくの顔を包みこんだ。
ほとんど料理なんかしたことのないチェリンカが、ぼくのために作ってくれた。
それは――『しましまリンゴ』を煮こんだスープだった。
しましまリンゴは、ぼくの大好物。それをチェリンカはおぼえてくれていたんだ。
おかげで、すこしだけ食欲も出てきた。
どんな味なんだろう――。
ぼくはさっそく木さじを手にして、それを口に運んだ。
「うん……ありがとう……おいしいよ」

ぼくはひと口食べて、チェリンカに笑ってみせる。
「……」
チェリンカは安心したのか、ぼくの前から離れて、自分のベッドに潜りこんだ。
やっぱり寝ていなかったのかな……。
そう思いながら、チェリンカの作ってくれたしましまリンゴのスープを見つめる。
おいしいと言ったけど……。
もう味も、熱いことも。
わからないや……。
それだけ、感覚が麻痺してる。
いや、それだけ命の時間が削られてきているんだ——。
ぼくはチェリンカの料理を全部食べて、また横になった。目を閉じて眠ろうとする。
こうして休んで、体が回復してくれたら——どんなにいいだろう。
願うのはそればかり。
だって、チェリンカをひとり残して、ぼくは消えてしまうわけにいかないから。
でも、しばらくして体じゅうに猛烈な痛みが走った。
「ぐっ!? ——っ! ——っ! ——っ!」
息ができないくらい苦しい。

「ひゅー、ぜー、けふっ、けふっ……はーっ……」
身を起こして、必死に息を整えた。
落ちついてから隣を見ると、チェリンカも身を起こしてこちらを見ている。
「チェリンカ――お願いがあるんだ……」
ぼくは、それを最期のお願いにするつもりで言った。

紅い月の光に照らされ、ぼくは土の上で横になった。
なつかしい土のにおいを感じとることはできなかったけど、土の感触は、まだかすかに背中に伝わってくる。
「ちょっと寒いけど……いい気持ちだね……」
「……」
チェリンカは、ぼくのそばで腰をおろしている。
「ああ、なんてきれいなんだろう……」
夜空に輝く真っ赤な月。それが、なぜだか今夜はすごくきれいに見える。
「いつも……シエラの光ばかり見てて……気がつかなかった……」
また鬼火を見たいと思ったけど、あの丘まで行くだけの力はなかった。途中で倒れて

しまい、あおむけになっている。
残念だったけど……。
でも、代わりに紅い月がきれいに見えるだけでも幸せかもしれない。
「チェリンカ――ごめんね……もう……ダメみたい……」
「……」
「ぼく……頑張ったんだけど……こんどは勝てない……みたい……」
「……」
「ごめんね……もう……終わりにしようと思うんだ」
「……」
「やっと、しずかに暮らせると思ったのにね……ぼくにはもう……時間がないみたい」
紅い月を見ながらそう言ったあと、またチェリンカのほうを見る。
……えっ？
ぼくはチェリンカの異変に気づいた。顔の表情がひとつも動かないチェリンカの目から、光るものが流れ落ちている。
「チェリンカ……泣いてくれるの？」
ぼくはちょっと驚いていた。
チェリンカは涙を拭わず、ぽろぽろと泣きながら――ぼくのことをじっと見おろして

いる。
「ありがとう……ごめんね、約束破って……ずっと、いっしょだって言ったのにね……お墓はいらないから……あんなに辛いことしなくていいからね……」
ほかに言い残すことはないだろうか。そう思うぼくだけど、頭の中がぼんやりしてきた。
……そろそろのようだ。
「何だか……眠くなってきちゃった……もう……いくよ……」
ぼくは最期にそう言って、目を閉じようとした。
すると、チェリンカの胸からまばゆい光が放たれる。ぼくは、また目を開けた。
「だ、だめだよ……力を……使ったら……」
ぼくは、しずかに首を振る。
輝いていたのは、チェリンカの胸にあるペンダントだった。ぼくの言うことを聞いてくれたのか、チェリンカはそのペンダントの光を弱めてくれる。
「これ以上……大切なものを削らないで……残りは全部……チェリンカが使っていいんだ……ぼくの分も……すべて……」
それが、ぼくからの願い——そう、遺言だ。
「ああ……なんで……こんな世界なんだろう……どうして……ぼくたちの前にはこんな

道しか……」

なぜか泣きたくなってくる。

双子として生まれてきて、ぼくたちは幸せをつかめなかった。大いなる力を得たせいで、その代償を背負うことになって、闘いの中に身を置くことになって、それで……。

それで……。

ぼくの命が終わろうとしている。意識が闇へと落ちはじめていく。

ふたたび、チェリンカが立ちあがった。大きな光が放たれる。

「チェリン……カ……？」

ぼくは驚いて、目を開ける。

——どうしたんだ、急に体が動くようになった。

命の時間もみるみる増えていって、ぼんやりしていた頭もすごくはっきりしてくる。

気がつくと、ぼくは体じゅうに力を取り戻していた。

まさか——。

ぼくは、あわてて立ちあがる。

チェリンカが、空に舞いあがろうとしている。どんどん光が大きくなる。その光は、すべてぼくに向けられていた。

チェリンカが自分の命を——ぼくにわけ与えてきてるにちがいない。

「そんな……だめだって言ったじゃないか……それ以上、削ったら……」
ぼくの声なんか聞かず、チェリンカは光をまとったまま舞いあがっていく。
「行かないで……チェリンカ……」
戻ってきてほしいと願った。
でも、その願いを聞いてくれそうにない。
チェリンカは空中で停まって、ぼくを見おろす。そのくちびるが、すこしだけ動いている。
「何？　聞こえないよ！　チェリンカ！」
ぼくは大きな声で訊きかえした。
でも、それっきりだった。
そのあと、すぐに光が強くなって――。
それが弱まったときには、チェリンカの姿はどこにもなかった。
完全に消えてしまっている。
「ああっ……」
ぼくは信じたくなくて声を出す。
それからしばらく、何度もチェリンカの名を呼んだ。だけどチェリンカは、二度と姿をあらわさない。

代わりに光の弱くなったペンダントだけが、ぼくの手元に落ちてきた。
ゆっくり落ちてきたそれを、ぼくは両手でつかみとる。
「なんで……ぼくなんかに……。自分のためだけに使ってって言ったのに……これじゃあ、何にも、ならないじゃないかっ……。お姉さんぶるなら……もっ……と……しっかり……」
ぼくはペンダントを握りしめて言った。
もうペンダントのクリスタルは輝きを失い、ただの石ころになってしまっていた。
「チェリンカぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
夜空の紅い月に向かって叫ぶ。ぼくは叫ぶ。叫びつづけた——。

8

ぼくの命の時間は、延ばされてしまった。
こんなはずじゃなかったのに……。
ぼくは誰もいない村で暮らすことになった。また独りぼっち……。
こんどこそ、ほんとうの独りぼっち。
前はチェリンカの姿があったから、ひとりでも頑張れたんだ。でも、そのチェリンカ

が消えてしまったいまは、何を支えに生きていけばいいんだろう。
残された者にできることは、ぼんやりと流れていく日々をすごすだけ。生かされていることに何の感動もおぼえず、何かを考えているような、あるいは何も考えていないような曖昧な時間の中に身をただよわせているだけ。
今日のぼくは村の広場に出て、そこを目的もなく歩きつづけた。
気がつくと、端っこのほうにたどり着いている。
立ち止まって、振りかえった。村全体が見わたせる。
——ここの位置から村を見るのは、はじめてだな……。
なんて、どうでもいいことを考える。
村は相変わらずしずかで、あのころのような騒がしさがちっともない。
人数は少なかったのに、にぎやかだったあのころ。
ぼくたちは、まだ子供で。
家の前には、いつも薪割りをしているおとうさんの姿があった。
それを近くで見ている小さいころの、ぼく。
「ありがとう、アル——このペンダント、ユーリィに見せてくる！」
チェリンカが、アルの家から出てきた。
そうそう、この光景……おぼえてるよ。

それでチェリンカは、ぼくたちのもとに駆けよろうとして、途中で転んでしまうんだよね。

それを見て、思わず笑ってしまったぼく。

チェリンカは怒ってる。

「そんなに怒らないでよ……だって子供のころのチェリンカって、すぐ転ぶんだもん」

ぼくはあのころに戻ったように、くすりと笑う。

すると、想像の中でよみがえった子供のチェリンカがこっちに歩いてきた。何かを探すように地面を見まわしている。

ああ、アルに作ってもらったペンダントを落としたんだね。

ふと見ると、それは——ぼくの目の前に落ちている。

拾ってあげよう。

なぜか余計なことをしたくなって、ぼくはそれに近づいて前かがみになる。そのとき、ぼくが持っているペンダント——チェリンカの形見が地面に落ちて、それの横に並ぶような格好になった。

「……」

ぼくはそれを拾うのをやめた。しばらく、そうしておきたくなった。

並んだふたつのペンダントが、何よりも可愛く見えてたから——。

ひとつは、現実のチェリンカが遺した物。
もうひとつは、いまのぼくが想像している子供のときのチェリンカの物。
もし、これをぼくが拾ったら――せっかく思い出したなつかしい光景も消えてしまうような気がした。
「ふふ……大丈夫？　ほら、ここに落ちてるよ」
目の前にふたつ落ちているペンダント。
その前までやってきた子供のころのチェリンカは、じっと見おろしている。何だか、迷っているようにも見えた。
「どうしたの？」
ぼくは思わず、声に出して訊いた。
するとチェリンカは、おもむろにペンダントをふたつとも拾いあげた。そしてこっちに歩みよってきて、そのひとつをさしだした。
「えっ？　ぼく……に？」
ぼくは、あせった。
思い出の中からよみがえっているはずのチェリンカが、現実に存在しているぼくの落としたペンダントに触れて、それを手に持っている。
あり得ない光景が、たしかに目の前にある。

——ほんとうに、これは思い出の中のひとつなの？

ぼくは疑いを持ちながら、おそるおそるペンダントのひとつを受け取った。

それを見ると、いままで石ころだったはずのクリスタルが輝きを取り戻している。

「そんなことって……」

ますます信じられなくて、ぼくはまた声に出す。

もしかして目の前のチェリンカは——思いかえしている幻じゃない？

まさか、現実に存在している？

でも——そんな気がして、顔をあげる。

子供のときのチェリンカは、ぼくを見ている。まるではっきりとそこに実在しているかのように、ぼくを見ている。

そして——なんと、成長したときのあの声で伝えてきた。

「あなたが望めば、それが世界の真実となる……わたしたちの世界を創りましょう……わたしたちは、何を望むの？」

ぼくは夢を見ているのだろうか——。

思い出の中から引っぱりだされてきたはずの幼いチェリンカは、あのときクリスタルレコードで言ったことと同じことを口にしたのだ。

ぼくは全身にふるえをおぼえた。

あのときは言えなかったけど——いや、いまここで言わないと、もう機会はないかもしれない。これが最後に与えられた機会だとしたら——。

「……ぼ、ぼくは……」

声がふるえている。

「ぼくたちは……」

目の前の幼いチェリンカに救いを求めるように、ぼくは言葉をつづけた——。

終章

「えぇ――――っ！　わたしが行くのぉ？」

突然、家の中からチェリンカの大きな声が響いた。

――どうしたんだろう？

ユーリィは家の扉を開けて、中に入ってみる。すると、六歳くらいの女の子が振りかえる。チェリンカだ。玄関に立って、水汲み用の桶を手に提げていた。そしてユーリィの顔を見たとたん、

「あ――――っ！　もぉー、どこ行ってたのよぅ!?」

怒った顔で、ユーリィのことをにらみつけてくる。

ふと、そこで気づく。

チェリンカと視線の高さがいっしょだ。――ということは、自分も子供のころに戻ったらしい。

思い出の中に入れてくれたんだろうか……

ユーリィがそんなことを考えていると、

「もうすこしで、わたしが水汲みに行かされるトコだったんだからねっ……ほら！」

と、チェリンカが桶をユーリィに突き出してきた。

「おかぁーさぁ――ん！　ユーリィ、帰ってきたよぉ！」

ユーリィは桶を無理やり押しつけられたあと、その桶を見ながら考えていた。

思い出の中に……こんな場面あったのかな？
「シッシッシッ、おかーさんに怒られ……ん？」
ひとりでしゃべりつづけていたチェリンカが、ユーリィに顔をよせて匂いをかいだ。
「んあー、ユーリィ！　臭ぁーいっ！」
「そ、そうかな……」
ユーリィは首をかしげる。
思い出の中は、匂いまでも伝わるんだろうか。いや、そんなはずは……。
とまどっていると、
「――ふぅ、なんとか薪割りにもメドがついたよ」
父親のラトフがうしろにあらわれる。家の外から戻ってきたのだ。
「おお、ユーリィも帰っていたのか」
ユーリィが振りかえると、見あげるほどの父が立っている。それは本物の父のように感じられてしまう。
「んん？　どうした、なにを惚けてる？　しっかりしろ、ユーリィ」
ぼんやりしていると、頭を強く撫でられた。
「もう、だめですよ――そんなに強く撫でたら！」
家の奥から女の人の声がする。

チェリンカがその声がしたほうに向いて言った。
「聞いてよ、おかーさん！　ユーリィったらね、すっごい臭いんだよ」
「お……おかあさん？」
ユーリィはびっくりする。
――これは、思い出の再現なんかじゃない！
あわてて家の奥に視線を向けた。
すると、奥からアーチェスが出てきた。
「おかあ……さん……」
思わずつぶやく。
「なあに、ユーリィ？」
あたたかい声がかえってくる。
「……」
そのやさしいまなざしを、じっと見つめかえす。
……あの紅く染まったクリスタルの中に閉じこめられていたおかあさんと、同じ人だ。
でも、あのときみたいに痩せ衰えてなくて、頬もふっくらとしている。
「……どうしたの？」
アーチェスは腰をおろし、ユーリィと同じ目の高さで見つめかえした。その美しい顔

だちは、とても幻なんかに思えない。

「――おかあさんっ！」

ユーリィは、その母の胸に飛びこんだ。

「わ、わ、どうしたの？　どっか痛いの？」

うしろで、チェリンカが驚いている。

でも、ユーリィは返事できなくて、母の胸で泣くばかり。

「……お……かあさん……おかあさん……」

「何か、辛いことがあったのね……でも、もう大丈夫よ……ね？」

アーチェスがユーリィを落ちつかせようと、その頭を撫でながら言う。そして、そばにいたチェリンカも自分のほうに抱きよせた。

「お、おかーさん？　わたしのほうは、なんともないよ？」

チェリンカがそう言っても、アーチェスはふたりを離そうとしない。両手でしっかり抱きしめる。

「どうしてかしらね……あなたたちをこうしてあげたくて、仕方ないの……」

ラトフが咳払いした。

「……まだ、だめです」

ふたりを抱きしめながら、アーチェスは首を振る。

「おとーさん、どうしたの？」
チェリンカが訊ねると、アーチェスがかわりに答えた。
「この人もね、あなたたちをこうしたいんですって……」
「おとーさん、かわいいっ！」
チェリンカが大きな声を出す。
ラトフは照れて、そっぽを向いていたが。
「か、かわいい？　わ……わたしが、かね？」
「うん！　あはははは！」
「そうか、かわいいか……あっはっはっはっ！」
ラトフはたまらず、豪快に笑いだした。
ユーリィの家族が全員そろっている。これは夢かと思うような光景だ。
そんな夢のような状況に、さらに信じられない訪問客たちがあらわれる。
「こんにちは――」
テテオの声だった。
ユーリィが顔をあげて玄関のほうを見ると、入り口にアルハナーレムとミースをお供にした十二歳のテテオが立っている。
「あら、おじゃまでしたでしょうか？」

テテオが遠慮がちに訊ねると、アーチェスが立ちあがって、
「いいえ、テテオ様。ようこそおいでくださいました」
「テテオ様、コルカ王はお元気ですか？」
と、ラトフがつづいて挨拶した。
「はい、お父様もラトフ様によろしくと申しておりました」
テテオは一礼して答える。そしてユーリィたちのほうに視線を向けて、微笑む。
「じつは、わたし――これから深淵の森のナッシュさんのところへ遊びにうかがう途中でして、もしよろしければユーリィさんとチェリンカさんもごいっしょにいかがかと、お誘いにまいりました」
「わぁー、いくいく！　テテオお姉さん、いっしょに連れていってー」
チェリンカがさっそくテテオのそばに駆けよって、はしゃぎだす。
そのあと、
「ユーリィ、あんたも行くでしょ？」
と、振りかえったチェリンカが念を押してくる。
ユーリィは父と母の顔を見あげた。
「行ってこい、ユーリィ。テテオ様をしっかりお守りするんだぞ」
「ふたりとも気をつけてね」

ラトフとアーチェスが、笑顔で許可を出してくれる。
「ラ、ラトフ様――ミースたちだけじゃ、心配だというのです？」
「そうである。テテオ様の世話係主任に、宮廷魔道師の我もいるのである。安心な旅になるはずである――」
テテオのうしろに控えていたミースとアルハナーレムが、そろってラトフに言いかえす。
「ははは、そうだった。王城で働くふたりは、コルカ王が絶賛されるほど優秀な護衛だったな。たまにコルカと会ったときに話は聞いているぞ」
「ふにー、ラトフ様もお人が悪いのです」
「しっかりコルカ王から情報を仕入れているのに、あえて言ったであるか」
「むろんだ。わたしの息子はいずれ、おまえたちに負けないくらい、たくましく育ってもらうつもりでいるからな。いまからふたりへの競争心を持たせるのも、父親としては必要な教育の――」
「まあ、あなた――ユーリィを筋骨隆々にさせるのは、わたしは絶対反対ですよ」
「……えっ？」
ラトフは、横からアーチェスに釘を刺されて目が点になる。
それを見て、アルハナーレムとミースが笑いだす。やがてアーチェスとラトフもつづ

いて笑いだした。
大人たちが楽しそうに話している中で、チェリンカはユーリィの手を引っぱる。
——言ったでしょう？
また、すぐ逢えるって……。
その言葉を耳にして、ユーリィは目を見開く。
チェリンカが、大人たちに聞こえない声で伝えてきたのだ。
目をしばたたかせていると——チェリンカはテテオと並んで立ち、ユーリィのほうを笑顔で見つめる。こんどはふたりが、こっそり声をそろえて、
——おかえり、ユーリィ——
と、伝えてきた。
ふたりとも、すべて知っていたのだ。
ここがユーリィの選んだ世界で、もうゆるぎない確実に固定された新しい歴史の流れだということを——。

ふたりの言葉からそれを理解したユーリィは、
（うん、ただいま……）
とびっきりの笑顔で答えたのだった。

（おわり）

あとがき

ふぅ〜、おつかれさまです。

『ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル　リング・オブ・フェイト　僕らの世界』の上下巻、ここに完結いたしました。

今回の下巻では、ゲームに出てこなかった〝ナッシュの過去〟について触れてみました。これは打ち合わせのときにスクウェア・エニックスさんで裏設定の資料を読ませていただいてから、ぜひ書いてみたいと思っていたエピソードです。

異種族の友情というか、家族愛みたいな（本人たちはそこまで意識していないでしょうけど）、そういう関係性にまで近づくようなニュアンスが皆さんにも伝わればいいなと思います。

さて、ここからは近況などを……。

僕は最近、３ＤＣＧにハマッています。

その昔、映画の『ジュラシックパーク』や『ターミネーター2』などを観たときから、コンピューターで映画が作れる時代が訪れるなんて夢のようだと思っていました。

コンピューター画面に、俳優となるキャラクターモデルを立たせて、芝居の動きをつけて、台詞の音声データとリップシンクさせて、背景となる舞台セットを用意して、カメラアングルと照明を決めて、最後にレンダリングという撮影に入る。

まさに、映画のスタジオがPCの中に引っ越してきたような感じです。

本格的にハマッたのは、朗読劇とスライドショー上映を組み合わせた劇団ボイスウィザードの公演を行っていたときでした。その当時、スライドの静止画像をたくさん作りたくて（一回の公演で五百枚くらいイメージ画像を使用していたので）、どうやれば劇の物語に合った画像がもっと作れるのだろう、何かいい方法はないかとアレコレ制作ツールを探していたのがきっかけです。そんなときに出合ったのが3DCGでした。

3DCGは、キャラクターを一度モデリングして（作って）しまえば、もう毎回、新たにキャラクターを描き起こす必要がありません。キャラクターのポーズを変えて、背景を変更していけば、驚くほど短時間にたくさんの枚数のCG画像が作れます（実際には、大変多くの設定作業を必要とするのですが）。

その可能性の大きさを感じた瞬間、「これだぁ！」と思って飛びつきました。そして次第に当初の目的だった公演のスライド作りより、3DCG作りそのものにのめりこん

でいったのです（笑）。

３ＤＣＧアニメーションの魅力は、簡単にいうと〝デジタル人形劇〟なんじゃないかと思っています。精巧なフィギュアが動いて、僕たちの住んでいる世界とはまたべつの異世界の住人のように暮らしています。いや、そんな感覚がするのです。たとえるなら、妖精さんたちの世界かな（アトリエシリーズじゃないよ）。

そして、その妖精さんたち――いえ、デジタルフィギュアたちがお芝居の物語を見せてくれる。人間が演じる映画とは一風変わった世界がそこに生まれるのです。まさに、デジタル人形劇――。

なんというか、鉄道模型のジオラマの世界を覗いているというか、ミニチュアの別世界を旅しているような楽しさがあるのです。

僕がハマッた理由も、もともとミニチュアを使った日本特撮映画のファンだったからもあるのでしょう。精巧なミニチュア模型を眺めるのが大好きでしたから。

そんな魅力に取りつかれたことで、いまは観る側では飽き足らず、とうとう自分でも３ＤＣＧソフトを購入して勉強をはじめだしました。

いやぁ、難しいです。モデリングとかうまくいかず、既製品を動かしてみて悦に入るだけの初心者ですが、でも、すでに３Ｄアニメーションムービー作品を一本完成させました。ホラー物ですけど、インターネット上で観れます。

もし興味のある方は、劇団ボイスウィザード（http://www.voice-wizard.com）までアクセスしてみてください。仕事の合間を縫って、ちょこちょこ今後も進めていきます。

というわけで、そろそろ今回もお礼のご挨拶をば――。

メインキャラクターデザイン／アートディレクターの板鼻利幸さん、ビジュアル面での監修をいただきまして、ありがとうございました。そして今回も上巻から引きつづき日数のない中でがんばってくださったイラストのイノコさん、お疲れさまです（聞くところによると、アトリエシリーズのファンだとか。今度、もし機会がありましたら、そちら関係のお話などもしましょうねっ）。

さらに上巻から内容面でのアドバイスをしてくださったスクウェア・エニックスの三枝浩行さん、豊富な裏設定の資料を見せていただいたうえに、数々のアイデアもご提供くださり、感謝いたします。プロデューサーの前田記代子さん、宣伝部の皆さま方、お忙しい中を何度も原稿チェックしてくださり、ほんとうにありがとうございました。

そして師匠の小山高生先生も、ぶらざあのっぽのホームページで今回の小説を宣伝してくださり、ありがとうございます。シナリオライターたちの夏の講習、がんばりますので、よろしくお願いいたします～です。

あと、東京の板橋（常盤台）にある居酒屋ケンケンの矢木マスターも、小説の宣伝を

してくださってありがとうございました。また飲みに行きますので、おいしい特製カレーを食べさせてねっ♪

――というわけで、最後に読者の皆さまもありがとうございました。とくに、上下巻ともに読んでくださった方々、ほんとうにお疲れさま&ありがとうございます！

また、どこかでお会いいたしましょう！

工藤（くどう）　治（おさむ）

■ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先
〒102-8431東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン ファミ通文庫編集部
工藤 治 先生
イノコ 先生

■ファミ通文庫の最新情報はこちらで。

エンターブレインホームページ
http://www.enterbrain.co.jp/fb/

■本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ。

エンターブレイン カスタマーサポート 0570-060-555
(受付時間 土日祝日を除く 12:00～17:00)
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp

ファミ通文庫
ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル
リング・オブ・フェイト 僕らの世界 下

二〇〇八年八月一一日 初版発行

著者 工藤 治
発行人 浜村弘一
編集人 森 好正
発行所 株式会社エンターブレイン
〒一〇二－八四三一 東京都千代田区三番町六－一
電話 〇五七〇－〇六〇－五五五(代表)
編集 ファミ通文庫編集部
担当 宮地千里
デザイン 伸童舎
写植・製版 株式会社オノ・エーワン
印刷 凸版印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります。

F6
1-2
795

©2007 SQUARE ENIX CO.,LTD. ALL Rights Reserved. CHARACTER DESIGN:Toshiyuki Itahana
©Osamu Kudo Printed in Japan 2008

ISBN978-4-7577-4287-1

ISBN978-4-7577-4287-1
C0193 ¥660E

9784757742871

1920193006605

定価 本体660円＋税

発行○エンターブレイン

父ラトフの仇・チャスペルに対して使った力のせいで、魂の抜け殻となってしまったチェリンカ。でもテテオ王女の魂によって、無事ユーリィの元に戻ることができました。そして二人はアルハナーレムとの再会も果たし、コルカ王に会いに城へと行くのですが……そこには偽のアルハナーレムが!?
テテオ王女の魂が見守る双子の物語、いよいよ完結編です。

Famibu Bunko